


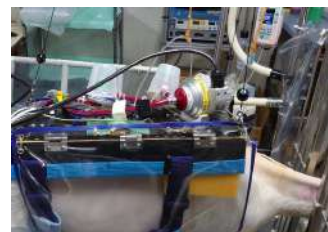






医学部

所属・職位	医学部医学科放射線医学講座・教授	
氏名	浅山 良樹 (Asayama Yoshiki)	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、2002年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	放射線医学	
研究キーワード	画像診断、低侵襲治療	
研究内容	<p>①病理学的情報に基づいた画像解析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・肝細胞癌の脱分化過程におけるvascularityの変化を病理学的、画像的に解析した。腫瘍のvascularityは高分化から中分化までは増殖活性と正比例していたが、中分化から低分化にかけては反比例していた。低分化では嫌気性代謝が中心になっていると考えられた (論文1)。 <p>②イメージングバイオマーカーとしての放射線画像の役割探求</p> <ul style="list-style-type: none"> ・腫瘍形成型肝内胆管癌の予後と造影CT遅延相の増強の程度との関連を検証した。造影遅延相の所見で病変の3分の2以上が高吸収となる群はscirrhous typeに一致し、多変量解析では同群は独立した予後不良因子であった (論文2)。肝外胆管癌でも同様の結果であった (論文3)。 <p>③新しい画像診断法の開発と臨床応用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・MRIの新しい分子イメージングの一つであるAPTイメージングで子宮体癌のグレードを予測可能であることを報告した (文献4)。 <p>④新しい低侵襲治療法の手技の導入と工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・肝細胞癌に対する球状塞栓物質 (ビーズ) を用いた経動脈的化学塞栓療法 (DEB-TACE) の治療効果予測因子を解析した。治療効果不良となる因子は小さな腫瘍サイズ (2cm未満) および病変の局在 (segment 4/1) であった。適切な症例選択の重要性が示唆された (文献5)。 ・腎癌凍結療法の術後腎機能予測モデルを開発し、慢性腎障害ステージの増悪の予測正診率は72%であり本システムは腎機能低下の予測に有用であることが示された (文献6)。 	
研究業績・アピールポイント	<p>これまで放射線画像解析や画像バイオマーカーの創出に取り組みその成果を報告してきた。また凍結療法など新たな低侵襲治療法を積極的に導入し、その効果や合併症を報告した。</p> <p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2008年、Arterial blood supply of hepatocellular carcinoma and histologic grading: radiologic-pathologic correlation. AJR Am J Roentgenol. 2006年、Delayed-phase dynamic CT enhancement as a prognostic factor for mass-forming intrahepatic cholangiocarcinoma. Radiology. 2017年、Prognostic significance of contrast-enhanced CT attenuation value in extrahepatic cholangiocarcinoma. Eur Radiol. 2018年、Proton Transfer MR Imaging of Endometrioid Endometrial Adenocarcinoma: Association with Histologic Grade. Radiology. 2017年、Predictors of therapeutic effect of transarterial chemoembolization using drug-eluting beads for hepatocellular carcinoma. Clin Radiol. 2019年、Usefulness of a Pretreatment CT-Based Modified RENAL Nephrometry Score in Predicting Renal Function After Cryotherapy for T1a Renal Mass. Cardiovasc Intervent Radiol. 	

所属・職位	医学部附属臨床医工学センター・教授	
氏名	穴井 博文 (Anai Hirofumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1997年9月	
SDGs目標	  	
研究分野	心臓血管外科学、人工臓器学	
研究キーワード	補助循環、人工心臓、産学官連携、医工連携	
研究内容	<p>●人工心臓開発の基礎研究</p> <p>ターボポンプを用いた人工心臓開発における基礎研究を行った。特に溶血の軽減に関して、比速度（設計回転数）の異なる軸流式血液ポンプを試作し、溶血試験で評価を行った。工学的手法に基づく比速度を逸脱しても低回転で設計の方が溶血が軽度であることを明らかにした。また10,000 rpm以下で設計すれば溶血は問題にならないことを示唆した（論文1.）。続けて人工心臓用の斜流式血液ポンプの試作を行った。引き続き斜流式血液ポンプの開発を行った。</p> <p>●体外循環用小型斜流式血液ポンプの開発</p> <p>JMS社（広島市）との共同研究で人工心肺に用いる体外循環用斜流式血液ポンプの開発を行った。自らが研究してきた斜流血液ポンプのアイデアをもとに1996年から共同研究を開始し、2002年にMixflow®を市販、臨床使用に至った。</p> <p>●斜流式血液ポンプの長期使用へ向けての研究</p> <p>JMS社と開発したMixflowをECMOやLVADなどの補助循環用血液ポンプとして使用するための改良と実証研究を行っている。インペラ、ケーシングの設計変更を行い、成山羊を用いた慢性動物実験における評価を行っている。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>機械的補助循環、人工心臓開発の研究をもとに開発したJMS Mixflow®を上市するに至った。2012年からは、産学官連携による医療機器開発のための企業研究者支援事業に取り組み、東九州メディカルバレー構想事業、および「地域に密着した医療現場の開放と医療機器開発情報ネットワーク拠点形成」事業をAMEDの支援を得て進めている。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1992年 Relationship between pump speed design and hemolysis in an axial flow blood pump. Anai H, Wakisaka Y, Nakatani T, Taenaka Y, Takano H, Hadama T Artificial Organs, 20: 564-567 1998年 ターボ式血液ポンプ3種の溶血特性の比較検討. 穴井博文, 葉玉哲生, 荒木賢二, 他人工臓器 27 (1): 59-62 <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> 1995年 第33回日本人工臓器学会大会「論文賞」受賞 1996年 第34回日本人工臓器学会大会「JSAO - grant」受賞 2003年 第31回人工心臓と補助循環懇話会「2003年最優秀人工心臓賞」受賞 	



所属・職位	医学部医学科救急医学講座・教授	
氏名	安部 隆三 (Abe Ryuzo)	
取得学位	博士 (医学)、千葉大学、2006年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	救急医学, 集中治療医学
研究キーワード	敗血症, 心肺蘇生, 臓器不全, 血液浄化法, 体外式膜型人工肺 (ECMO), 人工肝補助療法
研究内容	<ol style="list-style-type: none"> 1) 【敗血症の病態と治療】 敗血症の重症化における各種サイトカイン動態の関与, サイトカイン関連遺伝子多型の転帰への影響, 血中サイトカイン吸着除去の臨床効果に関する研究を行っている. 2) 【心肺蘇生と蘇生後治療】 心拍再開後の蘇生後脳症の転帰を予測するバイオマーカーに関する研究, 低体温療法による心停止後症候群の制御に関する研究, 体外循環を用いた心肺蘇生 (Extracorporeal cardiopulmonary resuscitation: ECPR) に関する臨床研究, 院内急変対応 (Rapid Response System) 活動データを用いた臨床研究を行い, 研究代表者として科学研究費を取得してECPRの研究を進めている. 3) 【ECMO (Extracorporeal membrane oxygenation, 体外式膜型人工肺)】 新型コロナウイルスパンデミック以前から基礎実験・臨床研究を行い, ECPRに関する臨床研究, ECMO回路構成に関する基礎実験, ECMOチーム活動の臨床効果について報告している. また日本ECMOnetの立ち上げに参加し, COVID-19に対するECMO治療や日本ECMOnetの活動に関して報告している. 4) 【急性肝不全に対する人工肝補助療法】 血液浄化法を用いた人工肝補助療法によって肝性昏睡からの意識覚醒が得られることを報告し, 現在, 厚生労働科研「難治性の肝・胆道疾患に関する調査研究班 (劇症肝炎分科会)」にて更に研究を進めている. 5) 【病院前救急医療】 日本医療研究開発機構 (AMED) 研究課題「救急の現場にて傷病者が早く正しい医療を受療できる技術開発プロジェクト」「救急医療予測アルゴリズム研究開発」に研究開発担当者として参加, 新たな救急システム開発を進めている.
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ● Higashi A, et al. Shortening of low-flow duration over time was associated with improved outcomes of extracorporeal cardiopulmonary resuscitation in in-hospital cardiac arrest. <i>J Intensive Care</i>. 2020; 8:39 ● Japan ECMOnet for COVID-19. Nationwide system to centralize decisions around ECMO use for severe COVID-19 pneumonia in Japan (Special Correspondence). <i>J Intensive Care</i>. 2020; 8:29. ● Fujiwara K, et al. High recovery rate of consciousness by high-volume filtrate hemodiafiltration for fulminant hepatitis. <i>Hepatol Res</i>. 2019; 49: 224-231 ● Hayashi Y, et al. A prehospital diagnostic algorithm for strokes using machine learning: a prospective observational study. <i>Sci Rep</i>. 2021; 11:20519. ● 基盤研究(C)「ECPR症例における神経学的予後予測バイオマーカーの網羅的探索に関する研究」2020-2022年度 ● 厚生労働科学研究費補助金「難治性の肝・胆道疾患に関する調査研究」班, 2020-2022年度 ● 日本医療研究開発機構(AMED) (先進的医療機器・システム等技術開発事業基盤技術開発プロジェクト)「救急医療予測アルゴリズム研究開発」, 2019-2022年

所属・職位	医学部医学科薬理学講座・教授	
氏名	石崎 敏理 (Ishizaki Toshimasa)	
取得学位	博士(医学)、京都大学、1998年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	薬理学・細胞生物学	
研究キーワード	アクチン細胞骨格・創薬・組織線維化・腫瘍生物	
研究内容	<p>○アクチン細胞骨格を調整するRhoシグナリングの生体での機能 アクチンは哺乳類細胞で最も多く発現しており、個体における生体恒常性にも重要な働きをしていることが報告されている。細胞外からの様々な刺激に応答して、アクチン単量体は重合し線維を形成する(アクチン細胞骨格再編成)。このアクチン線維形成にはRho family GTPaseが寄与していることが明らかになっている。その中でもRhoは、下流標的蛋白質(ROCK, mDia等)を介し、アクチン線維形成の形成・再編成に主要な働きをしている。現在は、皮膚・心臓・肺・腎臓等の各組織において、Rho標的蛋白質を欠損させ、生体におけるRho標的蛋白質の機能解析を通じ、アクチン細胞骨格再編成の果たす生理的・病態生理的な役割を解析している。</p> <p>○創薬 特発性肺線維症とは、肺泡に“傷”ができ、その修復のためにコラーゲン等が増加することで間質が肥厚し、その結果呼吸障害を引き起こす根本的治療法のない疾患である(特発性肺線維症は、「特発性間質性肺炎」の一種で、国の指定難病に指定)。本疾患の治療を目的に、治療標的分子の同定および治療薬候補化合物の探索を実施している。</p> <p>○新たな創薬プラットフォームの構築 これまでは低分子化合物が「治療薬」の大半を占めていたが、昨今は中分子薬や抗体医薬の開発が進み、現在では様々なモダリティのものが治療に用いられている。それぞれのモダリティは、長所・短所を持ち合わせており、それらを補いながら新規性が高く、効果的にかつ安価に治療薬の開発を目指し、そのプラットフォームの構築を実施している。</p>	
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> 1. Abe A., et al. Disruption of Actin Dynamics Regulated by Rho Effector mDia1 Attenuates Pressure Overload-Induced Cardiac Hypertrophic Responses and Exacerbates Dysfunction. <i>Cardiovasc Res.</i> Jul 9; cvaa206 (2020) 2. Thumkeo D, et.al. mDia1/3-dependent actin polymerization spatiotemporally controls LAT phosphorylation by Zap70 at the immune synapse. <i>Sci Adv.</i> 6(1): eaay2432. (2020) 3. Yamaoka M, et al. PI3K regulates endocytosis after insulin secretion by mediating signaling crosstalk between Arf6 and Rab27a. <i>J Cell Sci.</i> 129: 637-649. (2016) 4. Mizuno H, et al. Rotational movement of the formin mDia1 along the double helical strand of an actin filament. <i>Science.</i> 331:80-83. (2011) 5. Rose R, et al. Structural and mechanistic insights into the interaction between Rho and mammalian Dia. <i>Nature.</i> 435:513-518. (2005) 6. Ishizaki T, et al. Coordination of microtubules and the actin cytoskeleton by the Rho effector mDia1. <i>Nat Cell Biol.</i> 3: 8-14. (2001) 7. Uehata M, Ishizaki T, et al. Calcium sensitization of smooth muscle mediated by a Rho-associated protein kinase in hypertension. <i>Nature</i> 389: 990-994. (1997). 	

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部





医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部看護学科基盤看護学講座地域看護学・教授	
氏名	井手 知恵子 (Ide Chieko)	
取得学位	博士 (看護学)、千葉大学、1997年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	看護学 (地域看護学・公衆衛生看護学・家族看護学)
研究キーワード	地域看護活動、保健師活動方法と評価、人材育成
研究内容	<p>●<u>地域を単位とした看護活動方法に関する研究</u> 行政機関に働く保健師の活動から地域看護活動の方法や体制の特徴を検討し、地域を単位とした看護活動方法の構造について追究している。(論文3.)</p> <p>●<u>地域保健・福祉システムにおいて人々の健康を守る看護の機能や役割に関する研究</u> 行政機関等で活躍する保健師とともに、行政における看護の実践活動を分析・評価し、看護専門職の機能の見える化をはかり、実践知を構築している。(論文2.5.)</p> <p>●<u>保健師の人材育成に関する研究</u> 保健師の実務・行政能力の開発過程に注目し、人材育成としてのジョブローテーションを研究し、とくに行政組織における異動や役割分担の変更にもなっている業務の引継ぎに関して人材育成方法のツールとしてのあり方を検討している。(論文1.)</p> <p>●<u>地域看護学の教育内容と方法の練成</u> 看護基礎教育における地域看護学・家族看護学の教授方法とその効果について検討し、教育方法の開発を続けている。(論文4.)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>地域を単位とした看護活動の実際からの実践知を看護基礎教育活動に反映し、逆に教育活動で洗練した知を実践に反映することを目指して日々研鑽しています。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2019年、行政組織における保健師業務の引継ぎに関する研究、科学研究費助成事業 平成28～30年度・挑戦的萌芽研究 報告書 2016年、行政保健師が行う医療依存度の高い乳児への支援チームづくり.第46回日本看護学会 論文集「ヘルス・モーション」, 200-203. 2009年、中核市の保健師活動における地区活動と業務体制に関する研究、平成18～20年度 科学研究費補助金・基盤研究 (C) 報告書 2009年、大学院修士課程における地域看護学領域教育、日本地域看護学会誌、12(1)22-23 2007年、老人保健法による集団健康診査場面での保健師の行動に関する研究、日本地域看護学会誌、10(1) 72-77 <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 2000年、生活習慣に関する援助の基本、地域看護学講座成人地域看護活動.第3章、医学書院 1997年、保健指導技術 助産学講座6:助産診断・技術学II 医学書院

所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座・教授	
氏名	井上 亮 (Inoue Ryo)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1999年12月	
SDGs目標	  	

研究分野	一次性頭痛、高齢者せん妄
研究キーワード	慢性頭痛、片頭痛、薬物乱用頭痛、せん妄、脳血流、睡眠障害
研究内容	<p>・慢性連日性頭痛／薬物乱用頭痛の実態調査および発症要因の検討</p> <p>頭痛や緊張型頭痛があり、これらは有病率が高く、日常生活や仕事に支障をきたす疾患である。しかしながら、適切な自己管理がなされていない場合が多く、職場環境や日常生活環境等により容易に慢性化へつながりやすく、さらに、薬物乱用頭痛に至った場合には根本的な頭痛の対応がなされないままいたずらに時間が経過し、その間辛い状況を我慢しながら日々を送るといった状況に陥ってしまう。薬物乱用頭痛を主とする慢性連日性頭痛の実態を把握し、そのような状況にいたった因子を検討することは今後の快適な就業へつながるのではないかと考える。また、小児、思春期においても慢性連日頭痛は不登校へつながる重大な問題である。昨今、スマホの使用方による睡眠障害から不登校となる事例もあり、睡眠障害の実態やそれに伴う自律神経障害の把握も必要であろう。</p> <p>・脳血流モニタリングによる高齢者夜間せん妄の看護に関する検討</p> <p>脳血管障害を有する高齢者を対象とし、これまでの急性期管理に加え、NIRS（近赤外線分光法）装置の装着下に脳血流モニタリングを行う。NIRSモニタリング中、看護ケアやバイタルサインの変化に伴う脳血流変動有無の確認、せん妄発症時脳血流変化の確認、せん妄に対するケア実施後の症状変化および脳血流変化の把握等を行い、せん妄予防および早期発見につながるNIRS所見を検討する。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>・時間生物学に基づく急性期脳卒中患者の概日リズム再獲得に向けた看護の挑戦 (科学研究費補助金、R3～R7年度)</p> <p>・脳血流モニタリングを用いた高齢者脳血管障害患者に対するせん妄マネジメントの開発 (科学研究費補助金 H25年度～27年度)</p>

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部


医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科消化器・小児外科学講座・教授	
氏名	猪股 雅史 (Inomata Masafumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1997年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	消化器外科学、内視鏡外科学、腫瘍生物学、AIデータサイエンス
研究キーワード	低侵襲手術、人工知能、産学連携、ビッグデータ、癌治療
研究内容	<p>●内視鏡手術における人工知能を活用した腫瘍局をおよび解剖学的ランドマークの術中リアルタイム指示システム開発 (科学研究費 基盤B：研究代表者)</p> <p>内視鏡手術動画のビッグデータを用いた術中の解剖学的ランドマーク指示機能と特殊光を用いた腫瘍局在の指示機能を併せ持つ、人工知能活用の次世代内視鏡機器システムの開発</p> <p>●人工知能を用いた先進的内視鏡医療システムの開発 (AMED未来医療事業：研究代表者AMEDデジタルトランスフォーメーション事業：分担)</p> <p>安全で精緻な内視鏡手術実現のため、人工知能を用い術中リアルタイムに解剖学的ランドマーク指示しうる先進的内視鏡医療システムを開発し、社会実装を実施 (論文1、特許1、2)</p> <p>●内視鏡手術動画におけるビッグデータベースの基盤構築研究 (AMEDデータベース事業)</p> <p>内視鏡手術動画を集積したビッグデータを確立するため、AMED事業および日本内視鏡外科学会とタイアップし、産業利用可能なシステム構築を実施</p> <p>●消化器外科手術におけるCOVID-19の影響を評価するNCDビッグデータ解析研究 (厚生労働科学研究費補助金 門田班・分担)</p> <p>NCDビッグデータを用い、胃癌・大腸癌・胆嚢良性疾患におけるCOVID-19感染拡大の影響を実施件数および治療成績の観点から明らかにする</p> <p>●大腸癌における内視鏡手術の標準化に向けた大規模多機関共同研究 (AMED革新的がん医療実用化研究事業 金光班・清水班 各分担、内視鏡振興財団)</p> <p>大腸癌に対する腹腔鏡手術・ロボット支援手術の標準化に向けた多機関共同ランダム化比較試験およびNCDビッグデータを用いた観察研究による有用性の評価 (論文2)</p> <p>●抗癌剤脱毛のメカニズム解明と予防薬の開発研究 (株式会社アデランス共同研究)</p> <p>二光子顕微鏡を用いた抗癌剤誘発脱毛のメカニズム解明と、新規抗酸化剤を用いた予防薬の開発研究 (特許5)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>【代表的論文】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) Development of Endoscopic Surgery Navigated by Artificial Intelligence Inomata M, Fujinaga A, Nakanuma H, et al. Surg Technol Int, Online, 2021 2) Survival outcomes following laparoscopic versus open D3 dissection for stage II or III colon cancer (JCOG0404): a phase 3, randomised controlled trial. Kitano S, Inomata M, Mizusawa J, et al. Lancet Gastroenterol Hepatol, 2(4) 261-268, 2017 <p>【産学連携による主な共同研究および受託研究】 オリンパス株式会社、富士フイルム株式会社、株式会社アデランス、川澄化学工業株式会社、デンケン株式会社、カイゲンファーマ株式会社、株式会社日田天領水など</p> <p>【主な特許取得】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 情報処理システム、内視鏡システム、学習済みモデル、2018.11.30 特願2018-044121 2) 小矩形自動フィッティングによる検出部表示技術：2020年9月25日受理 (OU-0437) 3) 光線照射治療装置 (ピロリ菌光線照射治療装置) 2017.9.21 特開2017-164223 4) 医療用組成物 (粘膜挙上剤)：2014.10.6 特開2014-188054 5) がん化学療法誘発脱毛に対する抗脱毛用組成物 2012.3.29 特開2012-62283

所属・職位	医学部医学科小児科学講座・教授	
氏名	井原 健二 (Ihara Kenji)	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、1996年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	小児科学、臨床遺伝学、先天代謝異常症、小児内分泌学	
研究キーワード	分子遺伝学、遺伝カウンセリング、希少疾患、遺伝学的診断	
研究内容	<p>●小児の遺伝性疾患の病因・病態解析 周産期から小児期の希少疾患について遺伝学的解析による病因解明と分子生物学的手法を用いた病態解析を進めている。大分大学小児科で経験した遺伝性疾患の病態メカニズムの解明から創薬への発展に向けて本学医学部の基礎系講座と協働して進めている (論文1, 2)。</p> <p>●早老症の疫学調査研究 厚生労働省難治性疾患政策研究事業「早老症の病態解明、診断・治療法の確立と普及を目的とした全国研究」において、超稀少疾患のHutchinson-Gilford 早老症症候群の調査研究小班的班長として国内調査を実施し報告した (論文3)。また医療従事者と家族向けにHutchinson-Gilford 早老症症候群のホームページを公開した (http://square.umin.ac.jp/hgps/index.html)。</p> <p>●小児の肥満や脂質異常の長期疫学調査 大分市ではH3年度から30年以上にわたり小学校5年対象に成人期以降の生活習慣病予防を目的とした健診を実施している。この健診データをもとに大分市の10歳児学童の小児肥満と血清脂質に関する27年の長期動向を日本動脈硬化学会の英文雑誌に報告した (論文4)。</p> <p>●新生児マス・スクリーニング保存ろ紙血を用いた臨床研究 新生児期の突然死や重篤な症状で発症する脂肪酸代謝異常症や有機酸代謝異常症の後方視的診断法の確立に向け、保存ろ紙を用いたタンデムマス検査の基礎研究を進めている。大分市と大分市医師会立アルメイダ病院の臨床検査部のご協力により研究成果をまとめ、日本小児科学会の英文雑誌に報告した (論文5)。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>(論文1) Inoue M, Miyahara H, Shiraishi H, Shimizu N, Tsumori M, Kiyota K, Maeda M, Umeda R, Ishitani T, Hanada R, Ihara K, Hanada T: Leucyl-tRNA synthetase deficiency systemically induces excessive autophagy in zebrafish. <i>Sci Rep.</i> 16;11(1):8392. 2021.</p> <p>(論文2) Sekiguchi K, Miyahara H, Inoue M, Maeda T, Kiyota K, Sakai K, Hanada T, Ihara K: Metabolome characteristics of liver autophagy deficiency under starvation conditions in infancy. <i>Nutrients</i> 13, 3026. 2021.</p> <p>(論文3) Sato-Kawano N, Takemoto M, Okabe E, Yokote K, Matsuo M, Kosaki R, Ihara K: The clinical characteristics of Asian patients with classical-type Hutchinson-Gilford progeria syndrome. <i>J Hum Genet.</i> 62(12):1031-1035, 2017</p> <p>(論文4) Maeda M, Maeda T, Ihara K: Secular Trends in obesity and serum lipid values among children in Oita City, Japan, during a 27-year period. <i>J Atheroscler Thromb.</i> (in press)</p> <p>(論文5) Shimada Y, Kawano N, Goto M, Watanabe H, Ihara K: Stability of amino acids, free and acyl-carnitine in stored dried blood spots. <i>Pediatr Int.</i> 2022 (in press)</p>	

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部





医学部



医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科医療倫理学講座・教授	
氏名	今井 浩光 (Imai Hiromitsu)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2008年9月	
SDGs目標	  	
研究分野	医療倫理学、臨床薬理学、心身医学	
研究キーワード	臨床研究のインフォームド・コンセント、薬理遺伝学、薬物と労働災害	
研究内容	<p>●臨床研究におけるインフォームド・コンセントのあり方に関する研究</p> <p>臨床研究は患者や健康人が被験者として参加することで成立し、その際にインフォームド・コンセントを経る。この重要なプロセスは個々の研究者と被験者により行われ、外部からの確認が困難であり、質の保証がなされにくい。本研究では研究者と被験者の間で行われる研究についてのコミュニケーションを多面的に分析し、倫理的に望ましいコミュニケーションのあり方、それを担保する方策について考察することを目的とする。</p> <p>●薬物動態や薬理作用に及ぼす因子の研究</p> <p>薬物動態や薬効を修飾する内的及び外的因子を評価し、患者個々に最適な薬物投与法を提案することを目的とする。具体的には薬物代謝酵素、薬物トランスポーターや薬物受容体の遺伝的多型による影響や食品による薬理作用の変化を検討する。(論文1, 2, 3)</p> <p>●薬物と労働災害の影響に関する研究</p> <p>日本の労働災害は労働災害防止計画により対策が講じられているが、死傷者数減少の目標達成が困難な状況である。これには様々な因子が関与していると思われるが、労働人口が生活習慣病を始めとする医薬品使用が多い年齢層に一致しており医薬品による作業能力への影響が労働災害の因子ではないかという仮説を設定して、これを検証する研究を進めている。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>医療倫理、薬物、人と社会のコミュニケーションという軸から、実際に社会で問題となることの分析と解決のための方策を社会に実装することを目標として、領域横断的な研究の展開を目指している。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2020年、The μ-opioid receptor gene polymorphism 118A>G weakens the pharmacological action of buprenorphine. <i>Int J Clin Pharmacol Ther.</i> 58: 626-633. 2019年、No Effect of Digoxin on Rosuvastatin Pharmacokinetics in Healthy Subjects: Utility of Oita Combination for Clinical Drug-Drug Interaction Study. <i>Clin Transl Sci.</i> 12: 513-518. 2016年、The pharmacokinetic exposure to fexofenadine is volume-dependently reduced in healthy subjects following oral administration with apple juice. <i>Clin Transl Sci.</i> 9: 201-206. 	

所属・職位	医学部医学科臨床薬理学講座・教授	
氏名	上村 尚人 (Uemura Naoto)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1999年3月	
SDGs目標		

研究分野	臨床薬理学、薬物治療学、早期探索的臨床開発
研究キーワード	早期探索的臨床試験、ヒト初回投与試験、POC試験、臨床分子イメージング、合理的薬物治療、薬物動態、薬力学、
研究内容	<p>大分大学医学部臨床薬理学講座では、現代医学では有効な治療方法のない難病を中心に、新しい治療方法の研究開発に取り組んでいる。</p> <p>講座の関連施設である附属病院臨床薬理センターは我が国を代表する臨床薬理専門施設であり、附属病院に整備されたクリニカルトライアルユニット（臨床試験専用病床）を活用し人を対象とした早期探索的臨床試験を積極的に行なっている。特に、新規医薬品や新しいワクチンなどを人に初めて投与する“ヒト初回投与試験”や、治療概念を確立するための臨床試験としての“POC試験”を数多く実施しており、先端分子イメージングセンターにおいては、新規のPET (Positron Emission Tomography)トレーサーを用いた新薬開発を進めている。</p> <p>これまでに取り組んできたテーマとしては、血管奇形（低分子）、難治性皮膚炎症疾患（低分子）、COVID-19（治療薬）、COVID-19（ワクチン）、新規経口抗真菌薬の開発（低分子）、中性脂肪蓄積心筋血管症の治療薬（中分子）、抗がん剤（肺がん治療薬）の新規製剤開発、中枢作動薬としての抗搔痒薬（低分子）、新規肺線維症の新規（中分子）、乳がん骨転移抑制薬（低分子）、線維筋痛症の治療薬（低分子）、上気道炎ウイルス感染症治療薬（抗体）、NASH（核内受容体作動薬 低分子）、NASH（抗炎症 低分子化合物1）、NASH（抗炎症 低分子化合物2）、進行性骨化性線維異形成症、アルツハイマー病新規PET トレーサー（低分子1）、アルツハイマー病新規PET トレーサー（低分子2）骨代謝診断用新規PET トレーサー、狂犬病（低分子）、ヒト トリパナソーマ症（低分子）、アルコールや違法薬物の体内動態研究、などがある。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>Cumulative seroprevalence among healthcare workers after the first wave of the COVID-19 pandemic in El Salvador, Central America. Nakagama Y, Rodriguez-Funes MV, Dominguez R, Candray-Medina KS, Uemura N, Tshibangu-Kabamba E, Nitahara Y, Kaku N, Kaneko A, Kido Y. Clin Microbiol Infect. 2022 Jun (in press)</p> <p>A phase I study to evaluate safety, pharmacokinetics, and pharmacodynamics of respiratory syncytial virus neutralizing monoclonal antibody MK-1654 in healthy Japanese adults. Orito Y, Otani N, Matsumoto Y, Fujimoto K, Oshima N, Maas BM, Caro L, Aliprantis AO, Cox KS, Tokumaru O, Kodama M, Kudo H, Imai H, Uemura N. Clin Transl Sci. 2022 May 3 (in press)</p> <p>A phase I study of high dose camostat mesylate in healthy adults provides a rationale to repurpose the TMPRSS2 inhibitor for the treatment of COVID-19. Kitagawa J, Arai H, Iida H, Mukai J, Furukawa K, Ohtsu S, Nakade S, Hikima T, Haranaka M, Uemura N. Clin Transl Sci. 2021 Sep;14(5):1967-1976</p>

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部・教授	
氏名	大崎 美泉 (Osaki Yoshimi)	
取得学位	商学修士、早稲田大学、1979年3月	
SDGs目標	  	
研究分野	医療経営学、病院マネジメント、管理会計	
研究キーワード	医療制度改革、病院の経営戦略、病院の経営分析、病院原価計算	
研究内容	<p>1. 医療のマネジメントに関する研究</p> <p>疾病構造の変化、超高齢化社会の進展、医療技術の進歩、デジタル社会の出現等医療を取り巻く環境が大きく変化する中で、医療費の高騰による財政逼迫への対応も視野に入れた医療提供体制、医療保険制度、診療報酬制度のあり方について考察を行う。</p> <p>2. 医療環境の変化と病院経営に関する研究</p> <p>医療を取り巻く環境の変化、医療制度改革の進展、あるいは昨今の新型コロナ問題の出現のように、病院の経営環境が激変し厳しさを増す中で、地域の医療を担う病院はその生き残りをかけ如何に経営改革を実践していくべきかについて検討を行う。</p> <p>3. 病院のマネジメント・システムの研究</p> <p>経営環境の変化が厳しさを増す中、これからの病院経営に不可欠な経営戦略、原価計算、経営分析、バランスコアカード、MRP、ICT、リスクマネジメントといった病院のマネジメントに関する様々な理論や技法について研究を行う。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>(論文)</p> <p>1. 2006年、「DPCと原価計算・管理会計—病院マネジメントへの役立ちを中心として—」 (DPC時代の病院原価計算システムに関し、診療科別原価計算の限界と疾患別原価計算の必要性について考察するとともに病院マネジメントにおけるBSCの有用性についても検討した。)</p> <p>2. 2002年、「医療改革へのマネジメント技法の適用について」 (医療改革の実現にあたって、マネジメントにおける概念や技法が有用であることを指摘した。医療の質と標準化に関してはクリティカルパス、電子カルテの進展にはABC、その他に予算管理、損益分岐点分析も有用なツールとして適用可能なことを指摘した。)</p> <p>(研究ノート)</p> <p>1. 2012年、「病院経営における経営戦略の展開について」 (BSCを採用したデューク小児科病院等の例を参考に、病院マネジメントにおける経営戦略の重要性を指摘するとともに、マクロの医療制度の動向如何によって、ミクロである個々の病院の経営戦略が左右される問題点を検討した。)</p>	

所属・職位	医学部医学科腫瘍・血液内科学講座・教授	
氏名	緒方 正男 (Ogata Masao)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1998年3月	
SDGs目標	  	
研究分野	血液学	
研究キーワード	造血幹細胞移植、ヒトヘルペスウイルス6、HHV-6脳炎、移植後合併症、HTLV-1	
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> ● 同種造血幹細胞移植後ヒトヘルペスウイルス6脳炎の疾患概念の確立 同種造血幹細胞移植後に急激に悪化する特異な脳炎を連続して経験しこれがヒトヘルペスウイルス6 (HHV-6) が原因と考え、その疾患単位の確立に取り組んだ。HHV-6再活性化と脳炎発症との関係性について全国多施設前向き観察研究により証明した (論文1)。全国調査を実施し、HHV-6脳炎の臨床像、危険因子や治療と予後との関連について明らかとした (論文2)。これらの成果はHHV-6脳炎の疾患概念の確立に貢献している。 ● 同種造血幹細胞移植後ヒトヘルペスウイルス6脳炎の治療法の確立 全国調査ではホスカルネット治療が良好な予後と関連することを示した(論文2)。この成果を世界初となる移植後HHV-6脳炎治療薬の保険承認につなげた。HHV-6脳炎発症予防のための多施設介入臨床試験を責任者として実施した (論文3)。移植後HHV-6感染症に関する日本造血幹細胞移植学会ガイドラインを部会長として執筆し(著書1)、欧州骨髓移植学会機関紙にもガイドラインを掲載した (論文4)。このようにHHV-6脳炎の治療で世界をリードしている。 ● 同種造血幹細胞移植後合併症の克服に関する研究 同種造血幹細胞移植後の感染症や臓器障害などの合併症克服のための多数の検討を日本造血細胞移植学会・合併症ワーキンググループにおいて実施した。2015年から2019年まではワーキンググループ責任者として全国の移植医による提案研究に助言と指導を行なった。 ● HTLV-1キャリアの疫学研究 AMED研究事業におけるHTLV-1の全国的疫学研究に研究開発参加者として参加し、感染総合対策の確立に取り組んでいる。 	
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ● 論文 <ol style="list-style-type: none"> 1. 2013年、Ogata M, et al. Human herpesvirus 6 (HHV-6) reactivation and HHV-6 encephalitis after allogeneic hematopoietic cell transplantation: a multicenter, prospective study. Clin Infect Dis. 2. 2017年、Ogata M, et al. Clinical characteristics and outcome of human herpesvirus-6 encephalitis after allogeneic hematopoietic stem cell transplantation. Bone Marrow Transplant. 3. 2018年、Ogata M, et al. Effects of Prophylactic Foscarnet on Human Herpesvirus-6 Reactivation and Encephalitis in Cord Blood Transplant Recipients: A Prospective Multicenter Trial with an Historical Control Group. Biol Blood Marrow Transplant. 4. 2020年、Ogata M, et al. Clinical practice recommendations for the diagnosis and management of human herpesvirus-6B encephalitis after allogeneic hematopoietic stem cell transplantation. Bone Marrow Transplant. ● 著書 <ol style="list-style-type: none"> 1. 緒方正男、高野久仁子、橋井佳子、植木俊光、森康雄(共著). 造血細胞移植ガイドライン HHV-6 (第2版)、日本造血・免疫細胞療法学会 ● 受賞 <ol style="list-style-type: none"> 1. 2021年、一般社団法人日本造血細胞移植学会 第3回日本造血細胞移植学会 学会賞 2. 2021年、大分大学学長表彰 	

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

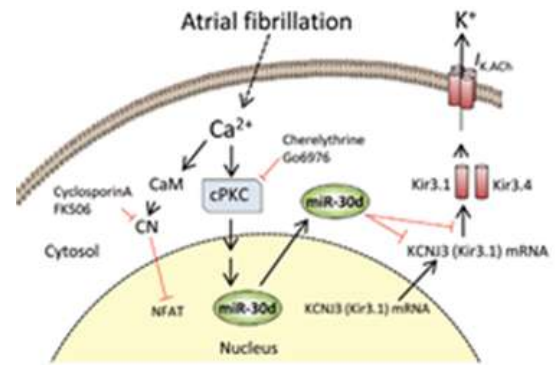
理工学部



福祉健康科学部

その他学内施設等

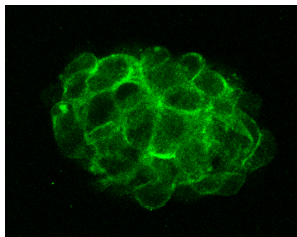
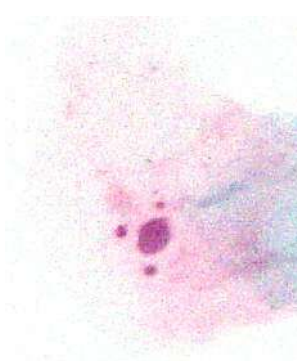
所属・職位	医学部医学科病態生理学講座・教授	
氏名	小野 克重 (Ono Katsushige)	
取得学位	医学博士、大分医科大学、1989年3月	
SDGs目標	 3 すべての人に健康と福祉を	

研究分野	電気生理学, イオンチャンネル, 不整脈学
研究キーワード	電位作動性Na ⁺ チャンネル, 電位作動性Ca ²⁺ チャンネル
研究内容	<p>心房細動は最も罹患率の多い不整脈でありながら成因は解明されておらず、根本的な治療戦略は未だに確立していない。それは、心房細動の発症と維持の分子機序が明確でないことに起因する。一方、近年の循環器領域研究において心臓発生や心不全の進行においてmicroRNAの発現異常が存在することが明らかとなった。我々は、ヒト心筋細胞（慢性心房細動を呈する患者の心房筋において、特定のmicroRNAとイオンチャンネル、関連するtrafficking蛋白、更に発現の制御を担う転写因子との機能的連関を明らかにしている。microRNAをラット心筋細胞に導入し、更に特定のmicroRNAノックアウトラット心筋細胞にパッチクランプ法を用いてmicroRNA機能異常を電気生理学的に評価している。また、心房細動患者に特有と思われるmicroRNAの発現変化を記録している。循環器領域では、心臓の発生や筋肥大、心不全等において、いくつかのmicroRNAの発現異常が存在することが報告されているが、microRNAが不整脈の病態機序として機能することは不明な点が多いため、不整脈、特に心房細動の持続、特にイオンチャンネルのリモデリングにmicroRNAの発現異常が関わることを中心に研究を進めている（図は特定のmicroRNA, miR30dがI_{K,ACh}チャンネルの発現をcontrolすることを示す）。</p>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> Morishima M, Fujita T, Osagawa S, Kubota H, Ono K. Enhanced BDNF actions following acute hypoxia facilitate HIF-1 α-dependent upregulation of Cav3-T-type Ca²⁺ channels in rat cardiomyocytes. <i>Membranes</i> 11: 470, 2021 Wang P, Wei M, Zhu X, Liu Y, Yoshimura K, Zheng M, Liu G, Kume S, Morishima M, Kurokawa T, Ono K. Nitric oxide down-regulates voltage-gated Na⁺ channel in cardiomyocytes possibly through S-nitrosylation-mediated signaling. <i>Scientific Reports</i> 11: 11273, 2021 Morishima M, Ono K. Serum microRNA-30d is a sensitive biomarker for angiotensin II-induced cardiovascular complications in rats. <i>Heart and Vessels</i>, 36(10), 1597-1606, 2021. Morishima M, Tahara S, Wang Y, Ono K. Oxytocin down-regulates the Cav1.2 L-type Ca²⁺ channel via Gi/cAMP/PKA/CREB signaling pathway in cardiomyocytes. <i>Membranes</i> 11: 234, 2021. Wang P, Zhu X, Wei M, Liu Y, Yoshimura K, Zheng M, Liu G, Kume S, Kurokawa T, Ono K. Disruption of asparagine-linked glycosylation to rescue and alter gating of the Na^v 1.5-Na⁺ channel. <i>Heart and Vessels</i> 36: 589-596, 2021. Suzuki R, Morishima M, Nakada C, Miyamoto S, Ono K. Manifestations of gene expression profiles in human right atrial myocardium caused by mechanical stretch. <i>Heart and Vessels</i> 36: 577-588, 2021.








所属・職位	医学部医学科歯科口腔外科学講座・教授	
氏名	河野 憲司 (Kawano Kenji)	
取得学位	歯学博士、九州大学、1990年1月	
SDGs目標		







研究分野	口腔外科学、口腔病理学、細胞生物学
研究キーワード	口腔癌、口腔潜在的悪性疾患、口腔粘膜疾患、口唇裂、口蓋裂、




研究内容	<p>1. 口腔癌の浸潤・転移に関する研究 病理組織学的手法と細胞生物学的手法により口腔扁平上皮癌の浸潤・転移機序の研究を行っている。口腔癌における接着因子（カドヘリン、インテグリン）や細胞外マトリックスの発現と臨床動態の関連を調べ、さらに<i>in vitro</i>三次元癌微小環境モデルを用いて癌細胞の浸潤能と運動能の亢進機序を解析している。</p> <p>2. 癌化リスクの高い口腔潜在的悪性疾患のスクリーニングに関する研究 口腔潜在的悪性疾患（口腔癌の前駆疾患）から採取した細胞の遺伝子損傷や癌化関連遺伝子の異常をもとに癌化リスクを評価し、高癌化リスク症例を選別し発癌前に治療を行う。</p> <p>3. 口腔癌および口腔潜在的悪性疾患の疫学的研究 大分県内での口腔がん検診、ネパールカトマンズ大学との共同で行っているネパール人の口腔粘膜疾患検診をもとに、口腔潜在的悪性疾患の頻度に関する調査研究を行っている。</p> <p>4. 口唇口蓋裂の手術に関する研究 口唇口蓋裂術後の長期的観察により、自然な口唇鼻形態と正常の口腔機能を獲得するための術式の確立を研究している。</p>	 <p>Nカドヘリンを発現する口腔扁平上皮癌細胞株の細胞集塊</p>  <p>micronucleiをもつ異常細胞（口腔白板症の上皮細胞）</p>
	研究業績・アピールポイント	<p>上記の研究成果は次の論文、大学HPで公開している。</p> <p>1. 口腔癌の浸潤・転移に関する研究： Exp Cell Res 262:180-196,2001 Oral Oncol 38:549-556,2002 Head Neck 28:525-533,2006 J Oral Maxillofac Surg Med Pathol 29:116-121, 2017 J Oral Maxillofac Surg Med Pathol 32:400-405, 2020</p> <p>2. 口腔癌および口腔潜在的悪性疾患の疫学的研究： http://www.med.oita-u.ac.jp/rpp/report/2020burst02.pdf https://www.oita-u.ac.jp/O1oshirase/topics/2019-010.html https://www.oita-u.ac.jp/O1oshirase/topics/2020-002.html</p>

- 役員
- 大学院教育学研究科
教育学部
- 経済学部
- 医学部
- 医学部附属病院
- 理工学部
- 福祉健康科学部
- その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科麻酔科学講座・教授	
氏名	北野 敬明 (Kitano Takaaki)	
取得学位	医学博士、大分医科大学、1988年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	麻酔科学
研究キーワード	手術侵襲、臓器保護
研究内容	<p>現在、麻酔科学講座では、手術侵襲や敗血症などの感染症など生体侵襲に対する生体反応機序の解明を目的として研究を行っている。さらに侵襲に対する過度の生体反応は、却って臓器障害を引き起こすため、臓器障害を防ぐための治療法の開発研究を行っている。また全身麻酔時の生体反応、集中治療領域の臓器障害・保護の研究も行っている。</p> <p>具体的には、生体侵襲反応と時計遺伝子の関係や、ビタミンCなどのフリーラディカルスカベンジャーと生体侵襲との関連性の研究などを行っている。</p>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> 1. Uchino T, Miura M, Matsumoto S, Shingu C, <u>Kitano T</u>: Use of epidurography and computed tomography to identify misplacement of a section of an epidural catheter in the subarachnoid space. J Clin Anesth, 46:1-2,2018 2. Tokumaru O, Shuto Y, Ogata K, Kamibayashi M, Bacal K, Takei H, Yokoi I, <u>Kitano T</u>: Dose-dependency of multiple free radical-scavenging activity of edaravone. J Surg Res, 228:147-153,2018 3. Kosaka M, Oyama Y, Uchino T, Ogihara Y, Koga H, Shingu C, Matsumoto S, <u>Kitano T</u>: Ultrasound-guided central venous tip confirmation via right external jugular vein using a right supraclavicular fossa view. J Vasc Access, 20(1):19-23,2019 4. Ohchi Y, Goto K, Yasuda N, Koga H, <u>Kitano T</u>: High Efficiency Removal of Cytokines and HMGB-1 by Continuous Hemofiltration With a Dual Layered Polyethersulfone Membrane: An Ex Vivo Study. Ther Apher Dial, 23(2):173-179,2019 5. Michikoshi J, Matsumoto S, Miyawaki H, Morita M, Niu H, Seo K, Hagiwara S, <u>Kitano T</u>: Evaluation of Proteins and Cells that Adsorb to Dialysis Membranes Used in Continuous Hemodiafiltration: Comparison of AN69ST, Polymethylmethacrylate, and Polysulfone Membranes. Blood Purif, 48(4):358-367,2019 6. Takigawa M, Yatsu T, Takino Y, Matsumoto S, <u>Kitano T</u>, Lee J, Arai T, Tanaka H, Ishii T, Mori Y, Ishigami A: High-Dose Vitamin C Preadministration Reduces Vancomycin-Associated Nephrotoxicity in Mice. J Nutr Sci Vitaminol (Tokyo), 65(5):399-404,2019 7. Okuno T, Yoshida Y, Takaki Y, Araki Y, Inoue H, Soejima K, Okado Y, Yoshida K, Imamura H, Hagiwara S, Matsumoto S, <u>Kitano T</u>: Observation of Granulocyte Adsorption in Adacolumn Cellulose Acetate Beads after Granulocytapheresis. Ther Apher Dial, 23(3):210-216,2019 8. Himeno E, Goto S, Inoue S, Hatanaka Y, Hagiwara S, Matsumoto S, <u>Kitano T</u>: Application and Efficacy of Vitamin E-Bonded Polysulfone Membrane in Acute Blood Purification Therapy.. Blood Purif Jul 17, 1-7,2020 9. Yasuda N, Goto K, Mizoguchi T, Ohchi Y, Nureki S, <u>Kitano T</u>: A new anticoagulation strategy using recombinant human thrombomodulin in patients on veno-venous extracorporeal membrane oxygenation: A retrospective study. ANNALS OF PALLIATIVE MEDICINE 10(2), 1834-1841,2021

所属・職位	医学部看護学科基盤看護学講座・教授	
氏名	清村 紀子 (Kiyomura Noriko)	
取得学位	修士 (看護学)、大分医科大学、2000年3月	
SDGs目標	    	
研究分野	看護学	
研究キーワード	看護技術のエビデンス、看護に活かす解剖生理学、クリティカルケア看護	
研究内容	<p>【看護技術のエビデンス】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 生体リズムを整えるための看護プログラムの開発 2. 足浴による自律神経活動の解明 3. 三角筋における安全な筋肉注射部位の検討 <p>【看護に活かす解剖生理学】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 臨床推論能力向上のための解剖生理学教育法の検討 2. 解剖生理学と連動したフィジカルアセスメントの能力向上を目指すプログラム開発 <p>【クリティカルケア看護】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 腹臥位療法の効果の検証 2. 人工呼吸器早期離脱にむけた取り組み 	
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・ Evaluation of appropriate sites for intramuscular injection in the deltoid muscle: The 1st International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science Program & Abstract p.144 ・ The morphologic features and distributions of the axillary nerve in relation to the safe deltoid intramuscular injection: Fifth Pan-Pacific Nursing Conference and Seventh Nursing Symposium on Cancer Care, Conference Abstract Book (p.99) ・ 三角筋内の腋窩神経の走行：MRIを用いた生体データと解剖体データの比較：日本看護技術学会誌 16.P70-76,2018 ・ サブストラクション・アウトカムモデルを用いた人工呼吸器離脱への介入に関する文献検討，日本クリティカルケア看護学会誌，15，P1-11，2019 ・ 「人工呼吸器離脱プロトコル」の有効性の検証，日本クリティカルケア看護学会誌，17，P31-43，2021 	

所属・職位	医学部医学科眼科学講座・教授	
氏名	久保田 敏昭 (Kubota Toshiaki)	
取得学位	医学博士、九州大学、1988年3月	
SDGs目標	 	

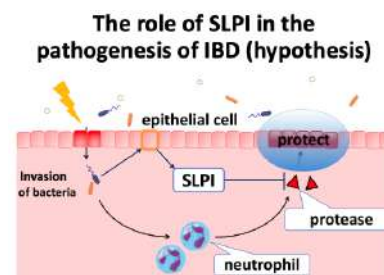
研究分野	眼科学
研究キーワード	緑内障、前房隅角、視神経、続発緑内障
研究内容	<p>落屑緑内障の病態と疾患感受性遺伝子多施設研究</p> <p>落屑症候群に関連する遺伝子としてlysyl oxidase like-1 protein (LOXL1)遺伝子異常が報告されているが、人種によってリスクアレルに差が見られる。本研究では落屑症候群の原因遺伝子および遺伝子座をゲノムワイド関連解析(GWAS; genome-wide association study)法を用いてコホート研究にて決定する研究を行い、LOXL1異常の人種差のメカニズムも明らかにされた。また新たな疾患感受性遺伝子を発見し、これらの結果は医学のトップジャーナルに掲載された。</p> <p>緑内障の疫学調査 (久山町疫学研究)</p> <p>福岡県久山町で行われているコホート疫学調査の久山町研究は開始されて60年になる。眼科検診は1998年から開始しており20年以上が経過した。緑内障検診は2017年に初めて九州大学、秋田大学、大分大学の協力で行った。緑内障有病率は7.6%であり、病型別では原発開放隅角緑内障5.8%、原発閉塞隅角緑内障0.7%、続発緑内障1.1%であった。多治見スタディと比較して高齢化率の上昇に比例して本邦の緑内障有病率が上がっていることを示した。</p> <p>続発緑内障の原因となるウイルス眼感染症の起炎菌を同定するための網羅的PCR検査</p> <p>前房水や硝子体などの眼科微量検体から多項目の眼感染症主要病原微生物を網羅的に検出できる眼感染症網羅的PCR検査の先進医療を開始し、保険収載を目指して全国の多施設研究を取りまとめている。マルチプレックス・リアルタイムPCRキット「Direct Strip PCR」は東京医科歯科大学、理化学研究所、大分大学で共同開発し、サイトメガロウイルス角膜炎などのウイルス性続発緑内障の診断に貢献している。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>主な論文</p> <ol style="list-style-type: none"> Nakano S, Kubota T, et al.: Multiplex solid-phase real-time polymerase chain reaction without DNA extraction: A rapid intraoperative diagnosis using microvolumes, Ophthalmology 2021 The Genetics of Exfoliation Syndrome (GenES) Partnership: Association of rare CYP39A1 variants with exfoliation syndrome involving the anterior chamber of the eye, JAMA 2021 Nakano S., Tomaru Y., Kubota T., et al.: A prospective multicenter study, American Journal of Ophthalmology 2020 Aung T, Kubota T, et al. Genetic association study of exfoliation syndrome identifies a protective rare variant at LOXL1 and five new susceptibility loci, Nature Genetics 2017 Aung T., Ozaki M., Kubota T., et al.: A common variant mapping to CACNA1A is associated with susceptibility to exfoliation syndrome, Nature Genetics 2015 <p>学会関係: 日本眼科学会評議員、日本緑内障学会理事、第89回九州眼科学会会長 (2019年5月31日~6月2日)、第31回日本緑内障学会会長 (2020年10月2日~4日ライブ、11月5日~30日オンデマンド配信)、第76回日本臨床眼科学会 (2022年10月13日~16日) 特別講演予定</p>




所属・職位	医学部医学科感染予防医学講座・教授	
氏名	小林 隆志 (Kobayashi Takashi)	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、2000年7月	
SDGs目標		


研究分野	免疫学、感染症学、寄生虫学、ウイルス学、分子生物学
研究キーワード	炎症性腸疾患、自己免疫性神経疾患、アルボウイルス感染免疫、アニサキス、がん免疫

研究内容	<p>感染防御に働く免疫システムの分子基盤とその破綻による炎症性疾患の病態を分子レベルで解明し、その成果を病気の予防や治療に結びつけることを目標にしています。</p> <p>1) 炎症性腸疾患の分子免疫学的研究</p> <p>炎症性腸疾患は、自己の免疫細胞が腸組織を攻撃することで消化管粘膜に慢性的な炎症が引き起こされる疾患で、潰瘍性大腸炎とクローン病が知られています。原因は不明ですが、最近の研究で、遺伝子の関与や腸内細菌叢の変化などが指摘されています。私たちはこれまでに新たな抗生物質起因性腸炎モデル動物の作製に成功し (文献1)、このモデルを使った漢方薬の評価を行っています。また、炎症性腸疾患に関連する遺伝子や腸内細菌の研究 (文献2) も進めています。最近、プロテアーゼ阻害因子であるSLPIが炎症性刺激により誘導されて腸管上皮バリアを保護することで腸炎を抑制することが明らかになりました (文献3)。この研究成果は炎症性腸疾患の新規治療薬の開発につながる事が期待されます。</p> <p>2) 多発性硬化症の分子免疫学的研究</p> <p>多発性硬化症は、自己の免疫細胞が神経細胞の軸索を覆っているミエリンを攻撃することで脱髄がおき、運動障害、感覚障害、視覚障害などが引き起こされます。私たちはT細胞におけるシグナル伝達分子TRAF6やT細胞の遊走を制御する種々のケモカイン・ケモカイン受容体が病態形成におよぼす役割について遺伝子改変マウスを用いて解析しています。これらの研究により、この病気の発症に重要な分子が明らかになってきました。</p> <p>3) 蚊媒介性ウイルスの研究</p> <p>チクングニアウイルスは蚊によって媒介され、非常に重篤な関節痛を伴うチクングニア熱を引き起こします。私たちは、RT-LAMP法を応用した迅速で簡便な診断法を開発しました (文献4)。また、蚊の吸血でジカ熱を引き起こすジカウイルスは、C型肝炎ウイルス治療薬のリバビリンによって抑制されることを明らかにしました (文献5)。</p> <p>4) アニサキスの研究</p> <p>大分特産の関サバは、他のサバに比べアニサキスの寄生率が低いことを明らかにしました (文献6)。現在、アニサキス感染の激症化の解明に取り組んでいます。</p>
------	--


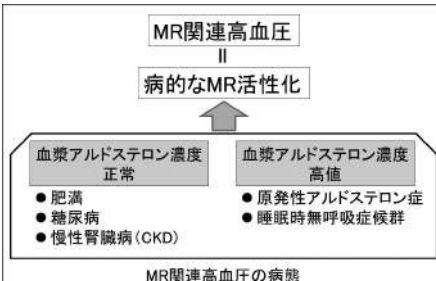
研究業績・アピールポイント	<p>私たちはゲノム編集技術を用いて遺伝子改変マウスを作製し病態解析を行っています。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2018年、Sonoda et al., <i>Genes Cells</i> 23(12) 1043-1055. 2018年、Gendo et al., <i>Inflamm Intest Dis</i> 3(3) 145-154. 2021年、Ozaka et al., <i>Genes Cells</i> 26(10) 807-822. 2020年、Saechue et al., <i>Genes Cells</i> 25(9) 615-625. 2017年、Kamiyama et al., <i>Antiviral Res</i> 146 1-11. 2021年、Hidano et al., <i>Jpn J Infect Dis</i> 74(5):387-391. <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 2022年、中村丁次 監修、国民の栄養白書 2021年度版 - 日本の食と栄養が創る新時代の健康 小坂聡太郎、小林隆志 日本人の身体に合った食事 ～腸内環境から考える日本人の理想の食～ 日本医療企画
---------------	--



所属・職位	医学部医学科公衆衛生・疫学講座・教授	
氏名	斉藤 功 (Saito Isao)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1997年9月	
SDGs目標	 	
研究分野	公衆衛生・疫学分野	
研究キーワード	循環器疾患の疫学, 危険因子, 健康の社会的決定要因, コホート研究	
研究内容	<p>●新たな循環器疾患危険因子の探索とその予防方法の確立</p> <p>地域における数千から数十万人の参加者からなるコホート研究を通じて循環器疾患や生命予後に及ぼす新たな危険因子の探索を行っている。脂質異常, 高血圧, 糖尿病, 肥満といった古典的な危険因子からメタボリックシンドローム, 炎症, そして社会心理的要因に至る新たなエビデンスの構築を行ってきた。とりわけ自律神経系機能の指標である心拍変動に関する約5千人規模のコホート研究を構築し, 糖尿病や循環器疾患発症といったアウトカムとの関連について機械学習の分析手法も取り入れながら分析を進めているところは独自性がある。自律神経系機能が示す交感神経や副交感神経の機能指標は, 健康の社会的決定要因とされる社会環境や社会的な格差と生活習慣病発症とをリンクしており, アウトカムの新たな予測因子としての可能性を有する。また, 社会的格差がもたらす健康影響について科学的に明らかにすることは公衆衛生領域におけるこれからの主な研究テーマである。(文献1~5)</p> <p>●自治体との協同による公衆衛生活動の実践と評価に関する研究</p> <p>自治体の公衆衛生部門と連携し, 地域の健康増進に資するデータ分析, レセプト分析を行いながら地域医療構想, あるいは健康づくり計画に係る委員会委員としての実践活動を行っている。保健師, 管理栄養士等の多職種と共同で公衆衛生活動を展開しながらその評価にかかる研究を行っている。 ※関連リンク：http://www.med.oita-u.ac.jp/phealth1/</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>米国ARIC研究や国内JPHC研究等, 国内外の代表的なコホート研究に関わった。TOON HEALTH STUDY等の新たなコホート研究を創設し地域の公衆衛生活動を実践してきた。 (主な論文)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Saito I, et al. Nontraditional risk factors for coronary heart disease incidence among persons with diabetes: The Atherosclerosis Risk in Communities (ARIC) Study. <i>Ann Intern Med</i> 2000;133:81-91. 2. Saito I, et al. Comparison of fatal coronary heart disease occurrence based on population surveys in Japan and the USA. <i>Int J Epidemiol</i> 2000;29:837-844. 3. Saito I, et al. Body mass index, weight change and risk of stroke and stroke subtypes: the Japan Public Health Center-based prospective (JPHC) study. <i>Int J Obesity</i> 2011;35:283-291. 4. Saito I, et al. Association between mortality and incidence rates of coronary heart disease and stroke: The Japan Public Health Center-based prospective (JPHC) study. <i>Int J Cardiol</i> 2016;222:281-286. 5. Saito I, et al. Association between heart rate variability and home blood pressure: The Toon Health Study. <i>Am J Hypertens</i>. 2018;31:1120-1126. 	

所属・職位	医学部医学科内分泌代謝・膠原病・腎臓内科学講座・教授	
氏名	柴田 洋孝 (Shibata Hiroataka)	
取得学位	博士 (医学)、慶應義塾大学、1993年1月	
SDGs目標	  	

研究分野	内分泌代謝学
研究キーワード	高血圧、副腎、アルドステロン、糖尿病、慢性腎臓病

研究内容	<p>1. 原発性アルドステロン症患者のQOLを重視した最適治療法の検討</p> <p>副腎疾患、内分泌性高血圧の専門家として国内外の原発性アルドステロン症や高血圧の診療ガイドラインを副委員長として策定した。</p> <p>さらに、大分大学BURST認定の研究チーム「OPAT (大分大学原発性アルドステロン症研究チーム)」の責任者として、本疾患の最適治療と臨床評価をテーマに活動している。</p>  <p>2. 肥満、糖尿病、慢性腎臓病に合併する高血圧および臓器障害の分子機構の解明：新規病態「MR関連高血圧」の提唱</p> <p>血中アルドステロン濃度が高値を示す原発性アルドステロン症のみならず、血中アルドステロン濃度が正常の肥満、糖尿病、慢性腎臓病患者では、アルドステロン作用発現に関わるミネラルコルチコイド受容体 (MR) の病的な活性化が高血圧や臓器障害に関わるという新規病態「MR関連高血圧」を世界で初めて提唱し、基礎および臨床研究を展開している。</p>  <p>3. 糖尿病性腎症重症化予防につなげる早期発見マーカーの確立と治療戦略の確立</p> <p>健康寿命の延伸を目指し、大分大学—大分県医師会—大分県の3者連携締結による糖尿病性腎症重症化予防推進事業のために、腎症重症化の早期発見バイオマーカーとしてアルブミン尿や尿沈渣中ポドサイトmRNAを用いて、食事、運動療法とSGLT2阻害薬、MR拮抗薬などエビデンスがある薬剤介入と有用性を検討している。</p>
------	--

研究業績・アピールポイント	<p>1. ヒト副腎におけるアルドステロン合成酵素 (CYP11B2) の単離精製 (Ogishima, Shibata et al. J Biol Chem, 1991) を世界に先駆けて成功し、CYP11B2特異抗体により、アルドステロン産生細胞を可視化した (Nishimoto, Shibata, et al. J Clin Endocrinol Metab, 2010)。</p> <p>2. 新規病態「MR関連高血圧」の確立：数種類のMR転写共役因子を酵母Two-Hybrid法により同定し (Yokota, Shibata et al. J Biol Chem 2010; Hayashi, Shibata, et al. Int Heart J, 2017; Mitsuishi, Shibata, et al. Mol Cell Endocrinol 2018; Nakamura, Shibata, et al. J Am Heart Assoc, 2018)、MRの翻訳後蛋白修飾による活性化機構の解明から新規病態「MR関連高血圧」を提唱した (Shibata and Itoh. Am J Hypertens 2012)。これにより、糖尿病や慢性腎臓病における腎症重症化とMR活性化の関連が明らかとなった。https://researchmap.jp/read0162153</p> <p>3. CLEIA法による新規アルドステロン測定法の確立に成功し (Ozeki, Shibata, et al. Diagnostics, 2021; Frontiers in Endocrinology, 2022)、従来法より精密なLC-MS/MS相当値が実測可能となり、原発性アルドステロン症の新ガイドラインの改訂に貢献した。</p>
---------------	--

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部






医学部

医学部附属病院



理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科総合外科・地域連携学講座・教授	
氏名	白石 憲男 (Shiraiishi Norio)	
取得学位	医学博士、大分医科大学、1988年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	消化器外科、内視鏡外科、地域外科医療学、外科教育学
研究キーワード	内視鏡外科腫瘍学、低侵襲手術、腹腔鏡下手術、機能温存胃切除術、多職種連携
研究内容	<p>高齢社会における良好な外科医療を確立するため、腫瘍学、外科侵襲学、外科治療学、社会学的立場から研究を進めている。</p> <p>●手術侵襲が癌の増殖・進展に及ぼす影響に関する基礎研究（内視鏡外科腫瘍学） 手術侵襲による癌の増殖・進展への影響を基礎研究にて明らかにしてきた。低侵襲手術である内視鏡外科腫瘍学の確立をめざしている。</p> <p>●消化管癌に対する内視鏡外科手術の手技の確立とその評価 内視鏡外科手術の癌治療としての手技の定型化と標準化をめざして、技術的および腫瘍学的な安全性を後ろ向き試験や多施設共同研究による無作為比較試験にて検討している。安全な内視鏡外科手術における合併症発生の回避と予後改善が目標である。</p> <p>●高齢患者に対する低侵襲治療の意義 臓器の予備機能が低く併存疾患の多い高齢患者に対する外科治療が増加している。そのため、高齢患者の耐術性評価や術式選択、さらなる低侵襲手術の開発を行っている。</p> <p>●消化器癌に対する機能温存手術の開発 外科的治療は罹患している臓器を手術により体外に排除することを基本としているため、術後のQOLを損なう宿命にある。術後遠隔期の患者QOLを向上させるため、神経温存手術や縮小手術などの開発や評価を進めている。特に胃上部早期胃癌に対する腹腔鏡下手術の新しい再建法を開発し、その評価を進めている。</p> <p>●地域外科医療と外科教育 地域医療構想や医師の働き方改革などの医療制度改革、医学教育制度改革および専門医制度改革が進むなか、多職種との連携システムの構築や外科医教育の改革が求められている。現状と課題を明らかにするため、疫学的調査研究を行っている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Shiraiishi N, Sato K, Adachi Y, et al. Multivariate prognostic study on large gastric cancer. J Surg Oncol 96(1): 14-18, 2007 2. Kitano S, Etoh T, Inomata M, Shiraiishi N. Laparoscopy-Assisted Distal Gastrectomy for Early Gastric Cancer: A Video Demonstration. Ann Surg Oncol 18, 3701, 2011. 3. Ueda Y, Shiraiishi N, Hirashita T, Inomata M. Training tools and methods for laparoscopic surgery Austin J Surg 5(8) online first, 2018. 4. Ueda Y, Fujishima H, Masuda T, Shiroshita H, Etoh T, Inomata M, Shiraiishi N. Clinical impact of clinicopathological characteristics of undifferentiated advanced gastric cancer in elderly patients. Gerontology and Geriatric Research 2(1) 3-7, 2020 <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 白石憲男. 第8章内視鏡外科. 標準外科. 2021, 医学書院(東京) 2. 白石憲男, 上田貴威(編集). 高齢者に対する消化器外科のminimal requirements. 20021, メジカルビュー社(東京). 3. 白石憲男(担当編集). DS Now リンパ節郭清手技を究める[上部消化管編]. 2021, メジカルビュー社(東京)

所属・職位	医学部医学科腎泌尿器外科学講座・教授	
氏名	秦 聡孝 (Shin Toshitaka)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2005年3月	
SDGs目標		
研究分野	泌尿器科学	
研究キーワード	泌尿器腫瘍学、低侵襲手術、画像融合技術、再生医療	
研究内容	<p><基礎研究></p> <p>●前立腺癌細胞における前立腺特異抗原(PSA)の転写調節機構の解明 PSAの近位プロモーター領域にはSp1/SP3の結合部位が4カ所あり、そのいずれもが転写活性の上昇に関与しており、もっとも近位側の結合部位が最重要であることを解明した (論文1)。</p> <p>●再生医療を見据えた外尿道括約筋の幹細胞である衛星細胞の機能解析 当教室では、これまでに外尿道括約筋の幹細胞である衛星細胞の分離培養・長寿化法などを確立した。今後も尿失禁の病態解明、さらには再生医療への応用へ向けた研究を推進する。</p> <p><臨床研究></p> <p>●前立腺癌のMRIとMRI/US画像融合下生検に関する研究 MRI/US画像融合技術を用いた前立腺狙撃生検の精度やその臨床的意義、発展的活用法についての研究を行っている。正確な局在診断に基づいた世界初の3Dプリントモデルの開発やロボット手術への応用にも取り組んでいる (論文2, 3, 4、受賞2)。</p> <p>●単孔式・減孔式泌尿器腹腔鏡手術の開発 当科が本邦で先駆的に開始した単孔式・減孔式手術は整容性に優れた術式である。本術式では、いかに挿入する鉗子の数を減らすかに工夫が必要であり、われわれは新たなinternal retractorを用いた手技を泌尿器科領域ではじめて報告した (受賞1)。</p> <p>●ロボット支援腹腔鏡下手術における新たな術式の開発 ロボット支援膀胱全摘除術後の尿路変向法である回腸導管造設術において、「Early pull out technique」と名付けた新たな完全体腔内での手技を開発した (論文5)。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2005年、Shin T et al. Arch Biochem Biophys. 435: 291-302. 2016年、Shin T et al. Eur Urol. 69: 377-379. 2017年、Shin T et al. BJU Int. 120: 233-238. 2018年、Shin T et al. BJU Int. 121: 77-83. 2021年、Shin T et al. Int J Urol. 28: 778-779. <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> 2012年、30th World Congress of Endourology and SWL (WCE): Olympus Best Paper Award (Best New Innovation Paper) 2016年、The American Urological Association (AUA) 2016 Annual Meeting: AUA 2016 Best Poster 	

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部



医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科大分こども急性救急疾患学部門医療・研究事業・教授	
氏名	末延 聡一 (Suenobu Souichi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2008年9月	
SDGs目標	   	

研究分野	小児科学、小児血液・腫瘍学
研究キーワード	小児がん、急性リンパ性白血病、神経芽腫、QOL、グループ研究、がん教育、がんワクチン
研究内容	<p>●小児がんの治療成績改善に関する研究</p> <p>小児急性リンパ性白血病 (ALL) や神経芽腫の治療成績向上を目指している。小児ALLは50年間で治る見込みが10%から90%近くまで向上したが、その理由は「グループ研究」であり、自施設でも小児白血病研究会 (JACLS: Japan Association of Childhood Leukemia / Lymphoma Study) などの治療研究を実施、末延はALL小委員会委員長である (2022年3月)。また、高リスク神経芽腫では治療成績は不十分で、日本小児がん研究グループ (JCCG: Japan Children's Cancer Group) のプロトコル共同研究に参加しており、末延は神経芽腫委員会のメンバーである。No Child should die of cancerの達成を目指している。</p> <p>●小児がん経験者のQOL (Quality of life) 向上に関する研究</p> <p>白血病が治る時代になった。しかし、治った子どもたちはきちんと社会生活を送っているかを検討する必要があり、晩期合併症の回避とQOLの担保が極めて重要であると認識している。現在、治療後低身長回避などQOLに注目している。</p> <p>●世界中の小児がんに向けた研究</p> <p>アジア全体での協力体制が望まれるため、Webを利用した会議、共同研究を行っている。</p> <p>●がんの予防に関する開発・研究</p> <p>がん教育、がんワクチン、正しい知識と研究とが必要と考えて情報発信している。</p> <p>* 関連リンク (Research map) https://researchmap.jp/read0072809 (JACLS HP) http://www.jacls.jp/ (JCCG HP) http://jccg.jp/ (大分大学小児科 HP) https://www.oita-ped.jp/about/member/suenobu-s.html</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2020年、Early Recovery of Height Velocity in Prepubertal Children With Acute Lymphoblastic Leukemia Treated by a Short Intensive Phase Without Cranial Radiation Therapy. J Pediatr Hematol Oncol 42: 271-274. (主著) Japanese children and children in Western countries with acute lymphoblastic leukaemia treated with a Berlin-Frankfurt-Münster (BFM)95-based protocol. Br J Haematol (共著) <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 小児がん治療後の長期フォローアップガイド (分担) クリニコ出版 2021年 小児血液・腫瘍学 (分担) 改訂第2版 診断と治療社 2022年 <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> 令和2年、大分大学小児科同門会論文賞『小川賞』 令和3年度、大分大学医学部附属病院治験貢献賞

所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座・教授	
氏名	末弘 理恵 (Suehiro Rie)	
取得学位	博士 (保健学)、金沢大学、2011年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	クリティカルケア看護、老年看護
研究キーワード	クリティカルケア看護、周手術期、高齢者ケア、せん妄ケア
研究内容	<p>●手術を受ける後期高齢者のケアプログラムの開発</p> <p>手術をうける後期高齢者は、前期高齢者と比べ緊急手術及び術後ICUに入室している者が多かった。ICUでは、早期の苦痛の除去や付添い、リラクゼーションや関心ある話題により睡眠が充足され早期回復につながっていた。一方、手術に対する意思決定を高齢者自身が行い、術後の人生をイメージしていた者は術後のリハビリテーションにも積極的に参加していた。後期高齢者が手術を受ける際には術前より今後生き方を共に考え支援する必要性がある。</p> <p>●ICUにおける高齢患者のケアプログラムの開発</p> <p>ICUに入室する高齢者は成人期患者の7割を占め、入室期間は成人期患者より延長していた(4.2日<5.1日)。看護師は高齢患者のケアにて、多動不穏な状態や睡眠障害等を経験し、患者の現状認知、睡眠覚醒、早期離床を実施していた。一方、せん妄や認知症による意思疎通の障害に困難感を持ち、チーム上の課題として、看護師間のケア方針や内容の不統一、医師との治療方針の共有が示された。ICUでの高齢患者へのケアプログラムにおいては、個別ケアに加え、医療チームで進める必要性が示唆された。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●主な研究論文・発表</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Suehiro Rie ; Effect of cerumen removal among institutionalized elderly individuals: Hearing and the relationship between earwax type and accumulation, Journal of the Tsuruma health science society, Kanazawa University, Vol.34 No.2, 1-11,2011. ・ 森淳恵、末弘 理恵、荒川 満枝他：看護系大学卒業生のキャリアとキャリアアップに対する考え、大分大学高等教育センター紀要 第5号 21-27,2013. ・ 尾野亜由美, 末弘理恵：救命救急センターに入院した後期高齢患者の睡眠の実態—非装着型睡眠計を用いた睡眠評価—, 日本老年看護学会 第23回学術集会抄録集, 163, 2018. ・ 末弘理恵、宮脇美菜子：ICUにおける高齢患者のケアの実際、第45回日本看護学会・急性期看護学術集会、269, 2014. <p>●主な科学研究費補助金</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 要支援・要介護高齢者の耳のケア効果に関する介入研究, 2008-2010, 代表 ・ ICUにおける高齢者のケアプログラムの開発, 2011-2014, 代表 ・ 手術を受ける後期高齢者におけるケアプログラムの開発, 2015-2018, 代表 ・ 術後疼痛の症状マネジメントに用いる除痛アルゴリズムと評価指標の構築, 2019-2023, 分担 ・ 認知症を有する後期高齢者のがん患者の人生の最終段階を支える看護のモデル化, 2016-2019, 分担 <p>●受賞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 重度認知症高齢者の耳垢蓄積と耳のケアの実態, 日本認知症ケア学会・石崎賞, 2007.

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部





医学部



医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等



所属・職位	医学部医学科呼吸器・乳腺外科学講座・教授	
氏名	杉尾 賢二 (Sugio Kenji)	
取得学位	医学博士、九州大学、1988年3月	
SDGs目標	  	
研究分野	腫瘍外科学、分子生物学	
研究キーワード	肺癌、癌遺伝子、分子標的治療、がん免疫治療	
研究内容	<p>●肺癌における標的分子の解析と分子標的治療の耐性に関する研究</p> <p>肺癌の標的分子、上皮成長因子受容体(EGFR)遺伝子変異の高感度スクリーニング法を開発し、チロシンキナーゼ阻害剤(TKI)に対する感受性変異と新たな耐性変異を見いだした。現在、感受性と耐性を規定するバイオマーカーの探索研究を推進し、さらに多施設共同臨床試験にて標準治療のエビデンス創出と個別化治療の推進に努めている。</p> <p>●肺癌の周術期治療の開発</p> <p>局所進行肺癌 (IB期～IIIA期) の手術成績はいまだ満足のいくものではなく、手術前後の薬物/放射線治療により治療成績を向上させる必要がある。殺細胞性抗癌剤、分子標的薬、免疫チェックポイント阻害剤などの新規薬物の臨床試験を企画・参画し、新たな標準治療のエビデンス構築に努めている。</p> <p>●胸部悪性腫瘍に対する低侵襲手術の開発</p> <p>内視鏡手術 (胸腔鏡手術) やロボット支援下手術などを臨床に取り入れ、低侵襲手術の提供を図っている。また、それらの術式開発をすすめている。</p> <p>●肺癌、大腸癌、膵臓癌の多段階発癌に関する研究</p> <p>肺癌の多段階発癌に関与する遺伝子を同定し、癌遺伝子、腫瘍抑制遺伝子、細胞接着因子などの遺伝子変化と癌の進展・予後などとの関係を解明した。また、Epigeneticの観点からメチル化解析の共同研究を米国と行い発癌との関係を見いだした。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●肺癌における標的分子の解析と分子標的治療の開発 (論文)</p> <ol style="list-style-type: none"> 2021年、Osoegawa A, ...Sakai K, Nishio K, <u>Sugio K</u>. High incidence of C797S mutation in patients with long treatment history of EGFR-TKIs including osimertinib. JTO Clin Res Rep. 2:100191 2021年、Sakai K, ... <u>Sugio K</u>, et.al. Tumor mutation burden as a biomarker for lung cancer patients treated with pemetrexed and cisplatin (the JIPANG-TR). Cancer Sci. 112:388-396 2018年、Hashimoto T, Osoegawa A, Takumi Y, Abe M, Kobayashi R, Miyawaki M, Takeuchi H, Okamoto T, <u>Sugio K</u>. Intratumoral heterogeneity of copy number variation in lung cancer harboring L858R via immunohistochemical heterogeneous staining. Lung Cancer. 124:241-247 <p>●肺癌の周術期治療の開発 (論文)</p> <ol style="list-style-type: none"> 2022年、Tada H, <u>Sugio K</u>, et.al. Randomized phase III study of gefitinib versus cisplatin plus vinorelbine for patients with resected stage II-III non-small-cell lung cancer with EGFR mutation (IMPACT). J Clin Oncol. 40:231-241 2022年、Takahashi T, <u>Sugio K</u>, et.al. Predictive value of EGFR mutation in stage II/III non-squamous NSCLC patients treated with platinum doublet postoperative chemotherapy. Cancer Sci. 113:287-296 2021年、Yamaguchi H, ... <u>Sugio K</u>. A Phase II Study of Osimertinib for Radiotherapy-Naive Central Nervous System Metastasis From NSCLC: Results for the T790M Cohort of the OCEAN Study (LOGIK1603/WJOG9116L). J Thorac Oncol. 16:2121-2132 <p>●受賞 1. 2006年、日本肺癌学会 篠井・河合賞</p>	

所属・職位	医学部医学科耳鼻咽喉科学講座・教授	
氏名	鈴木 正志 (Suzuki Masashi)	
取得学位	医学博士、大分医科大学、1988年10月	
SDGs目標		

研究分野	上気道粘膜免疫
研究キーワード	粘膜免疫、経鼻ワクチン、インフルエンザ菌、急性上気道炎
研究内容	<p>① インフルエンザ菌由来ワクチン抗原による気道粘膜免疫に関する研究 免疫アプローチである経鼻および全身免疫ルートによるインフルエンザ菌ワクチン抗原の外膜蛋白(OMP)による粘膜免疫誘導を行い、抗CTLA-4抗体、PD-1/2抗体の全身投与との併用にて、全身免疫応答の活性化により粘膜免疫応答が賦活化するかどうか検証し、新しいワクチン治療法の開発を行っている。コラゲナーゼ処理や比重遠沈法などにより単核球を採取して、CD4、CD8陽性T細胞においてCD69、CD25、CD62L、CD44などの活性化マーカーにてTリンパ球の状態や、B220陽性B細胞、CD11b陽性顆粒球、CD11c陽性樹状細胞などの活性化についても解析し、セルソーターを用いて各臓器よりT細胞分離後にRNAを抽出し、innate and adaptive immune responses PCR arrayを施行し、Tリンパ球のカスケードをRNAレベルから解析し、免疫応答でのカスケードの解明および細胞内シグナル伝達の解析を行い、抗CTLA-4抗体、PD-1/2抗体投与後の免疫誘導の変化した因子を探索している。</p> <p>② 自然リンパ球と経鼻免疫による上気道粘膜免疫応答に関する研究 自然リンパ球の刺激によりB細胞が活性化し抗体産生を誘導されることが最近の研究で報告されており、インフルエンザ菌のワクチン候補であるOMPおよびその一部であるP6を抗原として適切なアジュバントにて経鼻免疫誘導後に、鼻粘膜関連リンパ組織、頸部リンパ節、脾臓における自然リンパ球の動態について解析しており、自然リンパ球のうちILC2をセルソーターにて分離したのちに、各臓器における自然リンパ球のサイトカイン、ケモカイン発現について解析を行っている。各組織からB細胞や樹状細胞を分離してILC2と共培養を行い、OMPおよびP6特異的抗体産生効果および樹状細胞の活性化について検証し、経鼻粘膜免疫賦活と自然リンパ球との関連性についての研究を行っている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>①科学研究費 1) 科学研究費 基盤研究 (C) : 令和2年度~令和5年度 研究課題名: 免疫チェックポイント阻害による上気道粘膜免疫応答賦活化 (研究代表者: 鈴木正志、研究経費4,290,000円) 2) 科学研究費: 基盤研究 (C) : 平成29年度~令和元年度 研究課題名: 上気道粘膜免疫反応と自然リンパ球の関与 (研究代表者: 鈴木正志、研究経費3,500,000円)</p> <p>②学会発表 19th Symposium of Otitis Media, June 4-8, 2017, Goldcoast (Australia) Masashi Suzuki, Takashi Hirano, Yoshinori Kadowaki, Satoru Kodama, Toshiaki Kawano. : Phase variation of nontypeable <i>Haemophilus influenzae</i> affect mucin production in the middle ear.</p> <p>③論文 Hirano T., Kodama S., Kawano T., Suzuki M. Accumulation of regulatory T cell and chronic inflammation in the middle ear in a mouse model of chronic otitis media with effusion induced by combined eustachian tube blockage and nontypeable <i>Haemophilus influenzae</i> infection. <i>Infect Immun</i>, 2016;84:356-364.</p>

所属・職位	医学部医学科診断病理学講座・教授	
氏名	駄阿 勉 (Daa Tsutomu)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、1994年9月	
SDGs目標	  	

研究分野	診断病理学
研究キーワード	唾液腺腫瘍病理
研究内容	<p>●唾液腺腫瘍の病理診断に関する研究</p> <p>唾液腺は食物摂取に関するQOLに関与する重要な臓器であり、大唾液腺、小唾液腺の形で頭頸部領域に広く分布する。他の臓器に例にもれず、唾液腺にも腫瘍性病変が発生するが、他の臓器とことなり、腫瘍発生に関与する細胞が多彩であり、特に筋上皮細胞が関わることにより、その組織形態が多彩であり、組織型の種類も多く、加えて、唾液腺腫瘍は比較的稀であることから、一般病理医にとっては診断の難しい領域となっている。また、近年、キメラ遺伝子や、特定の遺伝子の突然変異等、病理診断に直結する分子病理学異常に関する知見の蓄積が著しく、分子生物学的手法の診断への応用が、正確な病理診断に必須となってきている。当講座においては、免疫染色、PCR、DNAシーケンス解析、RT-PCR、FISHを用い、唾液腺腫瘍の診断に資する新規マーカの検出を試みている。</p> <p>●腫瘍の転移に関する研究</p> <p>健診体制整備による早期発見、有効な分子標的薬の開発等により、癌の治癒率は近年著しく向上しているが、悪性腫瘍は、いまなお、死亡原因一位の地位を保っている。その悪性腫瘍の完治が困難であることの主要因は腫瘍の転移である。転移に関する細胞生物学的な要素として、上皮間葉変換、細胞間接着等があげられ、それに関する分子異常が次第に明らかとなってきているが、いまだ解明すべき部分が多い現象である。当講座では、乳癌、大腸癌等の臨床材料を用い、免疫染色や分子病理学的手法を応用し、転移のメカニズムの解明を試みている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2021年. Immunohistochemical Reactivity of Prostate-Specific Membrane Antigen in Salivary Gland Tumors. Head Neck Pathol. 2021年. Clinical significance of sarcoid-like reaction in lymph nodes of gastric cancer patients. J Surg Oncol. 2019年. A Biotin Tagging Immunoelectron Microscopy for Paraffin-embedded Sections. Appl Immunohistochem Mol Morphol 2018年. Difference in transducin-like enhancer of split 1 protein expression between basal cell adenomas and basal cell adenocarcinomas - an immunohistochemical study. Diagn Pathol 2013年. PLAG1 and CYLD do not play a role in the tumorigenesis of adenoid cystic carcinoma. Mol Med Rep. 2009年. Alteration of SMAD4 does not participate in tumorigenesis of adenoid cystic carcinoma of the salivary gland. Mol Med Rep

所属・職位	医学部医学科循環器内科・臨床検査診断学講座・教授	
氏名	高橋 尚彦 (Takahashi Naohiko)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1993年3月	
SDGs目標		

研究分野 循環器内科学

研究キーワード 不整脈, 心房細動, 心外膜脂肪

研究内容 ●**心房細動, 心房線維化, 炎症, 心外膜脂肪に関する研究**
 2004年から, “心房細動は生活習慣病と密接に関係し炎症性心房線維化がその主たる病態である”と考え研究を続けてきた。2013年からヒト開胸手術時に得られる心房細動患者の左心耳切片心外膜脂肪の解析に着手した。連続59例の左心耳標本を解析し, “心外膜脂肪そのものの顕著な線維化が心房細動重症化をもたらす”という新事実を明らかにした (論文1, 下図)。



また“心外膜脂肪中の悪玉サイトカイン (IL-6, MCP-1, TNF- α) の含量が多いほど隣接する心房筋の線維化が顕著で心房細動が重症である”ことも突き止めた。引き続き, 独自の器官培養法を確立し, ヒト心外膜脂肪が真に心房線維化を惹起することを証明し, そのシグナル伝達系を解明した (論文2)。平成31年度には基盤(B)に採択され研究を大きく推進できた。




●**Brugada症候群, 早期再分極症候群に関する研究**
 2006年にJ波の顕著な変動を示す症例を報告し (論文3), NEJM誌に引用された。心室細動抑制にシロスタゾールとベプリコールの併用が有用であることを証明し (論文4), 2020年改訂版不整脈薬物治療ガイドラインに採用された。

研究業績・アピールポイント 心外膜脂肪と心房細動の関連についてヒト組織を用い世界のトップに位置する研究を継続している。Brugada症候群, 早期再分極症候群も独創性の高い論文を多く公表してきた。

- 論文
1. Abe I, Takahashi N, et al. Association of fibrotic remodeling and cytokines/chemokines content in epicardial adipose tissue with atrial myocardial fibrosis in patients with atrial fibrillation. Heart Rhythm. 2018 Nov;15(11):1717-1727.
 2. Kira S, Takahashi N, et al. Role of angiotensin-like protein 2 in atrial fibrosis induced by human epicardial adipose tissue: Analysis using an organo-culture system. Heart Rhythm. 2020 Sep;17(9):1591-1601.
 3. Shinohara T, Takahashi N, et al. Characterization of J wave in a patient with idiopathic ventricular fibrillation. Heart Rhythm. 2006 Sep;3(9):1082-4.
 4. Shinohara T, Takahashi N, et al. Combination therapy of cilostazol and bepridil suppresses recurrent ventricular fibrillation related to J-wave syndromes. Heart Rhythm. 2014 Aug;11(8):1441-5.

所属・職位	医学部医学科生物物理学講座・教授	
氏名	谷川 雅人 (Tanigawa Masato)	
取得学位	博士 (理学)、広島大学、1995年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	医療情報学、生物物理学
研究キーワード	ベイズ推定、情報統計力学、原子間力顕微鏡
研究内容	<p>●少数検査データ時のベイズ統計解析による重症度の確率の決定法</p> <p>腎生検をはじめとする様々の検査データからIgA腎症等の進行段階を正確に推定し、それぞれの患者の置かれた状況を考慮した治療指針を、医療現場に提供する。十分な数の試料が、確保できない場合もある。少数の試料しか得られない場合において、重症度をベイズ統計を用いて確率分布として導き出し、それぞれの患者の実情と併せて考えることのできる方法を確立する。また、IgA腎症の場合、病変と考えられる糸球体には、巣状糸球体硬化症、各種増殖性腎炎、硝子化、半月体形成など様々なものがあり、この病気にかかる年齢も様々である。この中で、どのような場合に予後が悪く、透析療法に至りやすいのかを、マルコフ連鎖モンテカルロ法を拡張した分析方法を検討している。また十分な数の用意はできない場合の解析方法として、回帰係数のいくつかを0にすることによって、スパース性を維持した解析方法を検討し、この結果を通常のGibbs sampler等のMCMC法によって推定された事後分布と比較し、推定精度や予測精度がどのように変化するかを詳細に調べ、有用性を明らかにした。さらに、この結果を用いて、どのような病変（分布）で、病気がどのように進行するかの確率分布を明らかにする。</p> <p>●対イオンによるDNAの局所構造変化がタンパク質との相互作用や凝集に及ぼす影響</p> <p>G-quadruplex等のDNA四重鎖を取り得る配列がゲノム中に多数あり、これらがガンをはじめとする様々な病気にかかわっていることが分かってきた。我々はこれまで、このG-quadruplex形成過程や薬剤となる小分子との相互作用をCDストップフローなどによって明らかにしてきた。また、DNAの溶液中での挙動を1分子観察によって明らかにしてきた。これらの成果をもとに、本研究では、G-quadruplexが形成されることに伴い、その近くのDNA鎖の構造がどのように変化するかを明らかにした。具体的には、G-quadruplexの形成過程を実験とシミュレーションによって明らかにし、形成段階に応じた周囲のDNAの変化を一分子観察によって調べた。また、さまざまな小分子（薬剤候補）を加えた場合について、この変化にどのような影響を及ぼすのかを調べた。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. MicroRNA-375 is downregulated in gastric carcinomas and regulates cell survival by targeting PDK1 and 14-3-3ζ. Cancer Research, 70, 2339-2349, 2010. 2. Detection and mapping of mismatched base pairs in DNA molecules by atomic force microscopy., Nucleic Acids Res., 電子版 28, E38, 2000. <p>●国際学会</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Analysis of Japanese histological IgA classification using probabilistic analysis associated with the Bayesian theorem., American Society of Nephrology Annual Meeting ,2019. 2. How the Circular and Linear Conformational Fluctuations of Giant DNA Molecules Change with the Viscosity of the Solvent., 65th Biophysical Society Annual Meeting, 2021.

所属・職位	医学部医学科精神神経医学講座・教授	
氏名	寺尾 岳 (Terao Takeshi)	
取得学位	博士 (医学)、産業医科大学、1992年7月	
SDGs目標	 	

研究分野 精神神経科学

研究キーワード 双極性障害、リチウム、臨床精神薬理、リワーク、実存的アプローチ

研究内容

- リチウムと自殺予防に関する研究：リチウムには気分安定作用以外にも衝動性や攻撃性を抑える作用があって、気分安定作用を発揮する濃度よりもずっと低い濃度つまり微量でも効果があることがわかってきました。そこで、水道水に含まれるリチウム濃度と自殺率の相関を、大分県→九州→全国とフィールドを広げ調査し、水道水リチウム濃度が高い地域は自殺率が低いことを突き止めました (論文1)。特に、大分県における研究は英国BBCのWorld Newsで取り上げられました。
(関連リンク：<http://news.bbc.co.uk/2/hi/health/8025454.stm>)
- 気分障害から認知症へ移行する疾患に関する研究：「うつ病→双極性障害→認知症という経過を、偶発的にではなく、必然的にたどる特異的な一群が存在し、その背景にGSK-3が関与している」という仮説を考え、最近報告しました (論文2)。この仮説が正しければ、この一群がいわゆる疾患単位として成立し、Mental GSK-3 diseaseと呼称できるのではないかと考えています。
- 実存的アプローチに関する研究：実存哲学に基づく精神療法を研究しています (論文3)。
※詳細、その他研究関連リンク：<https://www.oita-u-psy.jp/research/index.html>

研究業績・アピールポイント

- 科研 基盤研究C (研究代表者)
 - 2021~2024年「うつ病から双極性障害を経て認知症に進展する一群におけるGSK-3遺伝子多型の関与」
 - 2018~2020年「双極I型障害とII型障害の違いに着目した画像所見や薬物反応性の比較研究」
 - 2015~2017年「気質から見た双極性障害の病態進展と治療反応性の予測」他2課題
(関連リンク：<https://nrid.nii.ac.jp/ja/nrid/1000080217413/>)
他公的研究助成11課題、民間研究助成獲得
- 論文
 - Kugimiya T, Ishii N, Kohno K, Kanehisa M, Hatano K, Hirakawa H, Terao T. Lithium in drinking water and suicide prevention: The largest nationwide epidemiological study from Japan. *Bipolar Disord.* 2021 Feb;23(1):33-40
 - Terao T, Ishii N, Hirakawa H. A specific group of patients with diagnostic conversion from depression to bipolar disorder and finally to dementia as a mental GSK-3 disease: A hypothesis. *Bipolar Disord.* 2020 Jun;22(4):356-359.
 - Sakai A, Terao T, et al. Existential and Mindfulness-Based Intervention to Increase Self-Compassion in Apparently Healthy Subjects (the EXMIND Study): A Randomized Controlled Trial. *Front Psychiatry.* 2019 Aug 2;10:538.他多数
(関連リンク：<https://www.oita-u-psy.jp/achievement/251/>)
- 著書
 - 2020年. 精神科薬物療法に再チャレンジ
 - 2020年. 精神科とは無縁と思っていたあなたが困ったときに精神科を味方につけるための本
 - 2019年. 双極性障害の診かたと治しかた-科学的根拠に基づく入門書 他多数
(関連リンク：<https://www.oita-u-psy.jp/book/>)
- 受賞
 - 1998年. 日本臨床神経精神薬理学会海外研修員派遣制度基金受賞

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院




理工学部




福祉健康科学部



その他学内施設等

所属・職位	医学部附属医学教育センター・教授	
氏名	中川 幹子 (Nakagawa Mikiko)	
取得学位	医学博士、大分医科大学、1989年6月	
SDGs目標	  	


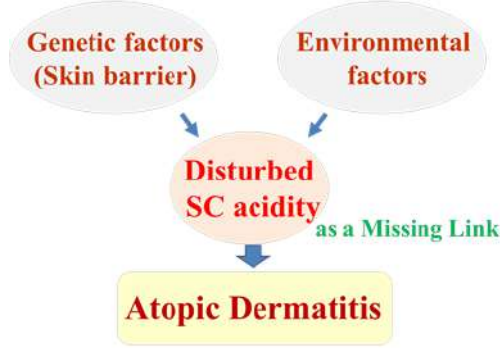
研究分野	循環器病学、性差医学
研究キーワード	心電図、不整脈、自律神経、性差
研究内容	<p>●心電図や不整脈の性差に関する研究</p> <p>心電図のQT時間、STレベルの年齢別性差、女性における性周期や妊娠の影響など、性ホルモンと関連付けた多数の成果を報告した（論文1,2）。世界で初めての報告も含まれており、性差医学に関する原著、総説や著書にも頻繁に引用されている。</p> <p>●早期再分極・J波症候群に関する研究</p> <p>ブルガダ症候群やJ波症候群に注目し、これらの疾患における自律神経の影響や性差、またJ波の成因に心室内の偽腱索や乳頭筋等の心内構造物、心外膜側の急性炎症や胸郭異常による慢性炎症が関連している可能性を世界で初めて報告した（論文3,4,5）（著書1,2）。</p> <p>●不整脈と心臓自律神経機能に関する研究</p> <p>ヒトを対象に不整脈の発生と密接な関係がある自律神経機能に関する研究を行い、不整脈のリスク層別化に重要な心電図学的指標について多くの成果を発表した。また圧受容体反射（BRS）に関する研究では、我々独自の評価法を開発し（論文6）、2型糖尿病患者の長期的な心血管イベントの予測に有用である可能性を報告した。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2005年, Gender differences in autonomic modulation of ventricular repolarization in humans. J Cardiovasc Electrophysiol. 2006年, Influence of menstrual cycle on QT interval dynamics. PACE. 2012年, Electrocardiographic characteristics of patients with false tendon: possible association of false tendon with J waves. Heart Rhythm. 2021年, Transient manifestation of J waves and Brugada pattern electrocardiograms in patients with acute pericarditis. JACC Clin Electrophysiol. 2021年, Possible role of narrow anteroposterior thorax in patients with Brugada syndrome. JACC Clin Electrophysiol. 2001年, Development of a new method for assessing the cardiac baroreflex: response to downward tilting in patients with diabetes mellitus. Heart. <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 2012年, 不整脈の検査法. 1.新しいホルター心電図. 不整脈学. 南江堂. 2013年, 自律神経とJ波. J波症候群. 医学出版社 <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> 2010年, 大分大学女性研究者奨励賞 最優秀賞 2011年, 第4回日本性差医学・医療学会 優秀演題賞

所属・職位	医学部医学科おおいた地域医療支援システム構築事業講座・教授	
氏名	奈須 家栄 (Nasu Kaei)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1995年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	産科婦人科学	
研究キーワード	子宮内膜症、卵巣癌	
研究内容	<p>1) 子宮内膜症における瘢痕形成に関する研究</p> <p>子宮内膜症における瘢痕形成の実験モデルとして、子宮内膜症間質細胞のコラーゲンゲル3次元培養法を確立した。その結果、子宮内膜症間質細胞は正所性子宮内膜間質細胞より強い収縮能を有することが分かった。子宮内膜症細胞では正所性子宮内膜間質細胞に比べて筋線維芽細胞への分化が著明であること、Ras homology (Rho) A、Rho-associated coiled-coil-forming protein kinase (ROCK)-IおよびROCK-IIの発現が増強し、mevalonate-Rho/ROCK pathwayが活性化しているためと考えられた。</p> <p>2) 子宮内膜症におけるエピジェネティクス異常に関する研究</p> <p>①microRNA (miRNA)の発現異常</p> <p>正所性子宮内膜間質細胞と比較して子宮内膜症間質細胞で発現が変化しているmiRNAについて、miRNA microarrayを用いて網羅的に解析を行い、12個のmiRNAを同定した。個々のmiRNAの機能に関する検討から、miRNAの発現異常が子宮内膜症の病態に関与していることが明らかとなった。</p> <p>②ヒストンのアセチル化異常</p> <p>子宮内膜症間質細胞ではヒストンのアセチル化が抑制されていた。ヒストン脱アセチル化酵素阻害剤によって子宮内膜症間質細胞におけるヒストンH3、H4のアセチル化、細胞増殖の抑制と細胞周期の停止およびapoptosisが誘導された。ヒストン脱アセチル化酵素阻害剤は子宮内膜症の治療薬として有用であることが示唆された。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>1. Nasu K, Yuge A, Tsuno A, Narahara H. Mevalonate-Ras homology (Rho)/Rho-associated coiled-coil-forming protein kinase (ROCK)-mediated signaling pathway as a therapeutic target for the treatment of endometriosis-associated fibrosis. <i>Curr Signal Transduct Ther</i> 5: 141-148, 2010.</p> <p>2. Nasu K, Kawano Y, Kai K, Aoyagi Y, Abe W, Okamoto M, Narahara H. Aberrant histone modifications in endometriosis. <i>Front Biosci</i> 19: 1215-1226, 2014.</p> <p>3. Nasu K., Aoyagi Y., Zhu R., Okamoto M., Yano M., Kai K., Kawano Y. Role of repressed microRNAs in endometriosis. <i>Med Mol Morphol</i> 55: 1-7, 2022.</p>	

所属・職位	医学部医学科微生物学講座・教授	
氏名	西園 晃 (Nishizono Akira)	
取得学位	医学博士、大分医科大学、1989年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	ウイルス学、感染症学、ワクチン学、渡航医学	
研究キーワード	狂犬病、新興・再興感染症、渡航医学、熱帯医学、ワクチン	
研究内容	<p>新興・再興ウイルス感染症の病態解明、なかでも狂犬病ウイルス感染の発症病理機構の解明に力を注いでいる。狂犬病は既に本邦で最後の報告がなされてから50年以上が経過し、我が国は世界でも数少ない狂犬病の清浄国となっている。しかしながら昨今の疾病のグローバル化に伴い、狂犬病は再び我が国において再興する可能性のあるre-emergingウイルス感染性疾患として認識されている。国内にある大学医学部において狂犬病研究を行う唯一の講座としてその独自性を生かし、未だに世界中で多くの犠牲者のいる狂犬病について、ウイルス学的側面からばかりでなく、疫学的重要性さらには予防・治療へ向けた臨床的側面までも包含した総合的研究を行い、この疾病の重要性を次の世代にも絶やすことなく継承することを使命と考えている。</p> <p>狂犬病以外にも新型コロナウイルス、重症熱性血小板減少症候群ウイルスなどの新興ウイルス感染症について、その感染病態をグローバル（グローバル&ローカル）に捉えるため、フィールドを中心としたウイルス感染症に関わる研究と、それら病原微生物が引き起こす感染病態の分子的基盤や免疫応答についての研究をその中心に据えて日々研究活動に励んでいる。</p> <p>※関連リンク：https://www.med.oita-u.ac.jp/biseibut/ https://www.oita-glocal.jp/index.html https://japohr.blogspot.com/</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>○受賞：2021年日本熱帯医学会賞、2008年日本ワックスマン財団賞、1992年日本肝臓学会研究奨励賞</p> <p>○プロジェクト：AMEDとJICAによるSATREPS（地球規模課題対応国際科学技術協力プロジェクト）「フィリピンにおける狂犬病排除に向けたワンヘルス・アプローチ予防・治療ネットワークモデル構築」研究代表として、ワンヘルスの視点から独自に開発した狂犬病抗原・抗体迅速診断テストを駆使し、ヒトと動物の両面からの狂犬病制圧に力を注いでいる。</p> <p>○学会活動：日米医学協力研究ウイルス性疾患部会長。日本ウイルス学会、日本感染症学会日本渡航医学会、日本熱帯医学会など理事、評議員</p> <p>○行政・社会活動：大分県内各種感染症関係委員・専門部会委員（感染症専門部会、新型コロナウイルス、新型インフルエンザ、母子保健部会）</p> <p>○その他：海外渡航時に必要なワクチン接種を専門とする渡航医学の臨床</p> <p>○論文：関係論文総数 155報うち狂犬病に関するもの37報、取得特許等知財 10件</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Lateral flow devices for samples collected by straw sampling method for postmortem canine rabies diagnosis. <i>PLoS Negl Trop Dis</i>. 2021 Dec 9;15(12):e0009891. doi: 10.1371/journal.pntd.0009891. eCollection 2021 2. Validation of serum apolipoprotein A1 in rabies virus-infected mice as a biomarker for the preclinical diagnosis of rabies. <i>Microbiol Immunol</i>. 2021 Jul 16. doi: 10.1111/1348-0421.12929. 3. Reevaluation of the efficacy of favipiravir against rabies virus using in vivo imaging analysis. <i>Antiviral Res</i>. 2019 Dec;172:104641. doi:c Epub 2019 Oct 28. 4. Efficacy of favipiravir (T-705) in rabies post-exposure prophylaxis. <i>J Infect Dis</i>. 2016 Apr 15; 213(8): 1253-1261. 5. Evaluation of an improved rapid neutralizing antibody detection test (RAPINA) for qualitative and semiquantitative detection of rabies neutralizing antibody in humans and dogs. <i>Vaccine</i>. 2012 30: 3891-3896. 	

所属・職位	医学部医学科皮膚科学講座・教授	
氏名	波多野 豊 (Hatano Yutaka)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2001年3月	
SDGs目標		

研究分野	皮膚科学
研究キーワード	アトピー性皮膚炎、円形脱毛症、皮膚悪性腫瘍

研究内容	<p><アトピー性皮膚炎> *アトピー性皮膚炎の病態の3つの主要な側面である「アレルギー炎症」「皮膚バリア機能」「痒み」の相互関係について研究を行ってきた。特に、タイプ2サイトカインが角層透過性バリア機能に負の影響を及ぼすことは世界に先駆けて示してきた。</p>  <p><角層 pH の異常のアトピー性皮膚炎の病態における重要性と治療・予防法への応用> <円形脱毛症> 専門外来における多数の患者診療を通じて治療法の向上に努めている。 <皮膚悪性腫瘍> 高齢者にも耐え得る、安全で有効な治療薬の開発を目指して、癌細胞株を用いた研究を推進中である。</p> 
------	---

研究業績・アピールポイント	<p>アトピー性皮膚炎の病態研究では、特に、タイプ2サイトカインが角層透過性バリア機能において重要な角層セラミド産生に負の影響を及ぼすことを世界に先駆けて示してきた。この成果は、皮膚科学分野のトップジャーナルであるJournal of Investigative Dermatologyにおいて注目すべき知見として紹介され、また、免疫アレルギー学のトップジャーナルである、Journal of Allergy and Clinical Immunologyの総説の共著者として報告した。現在も、アトピー性皮膚炎の病態研究についての報告を継続している。</p> <p>(参考文献) Elias PM, Hatano Y, Williams ML Basis for the barrier abnormality in atopic dermatitis: 'outside-inside-outside' pathogenic mechanisms J Allergy Clin Immunol 2008 Jun;121(6):1337-43</p>
---------------	--

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院



理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科細胞生物学講座・教授	
氏名	花田 俊勝 (Hanada Toshikatsu)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2000年6月	
SDGs目標	 	

研究分野	疾患生物学、分子生物学	
研究キーワード	ゲノム工学、疾患モデル動物、遺伝性希少疾患	
研究内容	<p>1. 希少遺伝性疾患の病態解明</p> <p>ゼブラフィッシュはヒト遺伝子と約70%の相同性を持ち、コスト面や動物愛護の観点から医学実験動物として有用である。また、低分子化合物のin vivoスクリーニングや、体の透明性から蛍光タンパク質を用いた形態やシグナルの可視化が可能であるなど多くの利点を持つ。我々は、希少遺伝性疾患で発見された遺伝子変異の疾患発症との関連性を検証するため、ゲノム編集を用いてゼブラフィッシュモデルを作製・解析している。特に、希少遺伝性疾患に多くみられるような一塩基置換等の点変異を模倣するゼブラフィッシュモデルの作製に力を入れており、独自の手法により作製効率の向上を図っている。</p>  <p>2. 機能性RNAの生体内における役割</p> <p>希少疾患である橋小脳低形成10型のモデル動物の解析から、神経変性を誘導する新たな小RNAを発見した (Nature,2013, Cell,2014)。この小RNAと他の病的RNA候補分子が実際に生体内で神経変性を惹起するか、ゼブラフィッシュを用いた実験系で検証した (BBRC,2020)。本方法は、核酸医薬を含む機能性RNAのin vivoスクリーニングとして応用可能であると思われる。</p> <p>3. ゼブラフィッシュの生体内シグナル可視化モデル</p> <p>腎臓ポドサイト障害は慢性腎不全に至る重要な病的機転であることから、ポドサイトを標的とした新規治療法の探索が進められている。我々は、ゼブラフィッシュの透明性を利用して、腎臓ポドサイト障害の可視化モデルの作製を行なっている。本モデルにより、腎臓ポドサイトを標的とした創薬を目指している。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>・希少遺伝性疾患を模したゼブラフィッシュ点変異ノックインモデルの作製並びにゼブラフィッシュの生体内シグナル可視化モデルの作製をすすめている。</p> <p>論文</p> <p>1: Morisaki I, Shiraishi H, Fujinami H, Shimizu N, Hikida T, Arai Y, Kobayashi T, Hanada R, Penninger JM, Fujiki M, Hanada T. Modeling a human CLP1 mutation in mouse identifies an accumulation of tyrosine pre-tRNA fragments causing pontocerebellar hypoplasia type 10. <i>Biochem Biophys Res Commun.</i> 2021, 570:60-66.</p> <p>2: Inoue M, Miyahara H, Shiraishi H, Shimizu N, Tsumori M, Kiyota K, Maeda M, Umeda R, Ishitani T, Hanada R, Ihara K, Hanada T. Leucyl-tRNA synthetase deficiency systemically induces excessive autophagy in zebrafish. <i>Sci Rep.</i> 2021, 11(1):8392.</p> <p>受賞</p> <p>2016年 武田報彰医学研究助成</p>	

所属・職位	医学部医学科神経生理学講座・教授	
氏名	花田 礼子 (Hanada Reiko)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2001年3月	
SDGs目標		

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部

医学部



医学部附属病院




理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

研究分野	生理学, 神経科学, 内分泌・代謝学, 病態生理学	
研究キーワード	生理機能解析, in vivoモデル, ゼブラフィッシュ, マウス, 病態モデル, 肥満・肥満関連疾患, 精神・神経疾患, 臨床応用	
研究内容	<p>1. 肥満関連疾患NAFLD/NASHの新たな病態形成機構の解明と創薬基盤の開発</p> <p>近年、肥満や肥満関連疾患に罹患する患者数が増加している。肥満の進行に伴い肝臓では非アルコール性脂肪肝疾患 (NAFLD) および非アルコール性脂肪肝炎 (NASH) を発症する。異所性脂肪蓄積によりダメージを受けた肝細胞からは細胞外にdamage associated molecular patterns (DAMPs)が放出され、肝細胞のさらなる炎症や線維化を進展させることが判明しているものの、未だ病態進展に伴う肝臓でのDAMPsの経時的な動態変化は明らかになっていない。我々は、DAMPsを時空間的に可視化するゼブラフィッシュモデルを独自に作製し解析することで、NAFLD/NASHの新たな病態機構解明と治療基盤の開発を目指している。</p>  <p>2. 精神・神経疾患の新たな病態機構の解明と創薬基盤の開発</p> <p>現代社会では過度のストレスにより、うつ病やパニック障害、心的外傷後ストレス障害 (PTSD) などの精神・神経疾患に罹患する患者数が増加している。多くの精神・神経疾患においては脳内の神経伝達物質のバランス障害をきたしているが、発症時や病態の進行に応じた神経伝達物質動態は未だ不明な点が多い。我々は、神経伝達物質動態可視化ゼブラフィッシュを作製し解析することで、精神・神経疾患の新たな病態機構の解明と新規治療法の創出に寄与したいと考えている。</p> <p>3. 神経ペプチドを標的とした病態機構解明と創薬基盤の開発</p> <p>我々は神経ペプチドを標的とした遺伝子改変マウスを作製・解析することで、肥満や精神・神経疾患における新たな病態機構を明らかにしつつあり、その知見をもとに新規薬理作用を有する抗肥満薬や精神・神経疾患に対する治療薬の開発を目指したい。</p>	
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・ 遺伝子改変ゼブラフィッシュ、遺伝子改変マウスの作製、生理学的解析 ・ 生体内でのDAMPsや神経伝達物質動態可視化ゼブラフィッシュモデルの作製、解析 ・ 肥満・肥満関連疾患モデル、精神・神経疾患モデルの作製ならびに病態生理学的解析 <p>【代表論文】 *責任著者</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Hanada R,*Kojima M et al. <i>Nature Med.</i> 10(10) :1067-1073. 2004 2. Hanada R,*Penninger JM et al. <i>Nature.</i> 462(7272): 505-509. 2009 3. Teranishi H, *Hanada R. <i>Int J Mol Sci.</i> 22(8) :4238. 2021 4. Umeda R, *Hanada R et al. <i>Genes Cells.</i> 2022 in press <p>【ホームページ】 http://www.med.oita-u.ac.jp/seiri/</p>	




所属・職位	医学部医学科解剖学講座・教授	
氏名	濱田 文彦 (Hamada Fumihiko)	
取得学位	医学博士、愛媛大学、1991年3月	
SDGs目標		
研究分野	解剖学、細胞生物学	
研究キーワード	ピロリ菌、胃がん、前立腺がん	
研究内容	<p>1) <u>ピロリ菌感染による胃がんおよび全身性疾患の発症メカニズムの解明</u></p> <p>ピロリ菌は WHO によってヒトに対して発癌性を示す細菌に分類されています。特に CagA と呼ばれる毒素をもつピロリ菌は、これをもたない菌と比較し、激しい炎症とこれを基盤とする数倍以上とも言われる強い発癌活性を示します。本プロジェクトでは、CagA の標的分子の同定を目的として、ショウジョウバエを用いたゲノム規模の遺伝学的スクリーニングを実施し、複数の新規 CagA 標的分子の同定に成功しました。我々はこれらの標的分子に焦点を絞りながら、ピロリ菌感染による胃がんおよび全身性疾患の発症メカニズムを解明していきます。</p> <p>2) <u>前立腺の分泌機構の解明</u></p> <p>前立腺がんのスクリーニングに広く用いられるPSA検査には低い前立腺がん発見率やPSAが高値を示す症例に対する過剰診療などの問題が指摘されていますが、PSAが血液中に漏出するメカニズムはもとより、前立腺の分泌制御機構はほとんど明らかになっていないのが現状です。本プロジェクトでは、ヒトの前立腺組織およびこれをもとに作製する前立腺オルガノイドを用いて、前立腺上皮細胞の分泌を制御する分子を同定し、これに焦点を当てながら、正常前立腺の分泌制御機構を解明します。さらに前立腺肥大症および前立腺がん細胞が示す分泌機構の異常やこれらの疾患におけるPSAの血中への漏出メカニズムを明らかにすることにより、前立腺の分泌機構の包括的理解と、より有効な前立腺がんスクリーニング法の開発を目指します。</p>	
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> Ninomiya R et al (2021) Inhibition of low-density lipoprotein uptake by <i>H. pylori</i> virulence factor CagA. Biochem. Biophys. Res. Commun. 556, 192-198. Iwasaki K et al (2018) Chronic hypoxia-induced slug promotes invasive behavior of prostate cancer cells by activating expression of ephrin-B1. Cancer Sci. 109, 3159-3170. Tanieue K et al (2010) Sunspot, a link between Wingless signaling and endo-replication in <i>Drosophila</i>. Development 137, 1755-1764. Tran H et al. (2008) Trabad, a new positive regulator of Wnt-induced transcription with preference for binding to and cleaving K63-linked ubiquitin chains. Genes Dev. 22, 528-542. Hamada F & Bienz M (2004) The APC tumor suppressor binds to C-terminal binding protein to divert nuclear β-catenin from TCF. Dev. Cell 7, 677-685. Hamada F & Bienz M (2002) A <i>Drosophila</i> APC tumour suppressor homolog functions in cellular adhesion. Nature Cell Biol. 4, 208-213. Hamada F et al (1999) Negative regulation of Wingless signaling by D-Axin, a <i>Drosophila</i> homolog of Axin. Science 283, 1739 - 1742. 	

所属・職位	医学部看護学科・学科長・基盤看護学講座基礎看護学領域・教授	
氏名	原田 千鶴 (Harada Chizuru)	
取得学位	修士 (看護学)、日本赤十字看護大学、1996年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	看護管理学 基礎看護学
研究キーワード	看護管理者育成 看護人材の育成 看護職の職場適応 看護技術の伝承
研究内容	<p>1. 中小規模病院の看護管理者の管理能力向上過程についてのアクションリサーチ 「大分県中小規模病院等看護管理者支援事業」を通じ、地域の看護管理者の管理活動検討会を組織化し、ファシリテーターでの参加観察を通じ、支援者の能力向上過程と支援方法について検討している。各自の看護管理課題を看護管理者同士で共有し、互いの実践知を提供しあうことでエンパワメントされることで、看護管理者が自律して課題解決に取り組む様子が見られ、組織を超えた交流環境が管理能力の向上に関連していた。(論文1)</p> <p>2. キャリア中期 (中堅) 看護師のキャリア発達支援に関する質的研究 出産・育児・介護などライフイベントに取り組みながら働く女性看護師の就業継続意識、配置転換の経験をするることによる看護師のキャリア発達、日々の仕事を通じた看護師の成長について面接調査で、キャリア中期 (中堅) 看護師を対象にした研究である。キャリア中期の看護師が出産や育児の経験を経て専門職として就業継続するにあたり、専門職としての成長を目指す強い意識と自律的に人的環境調整や社会資源の活用する行動力が発見でき、働き続ける方法だけでなく働き続ける意思の早期形成の必要性が明らかになった。(論文2) (論文3)</p> <p>3. 看護技術の伝承における「わざ言語」に関する調査 看護技術を学ぶにあたり、学ぶべきものとは何か、どのような言葉で促されるのかに焦点をあて、わざを学ぶ側の認知プロセスを明らかにする目的で取り組んだ学際的研究である。第一線の指導者や実践者へのインタビューを通じて、それぞれの現場で「わざ言語」が作用する構造の解明を試みた。「わざ言語」は様々で、わざ言語を通して動きを学び「感覚を共有」すること、わざ言語として書かれた文字を通して、師匠の芸や過去の自身と対話し感覚を共有することが作用していることが分かった。(著書1)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>論文1 福田広美, 原田千鶴, 副田明美他: 中小規模病院等の人材育成に関する看護管理向上のプロセス—地域の看護ネットワークを基盤としたアクションリサーチ, 日本看護管理学会誌 25 (1), 118-128, 2021</p> <p>論文2 岐部千鶴, 原田千鶴, 宮崎伊久子, 大戸朋子: 第1子を出産した看護師の就業継続を促す経験に関する研究 日本看護学会論文集 看護管理(47)pp86-89, 2017</p> <p>論文3 後藤啓子, 原田千鶴, 宮崎伊久子: 一般病棟から緩和ケア病棟に配置転換となったキャリア中期看護師の学び 日本看護学会論文集 看護管理(48)pp321-324 2018</p> <p>著書1 生田久美子, 北村勝朗, 原田千鶴ほか「わざ言語 - 感覚の共有を通しての「学び」へ— 慶応義塾大学出版会, pp163-187 pp335-361 2011</p>

所属・職位	医学部医学科医療安全管理医学講座・教授	
氏名	平松 和史 (Hiramatsu Kazufumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1992年6月	
SDGs目標	 	

研究分野	医療安全管理学、感染制御学
研究キーワード	緑膿菌感染症、院内感染対策、医療事故防止
研究内容	<p>緑膿菌感染症の制御に関する研究</p> <p>緑膿菌は環境に広く存在し、易感染宿主に対して重篤な感染症を呈する。緑膿菌は様々な抗菌薬に対して自然耐性を示し、抗緑膿菌作用を有する抗菌薬に対しても獲得耐性を示す場合も多い。こうしたことから抗菌薬に依存しない緑膿菌感染症の制御は重要であり、その一つにワクチンが考えられている。私たちは緑膿菌線毛に着目し、線毛蛋白を用いたワクチンの可能性について研究を行っている。緑膿菌線毛蛋白をマウスに経気道的に免疫することで、緑膿菌肺炎によるマウスの死亡を抑制することを示した。また肺洗浄液中の抗緑膿菌線毛蛋白IgAやIgG抗体の上昇が致死抑制に重要であることも明らかにした。線毛蛋白のペプチドワクチンやDNAワクチンの可能性について、検討を行っている。</p> <p>院内感染対策に関する調査・研究</p> <p>新型コロナウイルスや薬剤耐性菌など院内で伝播、拡散する病原体は多く存在する。こうした病原体が易感染宿主の多い院内で拡がると、入院患者の生命予後に大きく影響する。院内や地域レベル、全国レベルでのサーベイランスを行い、様々な耐性菌などの病原体の検出状況のモニタリングを行っている。さらに、検出された病原体の遺伝子レベルでの解析を行い、病原体の拡がりを調査し、その感染防止策について検討を行っている。</p> <p>医療事故防止に関する調査・研究</p> <p>ヒューマンエラーは様々な場面で生じ、医療におけるエラーは重大な医療事故となる場合がある。こうしたエラーを集積し、その防止策を検討している。さらに医療事故調査制度に基づく調査に参加し、医療事故の発生要因や再発防止策の検討を実施している。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>緑膿菌感染症をはじめとする各種感染症に関する基礎的、臨床的研究を行っている。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.Hashimoto T, Yahiro T, Yamada K, Kimitsuki K, Okuyama MW, Honda A, Kato M, Narimatsu H, Hiramatsu K, Nishizono A. Distribution of Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome Virus and Antiviral Antibodies in Wild and Domestic Animals in Oita Prefecture, Japan. <i>Am J Trop Med Hyg.</i> 2022 Feb 28;tpmd211130. 2.Yoshikawa H, Komiya K, Yamamoto T, Fujita N, Oka H, Okabe E, Yamasue M, Umeki K, Rubin BK, Hiramatsu K, Kadota J. Quantitative assessment of erector spinae muscles and prognosis in elderly patients with pneumonia. <i>Sci Rep.</i> 2021 Feb 22;11(1):4319. 3.Yoshioka D, Kajiwara C, Ishii Y, Umeki K, Hiramatsu K, Kadota J, Tateda K. Efficacy of β-Lactam-plus-Macrolide Combination Therapy in a Mouse Model of Lethal Pneumococcal Pneumonia. <i>Antimicrob Agents Chemother.</i> 2016 Sep 23;60(10):6146-54. 4.Miyajima Y, Hiramatsu K, Mizukami E, Morinaga R, Ishii H, Shirai R, Kishi K, Tokimatsu I, Saikawa T, Kadota J. In vitro and in vivo potency of polymyxin B against IMP-type metallo-beta-lactamase-producing <i>Pseudomonas aeruginosa</i>. <i>Int J Antimicrob Agents.</i> 2008 Nov;32(5):437-40. 5.Ohama M, Hiramatsu K, Miyajima Y, Kishi K, Nasu M, Kadota J. Intratracheal immunization with pili protein protects against mortality associated with <i>Pseudomonas aeruginosa</i> pneumonia in mice. <i>FEMS Immunol Med Microbiol.</i> 2006 Jun;47(1):107-15.

所属・職位	医学部医学科脳神経外科学講座・教授	
氏名	藤木 稔 (Fujiki Minoru)	
取得学位	医学博士、大分医科大学、1990年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	脳神経外科学
研究キーワード	神経外傷学、脳卒中、脳腫瘍、磁気刺激

研究内容	<p>1. 神経外傷学を俯瞰的・網羅的病態解析(業績[1][4]) 脳神経外傷・脳卒中は発症直後の急性期のみならず、亜急性期から慢性期に至る病態を俯瞰的に解決する必要がある。重度障害に加え、高次脳機能障害を克服することで真の社会復帰を目指す。</p> <p>2. 脳の磁気刺激を脳神経外科学臨床応用へ(業績[1][2][3][4][5]) 脳腫瘍手術には確実性安全性が必須である。正確な術前脳機能評価を術中・術後経時的に行うことを可能にする新規デバイスを開発した。安全性・有効性の検証後、脳神経外科学臨床応用可能なシステム構築を目指す。</p> <p>3. 神経科学を国際共同研究へ(業績[2][6])</p>
	 

研究業績・アピールポイント	<p>研究根幹を成す知的財産と原著</p> <ol style="list-style-type: none"> 藤木 稔 非侵襲的ヒト優位半球・大脳運動性言語野機能判定装置 特願2018-137499号 藤木 稔 神経系細胞の増殖を活性化させるための磁気の制御方法、及び脳・運動機能再建システム 新規特許出願中 特願2018-164498; (2018年7月23日; 2018年9月3日出願) 藤木 稔, 磁気刺激コイル 特開2012-187149; (2011年3月8日出願) Fujiki M, W Matsushita, Kawasaki Y, Fudaba H. Monophasic-Quadripulse Theta Burst Magnetic Stimulation for Motor Palsy Functional Evaluation After Intracerebral Hemorrhage. Front Integr. Neurosci. Apr; 2022. Fujiki M, Kuga K, Ozaki H, Kawasaki Y, Fudaba H. Blockade of Motor Cortical Long-Term Potentiation Induction by Glutamatergic Dysfunction Causes Abnormal Neurobehavior in an Experimental Subarachnoid Hemorrhage Model. Front Neural Circuits. Apr 9;15: 670189. 2021. Fujiki M, Yee KM, Steward O. Non-invasive High Frequency Repetitive Transcranial Magnetic Stimulation (hfrTMS) Robustly Activates Molecular Pathways Implicated in Neuronal Growth and Synaptic Plasticity in Select Populations of Neurons. Front Neurosci. 16; 14: 558. 2020.
---------------	---

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

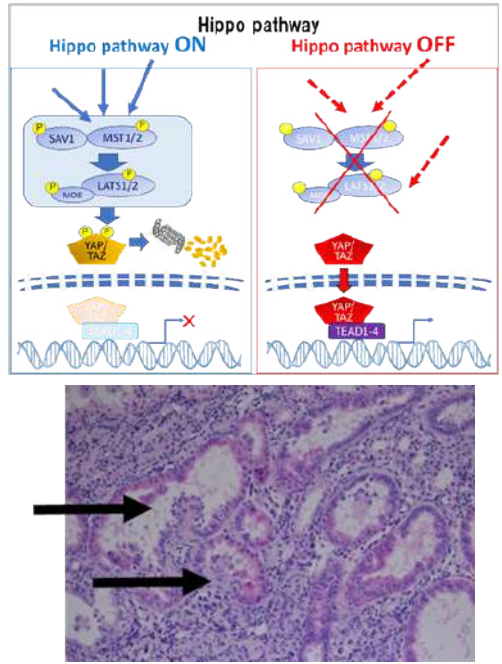
理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科医学生物学講座・教授	
氏名	松浦 恵子 (Matsuura Keiko)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1992年12月	
SDGs目標	   	

研究分野	医学 ダイバーシティ
研究キーワード	腎癌, 悪性, ノックアウトマウス, 適正飲酒, ダイバーシティ
研究内容	<p>1. 悪性度腎癌のゲノム解析とHippoパスウェイノックアウトマウス作成</p> <p>腎臓にできる癌の約80%を占める淡明細胞性腎細胞癌は、組織学的に低悪性度と高悪性度に分類され、その予後は全く異なる。ゲノム解析により高悪性度腎細胞癌は14番染色体に欠失が認められ、SAV1遺伝子の発現低下が悪性化をもたらしていることが示唆された。SAV1遺伝子がコアコンポーネント(主要因子)の一つであるHippoパスウェイというシグナル伝達経路の異常(右図OFF)をもたらしていることがわかった。そこでHippoパスウェイを腎臓特異的に働かないようにしたSAV1ノックアウトマウスを作成したところ、腎尿細管の異型増殖がみられた(右図矢印)ことから、Hippoパスウェイの異常は腎癌悪性化に関わる可能性が見いだされている。</p> <p>2. 適正飲酒のための臨床研究</p> <p>飲酒後の自覚症状や他覚検査による臨床研究を行い、適正飲酒の推進を目指している。</p> <p>3. ダイバーシティの推進</p> <p>大分大学ダイバーシティ推進本部長として、企業等と連携し地域でダイバーシティを推進している。共同研究等を通じた女性研究者・技術者のキャリアアップ、ダイバーシティ・男女共同参画に関する意識改革、セミナー、教育、意識調査、女性医療人支援等を行っている。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>1.Hippo pathwayの腎臓特異的ノックアウトマウスを作成・解析中である</p> <p>【代表的論文】 1) Nakada C et al. J. Pathol., 251(1), 12-25 2020. 2) Takahashi M et al. Cancer Sci., 107(4): 417-23, 2016. 3) Kai T et al. J. Pathol., 239(1): 97-108, 2016. 4) Matsuura K et al. Histopathology,64(2), pp306-309, 2014 5) Narimatsu T et al. Cancer Medicine, Oct 15., pp1-13, 2014 6) Matsuura K et al. BMC Cancer, 20;11(1):523, pp1-10, 2011 7) Inoue T et al. Cancer Sci, 103(3), pp569-576, 2011 8) Yoshimoto T et al. J Pathol, 213, pp392-401, 2007</p> <p>2. UMIN-CTR臨床試験「麦焼酎の代謝に関する研究 ―アルコール摂取後の呼気中濃度と精神運動機能の経時的変化―」</p> <p>3. 令和3年度 第5回日本ダイバーシティ学会 大会長 文部科学省科学技術人材育成費補助事業「平成29年度ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(牽引型)」プロジェクトリーダー</p>



所属・職位	医学部医学科脳神経内科学講座・教授	
氏名	松原 悦朗 (Matsubara Etsuro)	
取得学位	博士 (医学)、群馬大学、1995年11月	
SDGs目標	  	
研究分野	神経科学、神経内科学	
研究キーワード	認知症、アルツハイマー病 (AD)、疾患修飾薬、先制医療薬、セラノスティクス	
研究内容	<p>① <u>ADの発症病態解明を基盤とした画期的診断法・治療法・予防法開発</u></p> <p>-1: <u>細胞外Aβオリゴマー標的抗体治療薬 (疾患修飾薬) 開発</u>: ADの発症基盤分子であるAβオリゴマー特異抗体を作製し、その脳内特異的な制御でADモデルマウスの記憶障害発症予防とシナプス保護効果を実証して、AβオリゴマーがADの発症分子基盤かつ治療標的である傍証を得る。Aβオリゴマー特異的抗体の特許を取得して、そのライセンスアウト先製薬企業を選定し、ヒト化抗体として臨床試験を終了させ治療薬承認を目指す。</p> <p>-2: <u>細胞内Aβオリゴマー標的的先制医療薬開発</u>: 発明抗体を基盤としたBBB通過型先制医療薬を設計・開発し、ヒト病態を忠実に再現するプレクリニカルADマウス(APP-KIマウス)での前臨床試験とヒト臨床試験を経てその臨床応用を目指す。</p> <p>-3: <u>Aβオリゴマー標的セラノスティクス開発</u>: 従来のアミロイドPET画像では検出困難なプレクリニカルADやMCI due to AD症例に、発明抗体や開発先制医療薬を活用し、診断しつつ治療も実現するセラノスティクス (Theranostics + Diagnostics) を実現する。</p> <p>② <u>前向き白杣コホート研究 (1,000人規模の健常者+軽度認知障害)</u> 軽度認知障害や認知症発症リスク因子同定に加え、生体センサデータ (歩数、睡眠時間、心拍数、会話時間等) と画像検査(MRI/FDG-PET/PiB-PET)データを駆使したテーラーメイド型認知症予防介入法と無侵襲性早期認知症診断技術の構築を行う。</p> <p>③ <u>コンフォメーション病の疾患修飾薬開発</u> 先制医療薬シードを応用し、プリオン病、前頭側頭型認知症、筋萎縮性側索硬化症、レビー小体型認知症、糖尿病性認知症のBBB通過型疾患修飾薬・先制医療薬開発を目指す。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>①-1: ライセンスアウト発明抗体 (特許513853号) がヒト化され本邦初の純国産疾患修飾薬第I相臨床試験終了(欧州5か国+日本): 2003年度科研費特定領域研究代表で研究開始し、国立長寿医療センター研究所アルツハイマー病研究部室長として特許申請: 成果論文 Mol Neurodegener (2011), J Neurosci Res (2011), Life Sci (2012), Biomed Res Int (2013)</p> <p>①-2 & -3: JST A-STEP代表(2011-2014), 橋渡し研究シーズA代表(2014), 同シーズB代表(2015), AMED脳科学研究戦略推進プログラム分担(融合脳2016-2020)+基盤研究B代表(2016-2022): 取得特許 (特許513853号) と成果特許申請: 特願2019-14596 論文: Neurobiol Dis (2014), Curr Alzheimer Res (2018)</p> <p>② 産学官連携ヘルスケアモデル事業 (2015-2017, 代表) +AMED未来医療を実現する医療機器・システム研究開発事業 (2016-2018, 代表): 成果論文 Front Neurol(2019), Geriatr Gerontol Int (2019), J Alzheimer Dis (2019, 2020, 2021), JAMA Netw Open (2020), Curr Alzheimer Res (2020x2, 2021), PLoS One (2020), J Prev Alzheimers Dis (2021), Biomolecules (2021)</p> <p>③ 挑戦的萌芽代表(2018-2019)、今後展開研究予定</p>	

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部




医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等



所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座・教授	
氏名	三重野 英子 (Mieno Eiko)	
取得学位	博士 (保健学)、広島大学、2004年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	老年看護学、リハビリテーション看護
研究キーワード	認知症ケア、緩和ケア
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> ●一般病院における非がん後期高齢者の緩和ケアプログラムの開発 <ul style="list-style-type: none"> ・ 老衰や心不全、認知症等の非がん後期高齢者の緩和ケアプログラムの開発にむけて、事例研究に取り組む。 ●認知症専門外来における看護実践モデルの開発 <ul style="list-style-type: none"> ・ 認知症専門外来での看護実践をモデル化するために、初診・再診での診療過程に沿った看護ケアの内容を記述した。今後、認知症専門外来の看護師等を対象にした看護ケアの実際に関する調査や外来での検証を行い、看護実践モデルを提示する。 ●認知症高齢者の薬物療法の援助に関する実態調査 <ul style="list-style-type: none"> ・ 看護師が認知症高齢者に適切・安全に薬物療法を援助できるための教育プログラムを検討することを目的に、看護師、介護家族、医師、薬剤師（病院・薬局）を対象に、看護師の薬物療法の援助に関する質問紙調査を行った。 ●特定機能病院・一般病院における認知症高齢者の看護のモデル化 <ul style="list-style-type: none"> ・ 病院における認知症看護のモデル化を目指し、特定機能病院や一般病院の看護師を対象とした看護の実際と課題に関する質問紙調査、入院経験がある認知症高齢者の家族やグループホーム職員を対象とした病院看護の評価に関する質問紙調査を行った。 ・ これらの調査結果に基づき「入院時に認知症の行動・心理症状やせん妄を予測し、予防的に介入するための認知症看護プログラム」を作成し、その実行可能性について事例研究を行った。 ●短期入所を利用する認知症高齢者とその家族に対するケアに関する研究 <ul style="list-style-type: none"> ・ 短期入所のケアのモデル化を目指し、まず、短期入所施設のケア責任者を対象にケアの質評価に関する質問紙調査を行った。次いで、短期入所利用者4名を対象に入所から退所までに行われたケアとその結果を参与観察と面接により記述し、施設適応を促進するケア要素を抽出した。
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ●著書 <ul style="list-style-type: none"> ・ 2022年、最新老年看護学、第4版、日本看護協会出版会。 ・ 2018年、系統看護学講座専門分野Ⅱ老年看護学、第9版、医学書院。 ●論文・研究発表 <ul style="list-style-type: none"> ・ 2017年、医師からみた看護師が行う認知症高齢者の薬物療法の援助の実際と課題、第37回日本看護科学学会学術集会。 ・ 2013年、一般病院・診療所における認知症看護プログラムの開発～認知症看護プログラムの実行可能性の検討～、日本老年看護学会第18回学術集会。 ・ 2011年、A survey on practical nursing care for dementia patients admitted to general hospitals, 26th International Conference of Alzheimer's Disease International (トロント)。 ・ 2009年、家族による一般病院・診療所での認知症の人と家族への看護に対する評価、日本認知症ケア学会第10回大会。 ・ 2003年、施設種別による短期入所のケアの質に関する研究、日本老年看護学会誌。 ・ 2005年、介護老人福祉施設の看護師が行うEnd-of-Life Careの実際、日本老年看護学会誌。

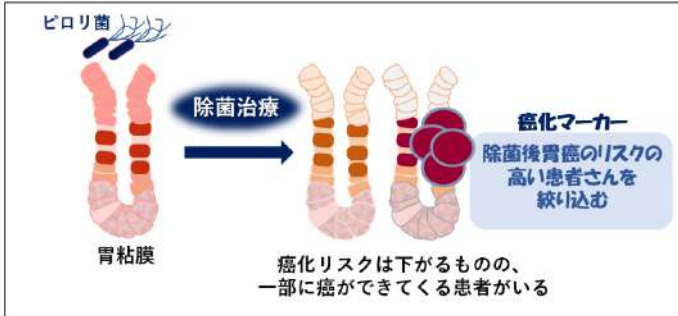
所属・職位	医学部医学科総合診療・総合内科学講座・教授	
氏名	宮崎 英士 (Miyazaki Eishi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1992年6月	
SDGs目標	 	
研究分野	総合診療医学、地域医療学、呼吸器病学	
研究キーワード	総合診療、地域医療、高齢者、気管支喘息	
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> ● 高齢者の疾病予防、健康増進に関する研究 <ul style="list-style-type: none"> ◇ ソーシャルキャピタルを活用した認知症の早期発見と予防 県北のA市との共同研究として、高齢者サロンに参加した住民を対象として、認知症の簡便なスクリーニング検査法を確立する。 ◇ サルコペニア高齢者の身体活動度を増やす方法に関する研究 県南のB市と連携して、認知行動療法、運動療法、健康教育の併用がサルコペニア高齢者の身体活動量を増やすかどうかを明らかにする。 ◇ 高齢者喘息に吸入ステロイドが使用されない因子の解析 喘息の標準治療である吸入ステロイド薬の処方率には地域間格差、病院－診療所間格差が大きいことを明らかにした (Tohoku J Exp Med. 2020; 251: 135)。薬局への介入が処方率改善に寄与するか否かについて検討を行う。また、コロナ禍での診療実態についてもレセプト調査で明らかにする。 ● 複雑困難症例、多疾患併存に関する研究 <ul style="list-style-type: none"> ◇ 3週間原因不明の“古典的不明熱”を呈した患者のうち20～30%は無治療で自然緩解する。初診時にself-limitingな経過を予測させるバイオマーカーを明らかにし、スコアリングシステムの開発に繋げる。 ◇ 診療所における多疾患併存患者が日常診療に及ぼす影響の検討 MCAMを用いて複雑度の解析を行い、日々の複雑患者の数と医療・介護スタッフの疲労度の関連について検討している。 	
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ● 論文 <ol style="list-style-type: none"> 1. 2022年, Utsunomiya R, Shiota S, Ishii T, Sano K, Suzuki T, Hasegawa H, Miyazaki E. Plasma Exchange Did Not Reduce Viral Load in a Recovered Case of Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome. Intern Med. 2022;61:253. 2. 2022年, Horinouchi N, Shiota S, Takakura T, Yoshida A, Kikuchi K, Nishizono A, Miyazaki E. J. Med. Casde Rep. 2022 16:19 3. 2021年, Horinouchi N, Shiota S, Takakura T, Yamamoto K, Miyazaki E. Polypharmacy in Japanese primary care and association with length of hospital stay: a prospective cohort study. J Hos Gen Med. 2021;3-6:190. 4. 2020年, Ishii T, Shiota S, Yamamoto K, Abe K, Miyazaki E. Inhaled corticosteroid-containing regimens reduce hospitalizations and healthcare costs among elderly asthmatics: real-world validation using the National Health Insurance Claims Database. Tohoku J Exp Med. 251: 135 	

所属・職位	医学部医学科心臓血管外科学講座・教授	
氏名	宮本 伸二 (Miyamoto Shinji)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1995年6月	
SDGs目標	 	

研究分野	心臓血管外科学
研究キーワード	再生医療、生体内組織形成術、脊髄保護、低侵襲、止血剤
研究内容	<p>■生体内組織形成術による自己組織化する弁、血管の代用組織開発</p> <p>○生体内組織形成術(iBTA)により得たシート (biosheet) を用いて大動脈弁再建を行い、長期耐久性・自己弁化を動物実験にて証明。異種 (牛) バイオシートの可能性も検証中。</p>  <p>○重症下肢虚血に対するバイパス手術に用いる人工血管をiBTAにて作成 (Biotube) し、静脈グラフトと同等以上の開存性、自己血管化を証明。</p>  <p>○大動脈用のBiotubeを作成し、その耐圧性、成長性を検証。 ○分岐型Biotubeの作成、耐久性を検証。</p> <p>■フリーラジカルスキャベンジャーによる脊髄 (虚血補助)</p> <p>■Matsudaito (止血物質) の有効な使用方法の開発</p> <p>■低侵襲心臓手術用特殊機器開発</p>
研究業績・アピールポイント	<p>デバイス開発につながる大動物を用いたtranslational researchを主とする。</p> <p>Three - month outcomes of aortic valve reconstruction using collagenous membranes (biosheets) produced by in - body tissue architecture in a goat model: a preliminary study K Okamoto BMC Cardiovasc Disord. 2021; 21: 184. Published online 2021 Apr 15.doi:10.1186/s12872 -021-01988-6</p> <p>Aortic valve neocuspidization with in-body tissue-engineered autologous membranes: preliminary results in a long-term goat model T Kawashima, Tadashi Interact Cardiovasc Thorac Surg. 2021 Jun; 32(6): 969-977.</p> <p>科研費 基盤B H28光造形と生体内組織形成術による生体適合性に優れる弁再建用バイオリーフレットの開発</p> <p>科研費基盤B H29 生体内組織合成法を用いた異種移植可能な心臓弁膜用バイオシートの開発</p> <p>科研費基盤B H31 光造形と生体内組織形成術による自己成長可能な大血管再建用バイオチューブの開発</p> <p>科研費基盤B R3 生体内組織形成術による大血管用分岐弯曲バイオチューブの開発</p> <p>科研費基盤B R4 生体内組織形成術による長期耐久性を有する冠動脈バイパス用人工血管開発</p> <p>AMED シーズB R2-3 下肢動脈バイパス用人工血管 (バイオチューブ) 作製用鋳型の開発</p> <p>AMED シーズC R4-6 研究開発課題名: 体内管状組織形成具 (バイオチューブメーカー) の薬事承認に向けた医師主導治験に関する研究</p>

所属・職位	医学部医学科消化器内科学講座・教授	
氏名	村上 和成 (Murakami Kazunari)	
取得学位	医学博士、大分医科大学、1990年3月	
SDGs目標		

研究分野	消化器内科学
研究キーワード	ヘリコバクター・ピロリ感染症、上部消化管、胃癌、メチル化異常

研究内容	<p>●除菌後時代におけるリスクとなる因子の同定を目指す研究</p> <p>近年、ピロリ菌を除菌することで胃癌症例は減少傾向にある。しかし除菌治療後の胃粘膜にも胃癌発生するリスクが残っていることが近年明らかとなってきた。当科ではこれまで消化器癌の発生や進展に関わるシグナル伝達経路（タンパク質リン酸化）やタンパク質メチル化の解析を行ってきた。そこで、除菌後の胃粘膜においてシグナル伝達経路やメチル化の異常がどのように残存し胃癌発生に関わるのかを明らかにすることで、除菌後胃癌の発生リスクとなる因子の同定を目指している。</p> <p>ピロリ菌除菌後に胃癌でなくなることは、絶対に避けたいといけないことである。そのためには、発癌をしても早期に発見し、内視鏡治療で治癒しうる段階でフォローする必要がある。本研究は、除菌後に内視鏡を継続する症例の選択や、内視鏡頻度の決定につながることを期待している。</p>	
------	---	--

研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <p>Murakami K, Okimoto T, Kodama M, Tanahashi J, Mizukami K, Shuto M, Abe H, Arita T, Fujioka T. Comparison of the efficacy of irsogladine maleate and famotidine for the healing of gastric ulcers after Helicobacter pylori eradication therapy: a randomized, controlled, prospective study. Scand J Gastroenterol, 46(3), 287-292, 2011.</p> <p>Murakami K, Sakurai Y, Shiino M, Funao N, Nishimura A, Asaka M. Vonoprazan, a novel potassium-competitive acid blocker, as a component of first-line and second-line triple therapy for Helicobacter pylori eradication: a phase III, randomised, double-blind study Gut, 65(9), 1439-46, 2016.</p> <p>●著書</p> <p>村上和成 Ⅲ消化管疾患 B. 胃・十二指腸 慢性胃炎 消化器疾患 最新の治療 2019-2020, 129-132, 2019.3</p> <p>●総説</p> <p>村上和成 ピロリ菌感染と胃がんとの関連 日本内科学会雑誌 110(3):476-480 2021.3</p> <p>村上和成 Ⅱ疾患編 3消化器疾患 「胃潰瘍」今日の診断指針 第8版 株式会社医学書院 713-714 2020</p>
---------------	--

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部




医学部

医学部附属病院

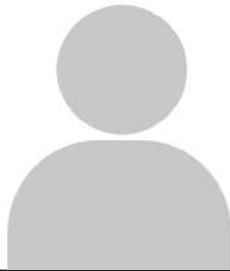

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科医学英語教育学講座・教授	
氏名	森 茂 (Mori Shigeru)	
取得学位	教育学修士、広島大学、1988年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	医学英語教育
研究キーワード	医学英語、医学英語教育、医療英語、Medical English Education、EMP
研究内容	<p>●医学英語教材の作成</p> <p>日本語を母語とする英語学習者が、医学専門教育に進む前段階で医学（医療）に関する基本的な用語や定型表現を日本語・英語の両方で正しく、また効率よく習得させるにはどうしたら良いか、内容 (Minimum requirement & Advanced requirement) と方法を日々研究・実践している。(論文 1, 著書 1, 2, 3)</p> <p>●医学英語力の評価</p> <p>日本語を母語とする英語学習者の医学英語力をどのように評価するか、妥当性、信頼性、実用性を担保した評価方法・テストの開発・実施・分析を行っている。(著書 4)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <p>1. 2015年、「医学教育のグローバルスタンダードに対応するための医学英語教育ガイドライン」福沢嘉孝、一杉正仁、石井誠一、亀岡淳一、建部一夫、高田 淳、服部しのぶ、廣川慎一郎、森 茂、守屋利佳、Rauol Breugelmans、吉岡俊正。 <i>Journal of Medical English Education</i>. 14 (3), pp. 130-135. https://jasmee.jp/guidelines/#jguidelines https://jasmee.jp/guidelines/#eguidelines</p> <p>●(編) 著書</p> <p>1. 2009年、『クイズで学ぼう！ 医学英単語』森 茂、メジカルビュー社。 https://www.medicalview.co.jp/catalog/search.php?id=detail&code=ISBN978-4-7583-0423-8</p> <p>2. 2016年、『医学・医療系学生のための総合医学英語テキスト Step 1』日本医学英語教育学会編：一杉 正仁、福沢 嘉孝、森 茂 (編集・分担執筆)、安藤 千春、Clive Langham、Timothy Minton。メジカルビュー社。 https://www.medicalview.co.jp/catalog/search.php?id=detail&code=ISBN978-4-7583-0448-1</p> <p>3. 2017年、『医学・医療系学生のための総合医学英語テキスト Step 2』日本医学英語教育学会編：一杉 正仁、福沢 嘉孝、森 茂 (編集・分担執筆)、安藤 千春、Clive Langham、Timothy Minton。メジカルビュー社。 https://www.medicalview.co.jp/catalog/search.php?id=detail&code=ISBN978-4-7583-0449-8</p> <p>4. 2015年、『日本医学英語検定試験 3・4級教本 第3版』日本医学英語教育学会編：安藤 千春、五十嵐 裕章、押味 貴之、小島 多香子、玉巻 欣子、西村 月満、一杉 正仁、平野 美津子、森 茂 (編集・分担執筆)、Chrisine Kuramoto、Timothy Minton。メジカルビュー社。 https://www.medicalview.co.jp/catalog/search.php?id=detail&code=ISBN978-4-7583-0442-9</p>

所属・職位	医学部医学科法医学講座・教授	
氏名	森 晋二郎 (Mori Shinjiro)	
取得学位	博士 (医学)、群馬大学、2002年3月	
SDGs目標		

研究分野	法医学
研究キーワード	遺体 死因 診断 内因性急死

研究内容	<p>・遺体診断学に関する研究</p> <p>法医学領域において常に必要とされる技術は、正確な死因を確定することである。元来これらの技術は、遺体の解剖を主体として進歩・開発されてきた。一方、臨床医学の現場では、CTやエコー、種々の血液マーカーの開発など、革新的な技術の進歩・発展が認められている。よって、法医学領域においてもこれら臨床医学での技術を死因究明に応用することが求められている。しかし、遺体では循環動態がないだけでなく、細胞死によって細胞内容物が流出するなど、単純に技術を応用することは難しく、種々の条件を研究・工夫してクリアしていくことが必要である。</p> <p>また、遺体には種々の死後変化が存在するが、生前の感染症や壊死の存在は死後変化をより早く進行させるなど、これら死後変化は疾患や死因によって影響を受けることがある。一方、環境や死後時間経過などによっても、死後変化の種類や程度が異なるため、これら疾患・死因と環境、死後時間経過の関係を研究することによって、臨床医学とは異なる遺体特有の所見を見いだせる可能性がある。</p> <p>・内因性急死に関する研究</p> <p>法医学領域で扱われる疾患による死亡は、その多くが急死を呈する疾患群である。これらは内因性急死と呼ばれ、発症から死亡までの時間が極端に短いことが特徴的である。よって、病院搬送前に死亡する事が多く、その病態生理も臨床で知られているものとは異なる特異的な形態を示していることがある。よって、これら内因性急死の特異的な病態生理を解明することは、新たな臨床医学への発展に貢献できるものと考えられる。</p>
------	--

研究業績・アピールポイント	<p>Mori S, Takahashi S, Hayakawa A, Saito K, Takada A, Fukunaga T Fatal intracranial aneurysms and dissections causing subarachnoid hemorrhage: An epidemiological and pathological analysis of 607 legal autopsy cases. Journal of Stroke & Cerebrovascular Diseases , 27(2):486-493, 2017</p> <p>森晋二郎、呂彩子、景山則正、水上創、船越泉、渡貴博、福永龍繁：内因性心膜血腫剖検例における死後画像の評価と心肺蘇生術の影響. 法医学の実際と研究 58:119-124 , 2015</p> <p>森晋二郎、渡貴博、呂彩子、景山則正、福永龍繁：死後CT撮影および撮影画像の3次元解析を行った高血圧性脳出血の1剖検例. 法医病理 21(1):17-20, 2015</p>
---------------	---

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部




医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座老年看護領域・教授	
氏名	吉岩 あおい (Yoshiiwa Aoi)	
取得学位	博士 (医学)、大阪大学、1999年12月	
SDGs目標	 	

研究分野	老年医学
研究キーワード	アルツハイマー病、レビー小体型認知症、骨粗鬆症、生活習慣病
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> ・アルツハイマー病と生活習慣病の関連に関する研究 ・レビー小体型認知症 糖尿病、高血圧症などが認知症と関連があるとの研究が進み、注目されている。当院総合診療科・総合内科は生活習慣病を抱える患者の受診も多く、認知症との併存も認めるため、生活習慣病が認知症の罹患率を上げるのか、発症や進行に関与しているのかを探求する。 ・認知症と骨代謝 ・認知症とビタミンD 近年、骨粗鬆症に対し、ビタミンD (25(OH)D3) の測定が可能となった。またアルツハイマー病では、重症になるほど25(OH)D3濃度が低下することが明らかになっている。当科では骨粗鬆症の外来も行っており、骨密度、骨代謝マーカー、ビタミンD測定により、認知症との関連を研究している。 ・認知症とH.pyloriの関連に関する研究 ・軽度認知障害 (Mild Cognitive Impairment: MCI) の発症予防に関する研究 豊後高田市でサロンに通所する高齢者にフレイル、嗅覚、あたまの健康チェックなどのスクリーニング検査を行い、MCIと診断された症例は、運動、料理、座学などを行い定期的に神経心理テストなどでフォローするというまちぐるみ、多職種協働の研究を行っている。
研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・ α 1-Antichymotrypsin as a Risk Modifier for Late-Onset Alzheimer's disease in Japanese apolipoprotein E ϵ 4 allele carriers. nn. Neurol. 42(1):115-7, 1997 ・ 認知症の治療をいつまで続けるかー抗認知症薬をできる限り続けるべきであるー 日本老年精神医学会30(Suppl.I),90-98,2019 ・ 塩酸ドネペジルが著効したレビー小体型痴呆. 臨床と研究 80(10): 1917-1918, 2003 ・ もの忘れ外来でみられた認知症と「生活の様子確認票」によるアルツハイマー病の重症度評価について. G・eriatric Medicine 50(3): 349-357, 2012 ・ 骨粗鬆症治療薬デノスマブの疼痛軽減効果. 日本病院総合診療医学会誌14(2)140-146, 2017 ・ 「認知症の人が安心して暮らせるまちづくりー認知症の早期スクリーニングー」 現在進行中の多職種協働によるスタディである。

所属・職位	医学部医学科救急医学講座・准教授	
氏名	石井 圭亮 (Ishii Keisuke)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2000年9月	
SDGs目標	  	
研究分野	神経外科, 救急医療, 災害医療, 遠隔医療	
研究キーワード	神経の再生・成長・移植, 神経外科手術, 脳血管障害, ICT, 災害	
研究内容	<p>●神経機能再建、神経細胞移植、神経細胞保護および脳虚血耐性に関する研究 パーキンソン病や脳虚血の治療、脳虚血や脳脊髄外傷における神経細胞保護および難治性慢性疼痛症の研究を行っています (論文1.)。</p> <p>●脳血管障害、神経外科手術手技の確立に関する研究 脳血管障害の疫学・病態解明・診断・治療法・手術手技に関する研究を行っています。特に、出血性脳血管障害 (くも膜下出血や脳動静脈奇形) に対する診断・治療・手術手技等に関する研究およびもやもや病に対する臨床研究や有効な手術治療指針の確立には力を入れています (論文2.)。</p> <p>●ICTを活用した医療に関する研究 全国に先駆けて、救急車内映像、救急車動態および12誘導心電図をリアルタイムに伝送閲覧するシステムの構築を行い、平時の救急から災害への実運用を行っています。</p> <p>●南海トラフ地震を想定したDMAT支援受援数と傷病者搬送人数に関する研究 重点受援県である大分県・宮崎県に対して、九州ブロック全体における支援DMATおよび傷病者搬送フローの試算を行っています。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>神経機能再建、神経細胞移植、神経細胞保護、脳虚血耐性に関する基礎研究および脳血管障害、神経外科手術手技の確立に関する臨床研究を継続して行ってきましたが、近年は、救急災害医療体制の効率化および充実を図るための研究に力を入れ実績を挙げています。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2000年、Ishii K, Isono M, Inoue R, et al: Attempted gene therapy for intractable pain; Dexamethasone-mediated exogenous control of β-endorphin secretion in genetically modified cells and intrathecal transplantation. <i>Exp Neurol</i> 166: 90-98 2010年、Ishii K, Morishige M, Anan M, et al: Superficial temporal artery-to-middle cerebral artery anastomosis with encephalo-duro-myo-synangiosis as a modified operative procedure for moyamoya disease. <i>Acta Neurochir Suppl</i> 107: 95-99 <p>●受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> 2001年、日本脳神経外科学会総会奨励賞(ガレーヌス賞)受賞 	

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科（グローバル感染症研究センター）・准教授	
氏名	伊波 英克 (Iha Hidekatsu)	
取得学位	博士（理学）、総合研究大学院大学、1992年9月	
SDGs目標	   	

研究分野	分子腫瘍学・分子免疫学・分子疫学
研究キーワード	成人T細胞白血病、TAX1BP1、ウイルス感染症
研究内容	<p>●成人T細胞白血病(ATL)の病態形成機序・診療技術の向上に関する研究 ATLはヒトT細胞白血病ウイルス(HTLV-1)に感染した方の約5%が発症する、難治性の血液腫瘍です。ATLの発症危険度を予測する技術の確立と、より効果的で副作用の小さい治療技術の開発を目指しています。</p> <p>●免疫制御因子TAX1BP1とHTLV-1関連疾患との機能相関性の解析 TAX1BP1はHTLV-1が産生する癌遺伝子産物Taxと結合する宿主因子で、様々な免疫応答の活性を制御しています。HTLV-1はATLだけではなく様々な免疫不全症状を誘発します。TAX1BP1の機能をTaxがどのように攪乱し病態を進行させるかについて研究しています。</p> <p>●ウイルス関連疾患の分子疫学的調査 国内外の研究者とウイルス関連疾患の疫学調査を進めています。特にマレーシア大学サバ校のシニアリサーチフェローとして、同大学のアハメド教授との共同研究を重点的に展開しています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>TAS-116 (pimipib), a heat shock protein 90 inhibitor, shows efficacy in preclinical models of adult T-cell leukemia. Cancer science 2021年11月、責任著者</p> <p>Depletion of TAX1BP1 amplifies innate immune responses during respiratory syncytial virus infection. Journal of virology 2021年8月</p> <p>An outbreak of gastroenteritis by emerging norovirus GII.2[P16] in a kindergarten in Kota Kinabalu, Malaysian Borneo. Scientific reports 2020年4月28日</p> <p>Soluble SLAMF7 promotes the growth of myeloma cells via homophilic interaction with surface SLAMF7. Leukemia 2020年1月</p> <p>The regulation of NDRG2 expression during ATLL development after HTLV-1 infection. Biochimica et biophysica acta. Molecular basis of disease. 2019年10月</p> <p>Human-porcine reassortant rotavirus generated by multiple reassortment events in a Sri Lankan child with diarrhea. Infection, genetics and evolution: journal of molecular epidemiology and evolutionary genetics in infectious diseases. 2018年11月</p> <p>Complete Sequences of the Human T-Cell Leukemia Virus Type 1 Proviral Genomes from Newly Established Adult T-Cell Leukemia Cell Lines in Oita Prefecture, Japan. Genome announcements. 2018年6月、責任著者</p>

所属・職位	医学部医学科総合外科・地域連携学講座・准教授	
氏名	上田 貴威 (Ueda Yoshitake)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2008年3月	
SDGs目標	   	

研究分野 外科腫瘍学、内視鏡外科治療学、総合外科学、地域医療学

研究キーワード 内視鏡外科、高齢者医療、外科教育、地域外科医療

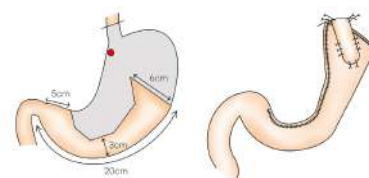
研究内容 消化器悪性腫瘍に対する外科治療、特に低侵襲治療やQOL向上に関する研究を行っている。

●胃癌におけるHLA class I 抗原発現の意義に関する基礎研究

胃癌におけるHLA class I 抗原発現の意義を明らかにするため、HLA class I 抗原の発現と臨床病理学的因子および予後との関連を検討した。その結果、胃癌ではHLA class I 抗原が発現しているものほど腫瘍は発育・進展し予後も不良であった。特に、HLA-B/C抗原の発現は胃癌腹膜再発の独立危険因子であった (論文1)。

●術後QOL向上を目指した腹腔鏡下噴門側胃切除術 (LAPG) の開発 (下図)

胃上部早期胃癌に対する「コブラ頭型細径胃管を用いた腹腔鏡下噴門側胃切除術」を開発し、その安全性・有用性を検討した。本術式は、安全かつ簡便に施行可能であり、LAPGの有用な再建法となりうることを示した (論文2)。



●高齢者消化管悪性腫瘍に対する低侵襲外科治療の安全性・有効性に関する研究

高齢者における小型進行胃癌の臨床的意義を検討し、4cm以下であれば安全に手術が施行可能であり、予後も良好であることを示した (論文3)。また、80歳以上の高齢者大腸癌症例に対する腹腔鏡下手術の短期・長期成績を後方視的に検討し、高齢者大腸癌症例に対する腹腔鏡下手術の安全性・低侵襲性・根治性を示した (論文4)。

●地域外科医療における問題点の現状調査・分析

大分県の勤務外科医に対するアンケート調査から、外科医のやりがいやキャリア形成、医学生と外科医のイメージの相違、外科医の働き方改革に対する意識、さらに地域における外科教育に対する外科医の役割、などに関する学会発表ならびに論文発表を行っている。

研究業績・アピールポイント ●論文

- 2008年、Ueda Y, et al. Clinical Significance of HLA Class I Heavy Chain Expression in Patients With Gastric Cancer. J Surg Oncol. 97.
- 2016年、Ueda Y, et al. Laparoscopic Proximal Gastrectomy With Gastric Tube Reconstruction. JSLS. 20.
- 2017年、Ueda Y, et al. Clinical impact of small advanced gastric cancer (≤ 40 mm) in elderly patients: A retrospective cohort study. Int J Surg. 45.
- 2020年、Ueda Y, et al. Short- and long-term outcomes of laparoscopic surgery for colorectal cancer in the elderly aged over 80 years old versus non-elderly: a retrospective cohort study. BMC Geriatrics. 20.

その他、10年以上にわたり、大分県地域の勤務外科医に対する調査・分析活動を行い、10編以上の報告ならびに論文発表を行っている。

●受賞

- 2018年、平成30年度日本外科系連合学会賞 (最優秀論文) 「上田貴威, 他. 外科医アンケート調査からみた外科医のキャリア形成に関する現状と課題」日本外科系連合学会誌42巻.
- 2018年、第32回地域保健医療に関する研究奨励賞「上田貴威, 他. 医療改革と医学教育改革に対する地域外科勤務医の認識：外科勤務医に対するアンケート調査」地域医学, 32巻.

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部



その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科消化器・小児外科学講座・准教授	
氏名	衛藤 剛 (Etoh Tsuyoshi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2003年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	消化管外科学、低侵襲治療学、外科腫瘍学
研究キーワード	内視鏡外科、集学的治療開発、人工知能
研究内容	<p>■ 研究の実績概要</p> <p>消化器癌の治療成績の向上を目指し、臨床研究、基礎研究、産学官共同研究を積極的に進めている。臨床研究では、低侵襲手術である腹腔鏡下手術の確立と適応拡大、患者予後因子、新しい癌集学的治療について研究を進めている。一方、基礎研究については、内視鏡外科における手術侵襲と生体反応、癌の発生や転移・浸潤の機序、制限増殖型レオウイルスを用いた診断・治療への応用に関する研究を行っている。さらに産学官共同研究として人工知能支援手術システムの開発を行っている。</p> <p>A: 基礎研究 ～ がんの増殖・浸潤・転移のメカニズムおよび発がん機構の解明 ～ 腸管還流血中の大腸癌・胃癌微小転移検出法の開発、食道癌・大腸癌の臨床検体を用いた癌悪性度規定因子の同定、および胃癌における血管新生因子Angiopoietin-2の意義解明した。 <u>Etoh T, et al. Angiopoietin-2 is related to tumor angiogenesis in gastric carcinoma: possible in vivo regulation via induction of proteases. <i>Cancer Res</i>, 61(5) : 2145-2153, 2001.</u></p> <p>B: 基礎研究 ～ 低侵襲治療、新規がん治療開発 ～ 低侵襲手術である内視鏡外科手術の利点と短所を明らかにするため、手術侵襲に対する生体反応を腫瘍学・生理学・免疫学観点から、動物モデルを用いて検討した。</p> <p>C: 臨床研究 ～ 低侵襲手術、がん臨床 ～ <u>Etoh T, et al. Extranodal metastasis is an indicator of poor prognosis in patients with gastric carcinoma. <i>Br J Surg</i>, 93(3) : 369-373, 2006.</u></p> <p>D: 臨床研究 ～ 多施設共同臨床試験 ～ <u>Etoh T, et al. Morbidity and Mortality From a Propensity Score-Matched, Prospective Cohort Study of Laparoscopic Versus Open Total Gastrectomy for Gastric Cancer: Data From a Nationwide Web-Based Database. <i>Surg Endosc</i>, 32(6) : 2766-2773, 2018.</u></p>
研究業績・アピールポイント	<p>1. 低侵襲手術の確立とエビデンス創生の取り組み 胃癌分野において、低侵襲手術として開発された腹腔鏡下手術の手術手技の確立と適応拡大に向けたエビデンス創生を行っている。中でも2009年より開始した多施設共同ランダム化第II/III相試験は、進行胃癌に対する腹腔鏡下手術の技術的・腫瘍学的安全性を検証するものであり、研究事務局長として本研究の企画・運営を中心的に遂行している。</p> <p>2. 制限増殖型レオウイルスを用いた新しい診断・治療法の開発 新しい癌の診断・治療法開発として、制限増殖型レオウイルスに着目してきた。本研究においては、12年間にわたり競争的外部研究費を獲得している。</p> <p>3. 産学官共同研究 新規医療材料の開発や、安全な手術法開発を目的とし、日本を代表する企業と産学官共同研究を行い、特許取得および外部資金を獲得してきた。またAMED事業の中で、人工知能を用いた内視鏡外科機器開発を行っている。</p>

所属・職位	医学部医学科医学英語教育学講座・准教授	
氏名	大下 晴美 (Oshita Harumi)	
取得学位	博士 (教育学)、広島大学、2010年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	外国語教育	
研究キーワード	読解指導、多読、NIRS、EMP	
研究内容	<p>●英語多読および英語の読み聞かせに関する脳科学的研究</p> <p>NIRS (近赤外線分光法) を用い、「英語多読」や「英語絵本の読み聞かせ」の効果を脳科学的見地から研究し、これまでに以下の成果をあげてきた。</p> <p>①挿絵がある絵本は内容理解の観点からも脳活動の最適化の観点からも効果的な多読教材である (論文1)。</p> <p>②英語学習者の発達・学習段階の差によって、英語絵本読み聞かせ聴取時の脳の前頭前野の賦活部位および賦活量に違いが見られる (外部資金：科研費基盤研究(C) 17K01084)。</p> <p>現在は、発達・学習段階によって英語絵本読み聞かせ聴取時の脳の賦活状況の差が生じる要因について研究を行っている (外部資金：科研費基盤研究(C) 21K02860)。</p> <p>●英語医療面接の評価方法に関する研究および英語医療面接自動採点システムの開発</p> <p>医療従事者の英語力育成のための英語医療面接の評価方法に関して、これまでにCan-do Listを活用した評価項目の作成や教員間および学生間の評価結果の信頼性・妥当性に関する研究を行ってきた。現在は、医療従事者を目指す学生の学習支援ツールとしてだけでなく、医療従事者の生涯学習ツールとしても利用可能な「英語医療面接自動採点システム」開発のためのタスクや評価指標の開発を行っている (論文2・講演1)。</p> <p>※関連リンク： http://oitauniv-soran.ad.oita-u.ac.jp/profile/ja.aa59fa576d22f103520e17560c007669.html</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <p>1. 2020年、大下晴美、「日本人大学生における英語多読教材としての絵本の有効性—NIRSを用いた脳科学的見地からの検証—」 鬼田崇作・山内優佳(編)『深澤清治先生退職記念英語教育学研究』 溪水社 (広島) pp. 30-41.</p> <p>2. 2021年、大下晴美、「AIを用いた英語医療面接評価システムの開発に向けて」大坪喜子(編)『長崎大学教育学部英語科の記録と思い出—卒業生による思い出と実践レポートを中心に—』長崎大学英語教育研究会 (長崎) pp. 130-138.</p> <p>●講演</p> <p>1. 2021年、大下晴美、「ZoomとMoodleを用いた英語医療面接試験およびその評価法の課題と可能性」(外国語教育メディア学会九州・沖縄支部 2020年度学術講演会 (講師))</p> <p>●受賞</p> <p>1. 2013年、第10回植村研一賞 奨励賞 (日本医学英語教育学会)</p>	

所属・職位	医学部医学科消化器内科学講座・准教授	
氏名	沖本 忠義 (Okimoto Tadayoshi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1996年6月	
SDGs目標		
研究分野	消化器内科学	
研究キーワード	ヘリコバクター・ピロリ感染症、上部消化管	
研究内容	<p>ヘリコバクター・ピロリ感染症に関する研究</p> <p>ヘリコバクター・ピロリ (<i>H. pylori</i>) 感染症は、幼少期に本菌が感染することによって生じ、萎縮性胃炎を引き起こす。本菌の持続感染は、胃・十二指腸潰瘍、胃MALTリンパ腫、免疫性血小板減少性紫斑病 (ITP) や胃癌の発症に関与することが報告されている。また、本菌の除菌治療により、胃・十二指腸潰瘍の再発抑制、胃MALTリンパ腫の寛解やITPの血小板数増加が期待でき、更には胃癌の発症抑制効果も報告されており注目されている。</p> <p>現在以下の研究を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若年者における <i>H. pylori</i> 感染の現状と除菌治療の検討 ・薬剤耐性 <i>H. pylori</i> の現状と有効な治療法の検討 ・除菌難治例に対する治療法の検討 ・ <i>H. pylori</i> 感染による胃癌発症機序に対する研究 <p>Non-Helicobacter pylori-Helicobacter (NHPH) に関する研究</p> <p>上述のように <i>H. pylori</i> 関連疾患については多くの報告があるが、<i>H. pylori</i> 未感染の消化性潰瘍や胃MALTリンパ腫、除菌後胃癌などでは原因が明らかでない。ヒトの胃に感染する <i>H. pylori</i> 以外のヘリコバクター属である NHPH の中で、<i>H. suis</i> や <i>H. heilmannii</i> が胃十二指腸疾患と関連していることが少数例報告されているが、感染率や疾患との関連は明らかではない。</p> <p>現在以下の研究を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ NHPH 感染実態、薬剤感受性に関する他施設共同研究 	
研究業績・アピールポイント	<p>R. Ogawa, T. Okimoto et. al. Changes in Gastric Mucosal Glycosylation Before and After Helicobacter pylori Eradication Using Lectin Microarray Analysis. Turk J Gastroenterol 2022; 33: 88-94.</p> <p>K. Okamoto, M. Kodama, K. Mizukami, T. Okimoto et. al. Immunohistochemical differences in gastric mucosal damage between nodular and non-nodular gastritis caused by Helicobacter pylori infection. J Clin Biochem Nutr. 2021; 69: 216–221.</p> <p>T. Okimoto, K. Mizukami et. al. Esomeprazole- or rabeprazole-based triple therapy eradicated Helicobacter pylori comparably regardless of clarithromycin susceptibility and CYP2C19 genotypes. J Clin Biochem Nutr. 2016; 59: 149–153.</p> <ul style="list-style-type: none"> ・別府市と臼杵市の中学生を対象とした、感染検査および除菌治療に関する検討を実施中。 ・現在、多施設共同研究である「ヒト胃に感染するピロリ菌以外のヘリコバクター属菌に関する研究」を共同研究者として実施中。 	

所属・職位	医学部医学科呼吸器・乳腺外科学講座・准教授	
氏名	小副川 敦 (Osoegawa Atsushi)	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、2005年3月	
SDGs目標	  	

研究分野 腫瘍外科学

研究キーワード 肺癌、分子標的治療、低侵襲医療




研究内容

- 肺癌におけるドライバー遺伝子と細胞周期関連遺伝子を標的とした治療開発
 ドライバー遺伝子変異を伴う肺癌では分子標的治療が奏効するが、ほとんどの症例は約1年で治療に耐性となる。原因の1つに、併存する遺伝子変化がシグナル伝達に与える影響がある。細胞周期関連遺伝子の発現は分子標的治療における耐性の一因とされており、その機序や、これを克服するための治療開発が急務である(論文1-3)。
- 肺癌における免疫チェックポイント分子の発現に関する研究
 免疫治療は進行非小細胞肺癌に対する治療の重要な一手となったが、バイオマーカーの同定には難航している。肺癌切除標本及び臨床背景から得られるデータをもとに、免疫チェックポイント分子発現のバイオマーカーに関する研究を行っている(論文4-6)。
- 胸部悪性腫瘍に対する低侵襲手術の開発
 ロボット支援下手術は呼吸器外科領域においてもその巧緻性、低侵襲性で有用性が示されている。開胸や胸腔鏡手術と同じ手順で行えるようなアプローチの工夫を行っている。
 ※関連リンク：<https://researchmap.jp/osoegawa-ths>

研究業績・アピールポイント

- 論文
 肺癌におけるドライバー遺伝子と細胞周期関連遺伝子を標的とした治療開発
 1. 2004年、Osoegawa A, Yoshino I, Tanaka S, Sugio K, Kameyama T, Yamaguchi M, Maehara Y. Regulation of p27 by S-phase kinase-associated protein 2 is associated with aggressiveness in non-small-cell lung cancer. J Clin Oncol. 22:4165-4173
 2. 2018年、Osoegawa A, Hashimoto T, Takumi Y, Abe M, Yamada T, Kobayashi R, Miyawaki M, Takeuchi H, Okamoto T, Sugio K. Acquired resistance to an epidermal growth factor receptor-tyrosine kinase inhibitor (EGFR-TKI) in an uncommon G719S EGFR mutation. Invest New Drugs. 36(6):999-1005
 3. 2021年、Osoegawa A, Yamaguchi M, Nakamura T, Morinaga R, Tanaka K, Kashiwabara K, Miura T, Suetsugu T, Harada T, Asoh T, Taguchi K, Nabeshima K, Kishimoto J, Sakai K, Nishio K, Sugio K. High incidence of C797S mutation in patients with long treatment history of EGFR tyrosine kinase inhibitors including osimertinib. JTO Clin Res Rep, 2:100191
 肺癌における免疫チェックポイント分子の発現に関する研究
 4. 2017年、Osoegawa A, Gills JJ, Kawabata S, Dennis PA. Rapamycin sensitizes cancer cells to growth inhibition by the PARP inhibitor olaparib. Oncotarget. 8(50):87044-87053
 5. 2021年、Osoegawa A, Takada K, Okamoto T, Sato S, Nagahashi M, Tagawa T, Tsuchida M, Oki E, Okuda S, Wakai T, Mori M. Mutational signatures in squamous cell carcinoma of the lung. J Thorac Dis, 13:1075-1082
 6. 2018年、Osoegawa A, Hiraishi H, Hashimoto T, Takumi Y, Abe M, Takeuchi H, Miyawaki M, Okamoto T, Sugio K. The positive relationship between γ H2AX and PD-L1 expression in lung squamous cell carcinoma. In Vivo. 32(1):171-177

- 役員
- 大学院教育学研究科
教育学部
- 経済学部
- 医学部
- 医学部附属病院
- 理工学部
- 福祉健康科学部
- その他学内施設等

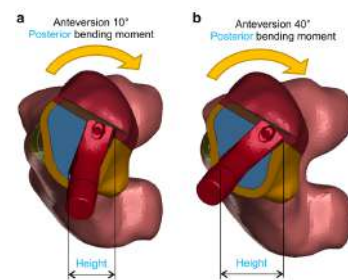
所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座・准教授	
氏名	小野 光美 (Ono Mitsumi)	
取得学位	博士 (医学)、島根大学、2016年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	高齢者看護学
研究キーワード	高齢者, End-of-Life care, 終末期
研究内容	<p>●「介護老人保健施設における看取りに関する研究」</p> <p>高齢者の終末期に関する研究として、特に、介護老人保健施設での看取りについて取り組んできた。研究内容としては、介護老人保健施設で実際に看取りを経験した家族を対象にケアの実際やケアに関する評価 (満足感や課題)、家族自身への影響についての面接調査、看取りケアにかかわるすべての専門職に対するケアの実際と評価、自身の揺らぎと満足度、多職種・他機関との連携についての量的調査、質的調査等である。介護老人保健施設は中間施設として在宅復帰・在宅療養支援の役割・機能があるため、看取りにおいても、利用者 (高齢者) は繰り返し施設を利用する中で歳を重ね、なじみの関係 (利用者同士やスタッフ) の中で、リハによる身体の調整を行いながら、最期までいつもの生活を送ることができる特徴がある。その過程の中で、どのように利用者 (高齢者) 自身の意思を理解し、住み慣れた地域で、生ききることを支えるのが、現在の研究の中心である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科研費基盤研究 (C) 平成25年度～平成28年度、介護老人保健施設における高齢者と家族の意思を引き出すケアモデルの開発 (研究代表者) ・科研費基盤研究 (C) 平成29年度～令和4年度 (延長2年を含む)、地域包括ケアシステムにおける高齢者の終末期を支える看取りケアモデルの開発 (研究代表者)
研究業績・アピールポイント	<p>●高齢者の終末期に関する研究</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) Mitsumi Ono, Hideyuki Kanda, Yuko Takeda, Sachiko Hara (2015) : Characteristics of Geriatric Health Service Facilities Designated as Sites of Death, Health, 7, 1275-1282. 2) 小野光美 (2015) : 介護老人保健施設の看取りにおける看護管理者の実践内容, 日本看護倫理学会, 7(1), 68-76. <p>●看護倫理に関する活動</p> <p>日本看護倫理学会臨床倫理ガイドライン検討委員会のメンバーとして、ガイドラインの作成および管理者応援研修を開催してきた。研究に発展させる途中である。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 日本看護倫理学会臨床倫理ガイドライン検討委員会編 (2018) : 看護倫理ガイドライン: 医療や看護を受ける高齢者の尊厳を守るためのガイドライン・身体拘束予防ガイドライン, 看護の科学社. 2) 常見藍, 三重野英子, 小野光美 (2020) : 急性期病院での老年看護において看護師の倫理的感受性を育む取り組み, 日本老年看護学会第25回学術集会, 148.

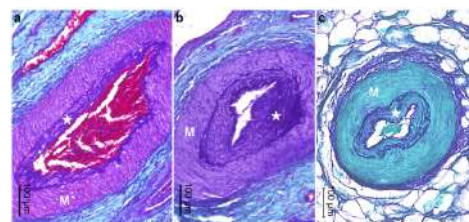
所属・職位	医学部医学科整形外科学講座・准教授	
氏名	加来 信広 (Kaku Nobuhiro)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2002年9月	
SDGs目標	  	

研究分野	整形外科
研究キーワード	股関節、バイオメカニクス、微小解剖

研究内容	<ul style="list-style-type: none"> ● 股関節疾患の診断および治療に関する研究 股関節に関わる治療改善のため、疾患の特徴、診断方法及び外科治療効果について、臨床的成績を報告している。人工骨頭置換術については、QOLを含めた術後の成績を疾患ごとに綿密に明らかにしてきた。インプラント自体のデザインや材質も改良してきた。人工股関節全置換術においては、インプラントの設置精度改善に対するNavigation systemの有効性について、初回手術および再置換術に対しても検討している。適切な脚長補正を行うための新しい術中確認法を報告してきた。股関節疾患診断のため、FDG-PETの可能性について評価した。寛骨臼形成不全の骨盤の解剖学的特徴や加齢に伴う大腿骨の弯曲変形について、その特徴と影響について検討している。 ● 股関節のバイオメカニクスに関する研究 3次元有限要素法や治具を用いて、人工関節のデザインや設置条件が及ぼす特徴や影響について検討している。またコンピュータソフトを用いて、最大の可動域を得るための適切なインプラント設置や手術手技をシミュレーション研究から探求している。 ● 股関節の微小解剖学に関する研究 特別な処理を行うことによって、股関節を構成する靭帯、関節唇、軟骨や骨のコラーゲン線維を明確に描出し、電子顕微鏡を用いて観察している。免疫染色も加えて、血管や神経の形態と走行の特徴も明確にしている。これらの微小解剖に対する加齢の影響について検討している。
------	--



研究業績・アピールポイント	<p>股関節外科に関わる基礎的及び臨床的研究を多方面から行っているが、すぐに役立つ知見だけでなく、長期的な研究を支える知見も得ている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 論文 <ol style="list-style-type: none"> 1. 2022年、Microvascular system of hip joint constituents with special reference to ultrastructural findings and early arteriosclerosis. 2. 2019年、Efficacy of Vitamin E for Mechanical Damage and Oxidation of Polyethylene Rim by Stem Neck Impingement. ● 著書 <ol style="list-style-type: none"> 1. 2019年、受診時年齢別発育性股関節形成不全の診かた・治しかた (分担) ● 受賞 <ol style="list-style-type: none"> 1. 2018年、NPO運動器医療ネットワークおおいた 優秀賞
---------------	--



役員
大学院教育学研究科
教育学部
経済学部
医学部
医学部附属病院
理工学部
福祉健康科学部
その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科産科婦人科学講座・准教授	
氏名	河野 康志 (Kawano Yasushi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1995年6月	
SDGs目標		

研究分野 生殖医学、生殖内分泌学、生殖免疫学

研究キーワード 卵胞発育、排卵、受精、着床

研究内容

子宮内膜には種々の局所因子が発現している。胚の着床、妊娠の維持には白血球系の免疫担当細胞が関与し、これらの遊走にはサイトカインやケモカインの産生が必要となる。このような物質を促進的に産生調節するのがIL-1、EGFや血小板活性化因子であり、これらの受容体の下流に存在するのが細胞内情報伝達系である。我々は、子宮内膜間質細胞や脱落膜化した細胞における細胞内情報伝達系について検討し、いくつかの経路の活性化で様々な生理活性物質の産生が調節されることを明らかにした。また、培養した子宮内膜間質細胞からサイトカイン(Kawano et al., 2004)や、プロスタグランジン(Kawano et al., 2001)が産生され一方で、これらの産生を抑制的に調節する機序についても検討し、AMPKの活性化が重要な役割を担うことも明らかにした(Kawano et al., 2021)。これらのケモカイン・サイトカイン産生およびプロスタグランジン産生が胚の着床・妊娠維持においてネットワークを形成し、生殖現象に関与していると考えられる。

また、子宮内膜間質細胞は落膜化することで血管新生因子であるVEGFの産生が亢進することも明らかにしてきた(Matsui, Kawano et al., 2004)。脱落膜化現象はプロテアーゼ活性化受容体や上皮成長因子のmRNAおよび蛋白質の発現を増加させ、それらの受容体蛋白を介してIL-8やMMP-1のmRNA発現をさらに増加させた。加えて、脱落膜化により受容体蛋白からの刺激を介して細胞走化性が亢進することが確認でき、脱落膜化により発現が増加するこれらの受容体蛋白を介した細胞内情報伝達系は、着床および妊娠維持に必須であることが確認できた(Goto, Kawano et al., 2018)。さらには、体外受精・胚移植時に子宮内膜の受容能を確認する方法を見出し、着床に関わる遺伝子発現を検討中である(Goto, Kawano et al., 2021)。

研究業績・アピールポイント

[Kawano Y, Nakamura S, Fukuda J, Miyakawa I. Synergistic effect of interleukin-1 \$\alpha\$ and ceramide analogue on production of prostaglandin E2 and F2 \$\alpha\$ by endometrial stromal cells. Am J Reprod Immunol 46: 393-398, 2001.](#)





[Kawano Y, Fukuda J, Nasu K, Matsumoto H, Narahara H, Miyakawa I. Synergistic effects of interleukin \(IL\)-1 \$\alpha\$ and ceramide analogue on the production of IL-6, IL-8 and macrophage colony-stimulating factor by endometrial stromal cells. Fertil Steril 82: 1043-1047, 2004.](#)

[Matsui N, Kawano Y, Nakamura S, Miyakawa I. Changes of vascular endothelial growth factor production associated with decidualization by human endometrial stromal cells in vitro. Acta Obstet Gynecol Scand 83: 138-143, 2004.](#)

[Goto K, Kawano Y, Utsunomiya T, Narahara H. Decidualization modulates a signal transduction system via protease-activated receptor-1 in endometrial stromal cells. Am J Reprod Immunol 80: e13036, 2018.](#)

[Goto K, Kawano Y, Utsunomuya T, Narahara H. The possibility of analyzing endometrial receptivity using cells from embryo transfer catheters. Reprod Sci 28: 2623-2629, 2021.](#)


[Kawano Y, Sato H, Goto K, Nishida M, Nasu K. The inhibitory effect of AMP-activated protein kinase \(AMPK\) on chemokine and prostaglandin production in human endometrial stromal cells. Reprod Biol & Endocrinol 19: 188, 2021.](#)

所属・職位	医学部医学科神経内科学講座・准教授	
氏名	木村 成志 (Kimura Noriyuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2007年9月	
SDGs目標	  	

研究分野	新たな認知症予防法の開発
研究キーワード	認知症 生活習慣 神経機能画像

研究内容	<ul style="list-style-type: none"> ● 新たな認知症リスク因子の発掘に向けた疫学研究 2015年から大分県臼杵市の地域在住高齢者を対象としてウェアラブル生体センサによる生活習慣データの収集、認知機能検査、PET検査を実施し、これらのビッグデータを解析することで科学的根拠のある認知症リスク因子の発掘を目指してきた。65歳以上の高齢者855例（平均年齢73.8±5.8歳）を対象に3カ月ごとの生体センサ装着および年1回の認知機能評価を行い、さらに軽度認知障害(MCI: mild cognitive impairment)にはPiB-PET、FDG-PETを追加した。これまでの横断的解析から①歩数、心拍数、睡眠時間、会話時間がMMSEと関連する、②認知症予防には7791歩以上の歩行、353～434分の睡眠、80～321分の会話が重要である、③睡眠時間は脳内アミロイド蓄積および脳糖代謝量と有意な負の相関を示すことを明らかにした（論文1, 2）。さらに、一日の歩数は、睡眠効率と正の相関、中途覚醒時間、中途覚醒回数、昼寝時間と負の相関を示すことから身体活動が睡眠の質を改善するために効果的であることを明らかにした（論文3）。 ● 認知症および神経変性疾患の早期診断に有用な画像マーカーの開発 アルツハイマー病の早期診断に有用な画像マーカーの探索を目的としてMRI、PiB PET、FDG PETを活用した臨床研究を行ってきた。軽度認知障害および健常者103例を対象とした検討によりMRI、PiB PET、FDG PETを組み合わせることで軽度認知障害の診断精度が向上することを明らかにした（文献4）。さらに、脳血流SPECTを用いて様々な神経変性疾患に特異的な脳血流異常を検討した。①パーキンソン症候群における脳血流異常は各疾患で異なり、早期診断に有用であること、脊髄小脳変性症やアルツハイマー病における治療前後の脳血流量変化が治療効果判定に有用であることを明らかにした（論文4, 5, 6）。
------	--

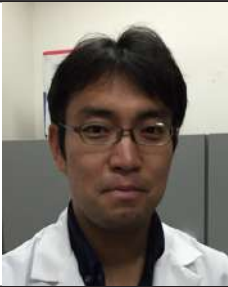



研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> 1. Kimura N, Aso Y, Yabuuchi K, Ishibashi M, Hori D, Sasaki Y, Nakamichi A, Uesugi S, Fujioka H, Iwao S, Jikumaru M, Katayama T, Sumi K, Eguchi A, Nonaka S, Kakumu M, Matsubara E. Modifiable Lifestyle Factors and Cognitive Function in Older People: A Cross-Sectional Observational Study. Front Neurol. 24;10:401, 2019. 2. Kimura N, Aso Y, Yabuuchi K, Ishibashi M, Hori D, Sasaki Y, Nakamichi A, Uesugi S, Jikumaru M, Sumi K, Eguchi A, Obara H, Kakuma T, Matsubara E. Association of Modifiable Lifestyle Factors With Cortical Amyloid Burden and Cerebral Glucose Metabolism in Older Adults With Mild Cognitive Impairment. JAMA Netw Open. 3:e205719, 2020. 3. Kimura N, Aso Y, Yabuuchi K, Matsubara E. Association between objectively measured walking steps and sleep in community-dwelling older adults: A prospective cohort study. PLoS One. 15:e0243910, 2020. 4. Kimura N, Hanaki S, Masuda T, Hanaoka T, Hazama Y, Okazaki T, Arakawa R, Kumamoto T. Brain perfusion differences in Parkinsonian disorders. Mov Disord. 26:2530-2537, 2011. 5. Kaneko H, Kimura N, Nojima S, Abe K, Aso Y, Matsubara E. Diagnosis of mild cognitive impairment using multiple neuroimaging modalities in addition to the Mini-Mental State Examination. Geriatr Gerontol Int. 19:1193-1197, 2019. 6. Kimura N, Kumamoto T, Masuda T, Nomura Y, Hanaoka T, Hazama Y, Okazaki T, Arakawa R. Evaluation of the effect of thyrotropin releasing hormone (TRH) on regional cerebral blood flow in spinocerebellar degeneration using 3DSRT. J Neurol Sci. 281:93-98, 2009.
---------------	---

所属・職位	医学部医学科眼科学講座・准教授	
氏名	木許 賢一 (Kimoto Kenichi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2004年6月	
SDGs目標	 	



研究分野	眼科学
研究キーワード	網膜、増殖性硝子体網膜症、加齢黄斑変性、網膜色素上皮細胞
研究内容	<p>1) 実臨床で多くの難治性眼内増殖疾患の手術 (増殖糖尿病網膜症、増殖硝子体網膜症) を手懸けながら、手術療法単独治療の限界も痛感し、眼内増殖疾患の分子標的治療の開発を目指している。</p> <p>2) 遺伝性の網膜剥離や網膜変性の病態解明</p> <p>3) 滲出型加齢黄斑変性のより効果的な治療方法の探求</p>
研究業績・アピールポイント	<p>1) p38 MAPK mediates the expression of type I collagen induced by TGF-beta 2 in human retinal pigment epithelial cells ARPE-19 K Kimoto, K Nakatsuka, N Matsuo, H Yoshioka INVESTIGATIVE OPHTHALMOLOGY & VISUAL SCIENCE 45(7) 2431-2437 2004</p> <p>2) Inhibition of RhoA/Rho-kinase pathway suppresses the expression of type I collagen induced by TGF-beta 2 in human retinal pigment epithelial cells Yuji Itoh, Kenichi Kimoto, Masamoto Imaizumi, Kazuo Nakatsuka EXPERIMENTAL EYE RESEARCH 84(3) 464-472 2007</p> <p>3) The PI3K/Akt pathway mediates the expression of type I collagen induced by TGF-β2 in human retinal pigment epithelial cells. Yokoyama K, Kimoto K, Itoh Y, Nakatsuka K, Matsuo N, Yoshioka H, Kubota T Graefe's archive for clinical and experimental ophthalmology 250(1) 15-23 2012</p> <p>4) One-Year Outcomes following Intravitreal Aflibercept for Polypoidal Choroidal Vasculopathy in Japanese Patients: The APOLLO Study Yuji Oshima, Kenichi Kimoto, Noriko Yoshida, Kimihiko Fujisawa, Shozo Sonoda, Toshiaki Kubota, Toshinori Murata, Taiji Sakamoto, Shigeo Yoshida, Koh-Hei Sonoda, Tatsuro Ishibashi OPHTHALMOLOGICA 238(3) 163-171 2017</p> <p>5) Foveal Hypoplasia in Patients with Stickler Syndrome Itsuka Matsushita, Tatsuo Nagata, Takaaki Hayashi, Kenichi Kimoto, Toshiaki Kubota, Masahito Ohji, Shunji Kusaka, Hiroyuki Kondo OPHTHALMOLOGY 124(6) 896-902 2017</p> <p>6) A Japanese Family with Autosomal Dominant Oculocutaneous Albinism Type 4 Ryoko Oki, Kisaburo Yamada, Satoko Nakano, Kenichi Kimoto, Ken Yamamoto, Hiroyuki Kondo, Toshiaki Kubota INVESTIGATIVE OPHTHALMOLOGY & VISUAL SCIENCE 58(2) 1008-1016 など</p>

所属・職位	医学部医学科病態生理学講座・准教授	
氏名	黒川 竜紀 (Kurokawa Tatsuki)	
取得学位	博士 (情報工学)、九州工業大学、2005年6月	
SDGs目標		

研究分野	イオンチャネルの構造と生理機能
研究キーワード	イオンチャネル、酸化ストレス、膜電位
研究内容	<p>○TRPチャネルの構造と生理機能 (原著論文3, 4, 7, 9)</p> <p>TRPチャネルは、種々の生理活性物質により活性化され、環境変化を感知するセンサータンパク質として働く。特に酸化感受性TRPチャネルについて、その生理学的意義について研究を展開している。</p> <p>○心筋イオンチャネルの翻訳後修飾と機能変化 (原著論文1, 2, 6)</p> <p>糖鎖修飾などの翻訳後修飾がチャネル活性にどう影響するかについて研究を行っている。</p> <p>○DNAナノ構造体へのイオンチャネルの集積化 (原著論文8)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>○原著論文 (過去5年分を記載)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Wang P, Zhu X, Wei M, Liu Y, Yoshimura K, Zheng M, Liu G, Kume S, <u>Kurokawa T</u>, Ono K. Disruption of asparagine-linked glycosylation to rescue and alter gating of the Nav1.5-Na⁺ channel. <i>Heart Vessels</i> 36, 589-596, 2021. 2. Wang P, Wei M, Zhu X, Liu Y, Yoshimura K, Zheng M, Liu G, Kume S, Morishima M, <u>Kurokawa T</u>, Ono K. Nitric oxide down-regulates voltage-gated Na⁺ channel in cardiomyocytes possibly through S-nitrosylation-mediated signaling. <i>Sci. Rep.</i> 11, 11273, 2021. 3. Uchiyama M, Nakao A, Kurita Y, Fukushi I, Takeda K, Numata T, Tran NH, Sawamura S, Ebert M, <u>Kurokawa T</u>, Sakaguchi R, Stokes AJ, Takahashi N, Okada Y, Mori Y. O₂-Dependent Protein Internalization Underlies Astrocytic Sensing of Acute Hypoxia by Restricting Multimodal TRPA1 Channel Responses. <i>Curr. Biol.</i> 17, 3378-3396.e7, 2020. 4. Tanaka M, Hayakawa K, Ogawa N, <u>Kurokawa T</u>, Kitanishi K, Ite K, Matsui T, Mori Y, Unno M. Structure determination of the human TRPV1 ankyrin-repeat domain under nonreducing conditions. <i>Acta Crystallogr. F Struct. Biol. Commun.</i> 76, 130-137, 2020. 5. Jouraku A, Kuwazaki S, Miyamoto K, Uchiyama M, <u>Kurokawa T</u>, Mori E, Mori MX, Mori Y, Sonoda S. Ryanodine receptor mutations (G4946E and I4790K) differentially responsible for diamide insecticide resistance in diamondback moth, <i>Plutella xylostella</i> L. <i>Insect Biochem. Mol. Biol.</i> 118, 103308, 2020. 6. Liu Y, Wang Pu, Ma F, Zheng M, Liu G, Kume S, <u>Kurokawa T</u>, Ono K. Asparagine-linked glycosylation modifies current density and voltage-dependent gating properties of Cav3.1-T-type Ca²⁺ channel. <i>J. Physiol. Sci.</i> 69, 335-343, 2019. 7. Horton JS, Shiraishi T, Alfulaij N, Small-Howard AL, Turner HC, <u>Kurokawa T</u>, Mori Y, Stokes AJ. TRPV1 is a component of the atrial natriuretic signaling complex, and using orally delivered antagonists, presents a valid therapeutic target in the longitudinal reversal and treatment of cardiac hypertrophy and heart failure. <i>Channels (Austin)</i> 13, 1-16, 2019. 8. <u>Kurokawa T</u>, Kiyonaka S, Nakata E, Endo M, Koyama S, Mori E, Tran NH, Dinh H, Suzuki Y, Hidaka K, Kawata M, Sato C, Sugiyama H, Morii T, Mori Y. DNA Origami Scaffolds as Templates for Functional Tetrameric Kir3 K⁺ Channels. <i>Angew. Chem. Int. Ed.</i> 57, 2586-2591, 2018. 9. Numata T, Tsumoto K, Yamada K, <u>Kurokawa T</u>, Hirose S, Nomura H, Kawano M, Kurachi Y, Inoue R, Mori Y. Integrative approach with electrophysiological and theoretical methods reveals a new role of S4 positively charged residues in PKD2L1 channel voltage-sensing. <i>Sci. Rep.</i> 7, 9760, 2017. 10. Hirano M, Takada Y, Wong CF, Yamaguchi K, Kotani H, <u>Kurokawa T</u>, Mori MX, Snutch TP, Ronjat M, Waard M, Mori Y. C-terminal splice variants of P/Q-type Ca²⁺ channel CaV2.1 α1 subunits are differentially regulated by Rab3-interacting molecule proteins. <i>J. Biol. Chem.</i> 292, 9365-9381, 2017.

所属・職位	医学部医学科呼吸器・感染症内科学講座・准教授	
氏名	小宮 幸作 (Komiya Kosaku)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2013年3月 修士 (公衆衛生)、聖路加国際大学、2019年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	呼吸器内科学、感染症学
研究キーワード	肺炎、結核、非結核性抗酸菌症、慢性気道炎症、臨床研修
研究内容	<p>●市中肺炎における予後予測因子と治療戦略に関する研究</p> <p>肺炎患者における予後因子を、肺炎発症の機序の視点から解析している。日本呼吸器学会の成人肺炎診療ガイドラインに携わり、各種システマティック・レビューも行っている。また、誤嚥性肺炎として世界で初めての英文教科書を編者として出版した。</p> <p>Shinji Teramoto and Kosaku Komiya, editors. Aspiration Pneumonia; The Current Clinical Giant for Respiratory Physicians, Shinji Teramoto and Kosaku Komiya Eds., Springer Nature Singapore Pte Ltd., 17th June 2020</p> <p>Komiya K, Rubin BK, Kadota JI, Mukae H, Akaba T, Moro H, Aoki N, Tsukada H, Noguchi S, Shime N, Takahashi O, Kohno S. Prognostic implications of aspiration pneumonia in patients with community acquired pneumonia: A systematic review with meta-analysis. Sci Rep. 2016 Dec 7;6:38097.</p> <p>●結核・非結核性抗酸菌症に関する臨床研究</p> <p>2017年より大分県委託事業である結核医療体制強化事業を担当し、公衆衛生修士としての視点から日本における結核診療の課題に関連する研究を多く行っている。日本結核・非結核性抗酸菌症学会が出版している結核診療ガイドの作成委員を努めた。</p> <p>Shuto H, Komiya K, Goto A, Kan T, Honjo K, Uchida S, Takikawa S, Yoshimatsu T, Yamasue M, Hiramatsu K, Kadota JI. Efficacy and safety of fluoroquinolone-containing regimens in treating pulmonary Mycobacterium avium complex disease: A propensity score analysis. PLoS One. 2020 Jul 9;15(7):e0235797.</p> <p>●気道炎症に関する基礎的研究</p> <p>慢性気道炎症における病態の解明、マクロライド系抗菌薬、抗コリン薬などの薬剤の影響について研究を行っている。</p> <p>Davis MD, Suzaki I, Kawano S, Komiya K, Cai Q, Oh Y, Rubin BK. Tissue Factor Facilitates Wound Healing in Human Airway Epithelial Cells. Chest. 2019 Mar;155(3):534-539.</p> <p>Komiya K, Ohta S, Arima K, Ogawa M, Suzuki S, Mitamura Y, Nunomura S, Nanri Y, Yoshihara T, Kawaguchi A, Kadota JI, Rubin BK, Izuhara K. Clarithromycin attenuates IL-13-induced periostin production in human lung fibroblasts. Respir Res. 2017 Feb 20;18(1):37.</p>
研究業績・アピールポイント	肺炎に関連する臨床研究および気道炎症における基礎研究において、米国胸部疾患学会から2回の受賞歴がある。国内各学会からもそれぞれの分野で受賞している。日本呼吸器学会においては、成人肺炎診療ガイドライン作成委員およびCOVID-19診療expert opinionワーキング委員を担当し、日本感染症学会では、臨床研究促進委員会委員、JAID/JSC感染症治療ガイド・ガイドライン作成委員 (呼吸器感染症領域)、臨床研究促進委員会委員、気道感染症抗菌薬適正使用委員会委員、全国レジオネラ症ワーキンググループ委員、DPCを用いた臨床研究に関するアドホック委員会委員等を担当している。研究業績を元に学会活動では中心的役割を果たしており、論文のみならず多くの書籍等も執筆している。

所属・職位	医学部医学科微生物学講座・准教授	
氏名	齊藤 信夫 (Saito Nobuo)	
取得学位	博士(医学)、長崎大学、2017年6月 熱帯医学修士、リバプール大学、2010年9月	
SDGs目標		

研究分野	臨床感染症学
研究キーワード	狂犬病、インフルエンザ、ワクチン、熱帯感染症、薬剤耐性対策、顧みられない熱帯感染症
研究内容	<p>臨床感染症専門医であり、臨床感染症・感染症疫学分野が専門である。特に熱帯感染症が得意で、フィリピンやタイなどのフィールドで長年研究を行ってきた。ラボを活用したフィールド疫学研究を得意とし、狂犬病、ジフテリア、レプトスピラ症、デング熱などの研究を行っている。</p> <p>○狂犬病研究(フィリピン) ヒト狂犬病前向き研究でリスク因子的特定、血液バイオマーカーの検討 狂犬病迅速診断キットによる犬狂犬病のフィールド診断から迅速な封じ込め策を開発し、現場で実証研究を行っている。2018年よりJICA専門家としてフィリピンへ長期派遣 http://www.med.oita-u.ac.jp/biseibut/ https://www.jica.go.jp/project/philippines/014/index.html?fbclid=IwAROMtLQ1MKT0bgFOxPLNYjropmFyD87U6eAYWTTV6huA-qawyJy_hHu6aZ0</p> <p>○熱帯感染症臨床疫学研究(薬剤耐性菌・ジフテリア・レプトスピラ症・髄膜炎菌) 世界で最も熱帯感染症の入院が多い、フィリピン国立感染症病院(サンラザロ病院)で研究拠点(長崎大学)を立ち上げ、様々な臨床疫学研究を実施 http://www.tm.nagasaki-u.ac.jp/internal/about/saito.html</p> <p>○インフルエンザワクチン・新型コロナワクチン臨床疫学研究 テスト陰性デザインを活用したインフルエンザワクチンの効果を推定する臨床疫学研究を実施。同様の方法で、多施設新型コロナワクチン有効性研究も実施している https://covid-19-japan-epi.github.io/output/index.html</p>
研究業績・アピールポイント	<p>○論文(筆頭著者もしくは責任著者のみ)</p> <ol style="list-style-type: none"> Household survey on owned dog population and rabies knowledge in selected municipalities in Bulacan, Philippines: A cross-sectional study. PLoS Negl Trop Dis. 2022 Jan 18;16(1) Lateral flow devices for samples collected by straw sampling method for postmortem canine rabies diagnosis. PLoS Negl Trop Dis. 2021 Dec 9;15(12):e0009891. Unique characteristics of new complete blood count parameters, the Immature Platelet Fraction and the Immature Platelet Fraction Count, in dengue patients. PLoS One. 2021 Nov 1;16(11):e0258936. Diphtheria in Metro Manila, the Philippines 2006-2017: A Clinical, Molecular, and Spatial Characterization. Clin Infect Dis. 2021 Jan 23;72(1):61-68. Dose-Dependent Negative Effects of Prior Multiple Vaccinations Against Influenza A and Influenza B Among Schoolchildren: A Study of Kamigoto Island in Japan During the 2011-2012, 2012-2013, and 2013-2014 Influenza Seasons. Clin Infect Dis. 2018 Aug 31;67(6):897-904. <p>○著書 Tropical Infectious Disease Clinical Case Report. Sysmex Corporation 2020</p> <p>○受賞 2018年 感染症学会 北里柴三郎記念学術奨励賞 日本感染症学会専門医・指導医、総合内科専門医</p>

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科総合診療・総合内科学講座・准教授	
氏名	塩田 星児 (Shiota Seiji)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2009年3月	
SDGs目標		
研究分野	総合診療、疫学	
研究キーワード	ヘリコバクター・ピロリ	
研究内容	<p>My research is aimed at understanding the important human bacterial pathogen, <i>Helicobacter pylori</i>, which is the major cause of peptic ulcer disease and of gastric cancer. The infection remains latent in the majority of infected patients, only a minority of individuals with <i>H. pylori</i> infection ever develop them. Importantly, the risk for different outcomes varies both among and within populations. These different outcomes are poorly understood and are currently thought to reflect differences in the virulence of the infecting <i>Helicobacter pylori</i> strain, in host genetic factors, in environmental factors, as well in interactions among these elements. My work has pursued basic studies of bacterial gene function and tries to provide critical information to help eliminate the suffering caused by peptic ulcer and deaths caused by gastric cancer. The problem however remains only partially solved and my work is important in helping eliminate this important human pathogen.</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>Shiota S, Singh S, Anshasi A, El-Serag HB. The Prevalence of Barrett's Esophagus in Asian Countries: A Systematic Review and Meta-analysis. Clin Gastroenterol Hepatol. 2015 Nov;13(11):1907-18.</p> <p>Shiota S, Reddy R, Alsarraj A, El-Serag HB, Graham DY. Antibiotic Resistance of Helicobacter pylori Among Male US Veterans. Clin Gastroenterol Hepatol. 2015 Sep;13(9):1616-24.</p> <p>実施機関名：日本学術振興会 制度（事業）名：科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)（基盤研究(C)） 課題名：認知症患者のピロリ菌CagA抗体陽性率の検討（課題番号：21K07321） 実施期間：令和3-5年度 予算規模：4,160千円（直接経費3,200千円） 申請代表者名：塩田星児</p> <p>実施機関名：日本学術振興会 制度（事業）名：科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(若手研究(B))) 課題名：ヘリコバクター・ピロリCagA抗体の迅速検出キットの開発 実施期間：平成25-26年度 予算規模：4,030千円（直接経費3,100千円） 申請代表者名：塩田星児</p>	

所属・職位	医学部医学科医化学講座・准教授	
氏名	下田 恵 (Shimoda Kei)	
取得学位	博士 (理学)、広島大学、1999年7月	
SDGs目標	 	

研究分野	機能材料学
研究キーワード	グリコシド化、機能性化合物、環境汚染物質
研究内容	<p>○機能性食品のグリコシド化に関する研究 化学的および酵素的的手法を利用して機能性食品をグリコシド化することにより、生理活性の高い機能性食品の開発を行う。(論文1)</p> <p>○医薬品のグリコシド化に関する研究 化学的および酵素的的手法を利用して医薬品をグリコシド化することにより、生理活性の高い医薬品の開発を行う。(論文2)</p> <p>○環境汚染物質のグリコシド化に関する研究 酵素的的手法を利用して環境汚染物質をグリコシド化することにより、環境汚染物質を環境から除去する。(論文3)</p>
研究業績・アピールポイント	<p>○論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. I. Nakanishi, K. Ohkubo, Y. Shoji, Y. Fujitaka, K. Shimoda, et al., Relationship between the radical-scavenging activity of selected flavonols and thermodynamic parameters calculated by density functional theory. <i>Free Radical Research</i>, Vol. 54, No. 7, pp. 534-539 (2020). 2. H. Hamada, H. Hamada, K. Shimoda, et al., Resveratrol oligosaccharides (gluco-oligosaccharides) effectively inhibit SARS-CoV-2 infection: Glycoside (polysaccharide) approach for treatment of COVID-19. <i>Natural Product Communications</i>, Vol. 16, No. 5, pp. 1-3 (2021). 3. K. Shimoda, N. Kubota, Y. Kondo, D. Sato, et al., Glycosylation of fluorophenols by plant cell cultures. <i>International Journal of Molecular Sciences</i>, Vol. 10, No. 5, pp. 1942-1949 (2009). <p>○受賞</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 平成22年度 舟橋重明記念奨励助成金

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部





医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科細胞生物学講座・准教授	
氏名	白石 裕士 (Shiraiishi Hiroshi)	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、2007年3月	
SDGs目標	  	
研究分野	細胞生物学・遺伝学	
研究キーワード	希少遺伝性疾患・RNAリン酸化酵素・疾患モデル・細胞死・アレルギー	
研究内容	<p>【RNAリン酸化酵素に関する研究】</p> <p>生体内の様々なRNA分子は厳密に合成と分解の調節を受けており、それらRNAの代謝調節機構をつかさどる分子の異常が、神経変性疾患や悪性腫瘍といった様々な疾患を引き起こすことが明らかとなってきた。RNAの末端をリン酸化する酵素であるRNAリン酸化酵素を中心に、RNA関連分子の生理的意義とその破綻が原因となる疾患の発症メカニズムに関する研究を行なっている (論文1、3、4)。</p> <p>【希少遺伝性疾患の疾患モデル作製およびその発症メカニズムと治療法に関する研究】</p> <p>遺伝性疾患の多くは希少疾患であるが、未だ多くの疾患において発症メカニズムが不明である。そこで、マウスやゼブラフィッシュにおいて、CRISPR/Cas9といった遺伝子改変技術を駆使して、より効率の良い疾患モデル作製方法を開発するとともに、希少遺伝性疾患の疾患モデルを作製して発症メカニズムの研究を行なっている (論文1、2)。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>これまでにRNAリン酸化酵素の一つであるCLP1の変異が橋小脳低形成症10型の原因となることを発見し、実際にその変異によって病気が発症することを、遺伝子改変技術を用いて作製した動物モデルを用いて明らかにした (論文1、4)。さらに、その生理的役割の一部を明らかにしてきた (論文3)。</p> <p>【論文】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Modeling a human CLP1 mutation in mouse identifies an accumulation of tyrosine pre-tRNA fragments causing pontocerebellar hypoplasia type 10. <i>Biochem Biophys Res Commun.</i> 2021 Sep 17;570:60-66. doi: 10.1016/j.bbrc.2021.07.036. 2. Leucyl-tRNA synthetase deficiency systemically induces excessive autophagy in zebrafish. <i>Sci Rep.</i> 2021 Apr 16;11(1):8392. doi: 10.1038/s41598-021-87879-4. 3. CLP1 acts as the main RNA kinase in mice. <i>Biochem Biophys Res Commun.</i> 2020 April 23;525(1):129-134 doi: 10.1016/j.bbrc.2020.02.066. 4. Human CLP1 mutations alter tRNA biogenesis, affecting both peripheral and central nervous system function. <i>Cell.</i> 2014 Apr 24;157(3):636-50. doi: 10.1016/j.cell.2014.02.058. 5. Periostin promotes chronic allergic inflammation in response to Th2 cytokines. <i>J Clin Invest.</i> 2012 Jul;122(7):2590-600. doi: 10.1172/JCI58978. 6. ER stress-induced apoptosis and caspase-12 activation occurs downstream of mitochondrial apoptosis involving Apaf-1. <i>J Cell Sci.</i> 2006 Oct 1;119(Pt 19):3958-66. doi: 10.1242/jcs.03160. <p>【受賞】</p> <p>第6回日本アレルギー学会学術大会賞</p>	

所属・職位	医学部医学科解剖学講座・准教授	
氏名	千葉 政一 (Chiba Seiichi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2005年6月	
SDGs目標		
研究分野	代謝学、行動生理学、医療工学、肥満臨床学、解剖学	
研究キーワード	肥満症、中枢性ヒスタミン、記憶学習	
研究内容	<p>●肥満にともなう代謝学に関する研究 基礎研究では食事誘導性肥満モデルを作成し、主に中枢性側行動調節機構を解析している。臨床研究では行動療法の有効性を後ろ向き観察研究として行なっている。</p> <p>●中枢性ヒスタミン機能に関する研究 小動物視床下部のヒスタミン機能について外因性にヒスタミンを投与し、その行動修飾作用を解析している。</p> <p>●医療工学機器の開発 体重日内変動のデジタル解析を行い、AIによる体重減少効果の予測を検討している。皮膚小外科用の局所麻酔薬を用いない皮膚冷却デバイスを開発した。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●論文 Wei H, *Chiba S, Moriwaki C, Kitamura H, Ina K, Aosa T, Tomonari K, Gotoh K, Masaki T, Katsuragi I, Noguchi H, Kakuma T, Hamaguchi K, Shimada T, Fujikura Y, Shibata H: A clinical approach to brown adipose tissue in the para-aortic area of the human thorax. PloS one 10:e0122594, 2015 (IF 4.411) 査読有 Moriwaki C, *Chiba S, Wei H, Aosa T, Kitamura H, Ina K, Shibata H, Fujikura Y: Distribution of histaminergic neuronal cluster in the rat and mouse hypothalamus. J Chem Neuroanat 68:1-13, 2015 (IF 1.8) 査読有 Aosa T, *Chiba S, Kitamura H, Ina K, Tatsukawa S, Moriwaki C, Wei H, Gotoh K, Masaki T, Kakuma T, Shibata H, Fujikura Y: Pore alterations of the endothelial lining of rat fenestrated intestinal capillaries exposed to acute stress. Histol. Histopathol. 31(7):807-817, 2016 (IF 2.025) 査読有 *千葉政一、森脇千夏、伊奈啓輔、藤倉義久： 摂食と肥満における視床下部神経ヒスタミンの役割:創薬へ向けて。 日本薬理学会雑誌 147:1-8, 2016 *千葉政一：基礎医学研究の今。 肥満研究 68(2):130-131, 2017</p>	

所属・職位	医学部医学科産科婦人科学講座・准教授	
氏名	西田 欣広 (Nishida Yoshihiro)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2001年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	周産期医学、分子生物学、東洋医学
研究キーワード	胎盤、胚細胞、メタボローム解析
研究内容	<p>●胚移植前メタボローム解析による新しい胚機能評価法に関する研究</p> <p>これまでに単一胚細胞由来の超微量培養液中一次代謝産物の、GC-MS/MS法による測定条件を確立した (特許出願済)。各胚細胞の一次代謝産物について主成分分析すると、形態学的に分別できる群ごとに分かれ、胚の良否判別に有用であることを明らかにした(文献1)。現在、妊娠継続の可能性が高い受精胚は胚移植前の早い段階でその胚細胞分裂に起因する代謝に差異が生じるのではないかとの仮説のもと研究を行っている。</p> <p>●胚移植前に個体の運命を予測可能とする研究</p> <p>本研究では妊娠継続の可能性が高い受精胚の選択マーカーを提案することを研究目的とし、下図に先行研究 (パイロット研究) の一部を示す。最終的に生児を得た胚細胞と流産に帰結した胚細胞のそれぞれ胚移植前の培養液中の代謝産物を解析し、肉眼的には同レベルの胚移植に適した良好胚細胞 (Gardner分類: 3BCもしくは3CB以上) であっても生児を得た胚細胞培養液は明らかにその一次代謝産物に相違があることを確認し、現在精査を進めている。この非侵襲的解析手法は我々が独自に開発した独自性が強い研究である。</p>

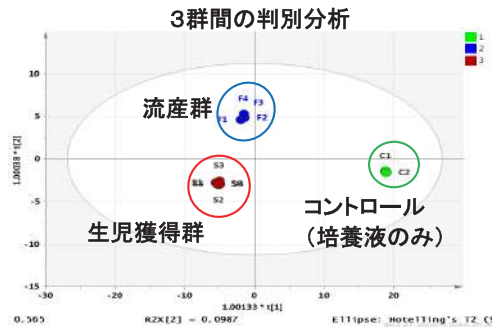






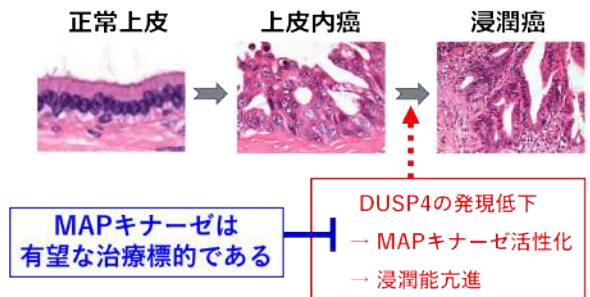
図. 培養液のメタボローム解析



研究業績・アピールポイント	<p>この2年間の研究業績を示す。文献1-3は責任著者として発表。</p> <ol style="list-style-type: none"> Naomi Inoue, Yoshihiro Nishida*, Emi Harada, Kumi Sakai, Hisashi Narahara. GC-MS/MS analysis of metabolites derived from a single human blastocyst. Metabolomics. 2021 Jan 25;17(2):17. doi: 10.1007/s11306-021-01770-x. Inoue N, Terabayashi T, Takiguchi-Kawashima Y, Fujinami D, Matsuoka S, Kawano M, Tanaka K, Tsumura H, Ishizaki T, Narahara H, Kohda D, Nishida Y*, Hanada K. The benzyloisoquinoline alkaloids, berberine and coptisine, act against camptothecin-resistant topoisomerase I mutants. Sci Rep. 2021 Apr 8;11(1):7718. doi: 10.1038/s41598-021-87344-2. Naomi Inoue, Hisashi Narahara, Yoshihiro Nishida*, and Katsuhiko Hanada, Detection of Bleomycin-Induced DNA Double-Strand Breaks in <i>Escherichia coli</i> by Pulsed-Field Gel Electrophoresis Using a Rotating Gel Electrophoresis System. DNA Electrophoresis: Methods and Protocols, Methods in Molecular Biology, vol.2119, p155-163. Humana Press 2020. Masanori Inoue, Kazumasa Hada, Hiroshi Shiraishi, Hiroyuki Yatsuka, Hiroyuki Fujinami, Ikuko Morisaki, Yoshihiro Nishida, Etsuro Matsubara, Tohru Ishitani, Reiko Hanada, Masaki Matsumoto, Josef M Penninger, Kenji Ihara, Toshikatsu Hanada, Tyrosine Pre-Transfer RNA Fragments Are Linked to p53-dependent Neuronal Cell Death via PKM2. Biochem Biophys Res Commun 2020 Mar 3, DOI: 10.1016/j.bbrc.2020.02.157
---------------	---

所属・職位	医学部医学科ヘルスケアAI・データサイエンス学講座・准教授	
氏名	秦野 浩司 (Hatano Koji)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2016年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	神経画像学、医療情報学、データサイエンス、精神医学	
研究キーワード	神経突起イメージング、MRI、機械学習	
研究内容	<p>・機械学習と神経突起画像を用いて精神疾患を弁別する研究</p> <p>うつ病と双極性障害の診断は時に難しいことがあります。MRIによる拡散テンソル画像を用いて神経突起を画像化することが可能となっており、これと機械学習を用いてうつ病と双極性障害の弁別を行うことを目指しています。</p> <p>・気質と脳画像研究</p> <p>うつ病の仮面をかぶった双極性障害が結構多いことが問題になっています。「気質」は生まれつきの性格傾向であり、循環気質や発揚気質を持ったうつ症状のある方を、双極スペクトラムと診断し、治療を行っています。気質と脳画像の関連に着目して、MRIや18F-FDG-PETを用いた脳画像研究を行っています。健康成人において、循環気質や発揚気質が高い人は、左内側前頭回の体積が大きいことを示しました (論文1)。さらに、MRIの拡散テンソル画像を用いることで、気質と白質の微細構造の関連を精査しています。循環気質は、右前放線冠や右脳梁膝部と関連があり、発揚気質は全脳の多くの部位の白質と関連があることを明らかにしました (論文2)。今後は、気質に着目して健常者と気分障害 (躁うつ病やうつ病) に共通した、あるいは異なった脳機能・構造特性を明らかにしていく予定です。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>精神疾患とMRIを用いた脳画像研究を軸に研究活動を行っています。近年は機械学習やデータサイエンスにも取り組んでいます。</p> <p>・論文</p> <ol style="list-style-type: none"> Hatano K., Terao T., Hoaki N., Kohno K., Araki Y., Mizokami Y., Kodama K., Harada M., Fujiki M., Shimomura T., Hayashi T. Association between affective temperaments and regional gray matter volume in healthy subjects. <i>Journal of Affective Disorders</i>. 155:169-173, 2014. Hatano K., Terao T., Hayashi T., Hirakawa H., Makino M., Mizokami Y., Fujiki M., Shimomura T. Affective temperaments are associated with the white matter microstructure in healthy participants. <i>Bipolar Disorders</i>. 21:539-546, 2019. Hatano K., *Terao T., Hirakawa H., Kohno K., Mizokami Y., Ishii N. Cyclothymic temperament and glucose metabolism in the right superior parietal lobule. <i>Psychiatry Research Neuroimaging</i>. 270:76-79, 2017. Hirakawa H., Terao T., Hatano K., Shirahama M., Kugimiya T., Kohno K., Ishii N., Matsuta H., Shimomura T., Fujiki M. Increase in the left hippocampal dentate gyrus head volume after a 4-week bright light exposure in healthy participants: A randomized controlled study. <i>Journal of Psychiatric Research</i>. 145:1-5, 2021. Bhagwat N., Barry A., Dickie E.W., Brown S.T., Devenyi G.A., Hatano K., DuPre E., Dagher A., Chakravarty M.M., Greenwood C.M.T., Misic B., Kennedy D.N., *Poline J. Understanding the impact of preprocessing pipelines on neuroimaging cortical surface analyses. <i>GigaScience</i>. 10:giaa155. doi:10.1093/gigascience/giaa155, 2021. 	

所属・職位	医学部医学科分子病理学講座・准教授	
氏名	泥谷 直樹 (Hijiya Naoki)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1994年9月	
SDGs目標		

研究分野	病理学
研究キーワード	膵癌、大腸癌、悪性形質、責任遺伝子、分子標的治療
研究内容	<p>●膵上皮内癌から浸潤癌への進展に関わる分子機序の解明</p> <p>膵癌は正常上皮から上皮内癌を経て生じる悪性腫瘍です。私は上皮内癌と浸潤癌のゲノム異常を比較することで、浸潤に関わるゲノム異常と責任遺伝子を同定し、それに伴って活性化されるMAPキナーゼ経路が有望な治療標的となりうることを報告しました(論文#1, 2)。</p> <p>●MAPキナーゼ阻害薬の耐性化関連分子を標的とした新規治療法の開発</p> <p>膵癌はMAPキナーゼ経路依存性腫瘍であるにもかかわらず、MAPキナーゼ阻害薬に対して強い抵抗性を示します。私は抵抗性に関わる分子を同定し、その分子の機能を抑制することでMAPキナーゼ阻害薬の感受性が改善することを証明しました (paper in preparation)。現在、膵癌の新規治療法の開発に向けた基礎研究を進めています。</p> <p>●大腸癌の進展に関わる分子機序の解明</p> <p>大腸癌の深達度や転移は重要な予後規定因子です。これらの悪性形質に関わる分子を同定して、バイオマーカーおよび治療標的としての有用性を報告しました(論文#3, 4, 5)。現在、臨床講座と協力して新規診断法と治療法の開発を目指しています。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>論文</p> <p>#1. Genomic loss of DUSP4 contributes to the progression of intraepithelial neoplasm of pancreas to invasive carcinoma. <i>Cancer Res.</i> 76(9):2612-2625. 2016</p> <p>#2. Downregulation of ZNF395 drives progression of pancreatic ductal adenocarcinoma through enhancement of growth potential. <i>Pathobiology</i> 88:374–382. 2021</p> <p>#3. Visinin-like protein-1 overexpression is an indicator of lymph node metastasis and poor prognosis in colorectal cancer patients. <i>Int J Cancer.</i> 131(6):1307-17. 2012</p> <p>#4. Downregulation of DUSP4 enhances cell proliferation and invasiveness in colorectal carcinomas. <i>Cancer Sci.</i> 109(1):250-258. 2018</p> <p>#5. DUSP4 is involved in the enhanced proliferation and survival of DUSP4-overexpressing cancer cells. <i>Biochem Biophys Res Commun.</i> 528 (3):586-593. 2020</p>



所属・職位	医学部医学科小児科学講座・准教授	
氏名	前田 知己 (Maeda Tomoki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2009年3月	
SDGs目標		

研究分野	胎児・新生児医学
研究キーワード	新生児自発運動評価、General Movements、心拍変動解析





研究内容	<p>●General Movements; GMs評価を用いた発達予測 GMsは新生児期・乳児期早期に認められる自発的な運動で、発達過程の中枢神経系の機能を反映すると考えられており、脳性麻痺予測に有用な事が確立している。当院NICUで入院加療を行った、極低出生体重児に代表される発達に問題を抱えるリスクのある児のコホートで、発達予後を前方視的に検討している。新生児期の評価はGMsのほかに頭部MRIによる脳形態発達、心拍変動解析による自律神経機能の評価も行い、GMsの由来や影響を及ぼす因子を検討している。それらの評価を組み合わせることで、脳性麻痺以外の運動の巧緻性の障害、知的障害、神経発達症リスク児の早期の気づき、早期介入や家庭への支援につなげることを目指している。</p> <p>●GMs判定補助システムの開発、GMs評価普及活動 GMs評価は本邦で評価できる者が少ない。本邦で広くGMs評価を実践するために、自身が中心となり評価用サーバーを立ち上げ、多施設・複数の評価者で連携して、継続的な評価者のトレーニングと評価精度の向上を目指すシステムの運用している。また、研究を通じて収集された臨床情報、GMs記録とその評価、発達予後は、日本人のGMsアーカイブとして保存・公開し、本邦における新生児乳児期の自発運動に関する基礎・臨床研究の基礎資料とする予定である。</p>	
------	--	--

図 2022年に作成した乳児期早期のGMs評価演習用DVD

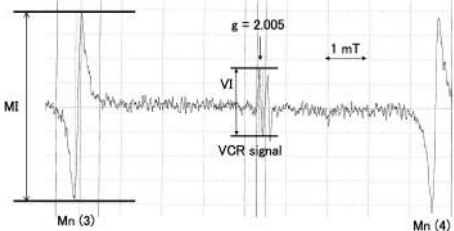
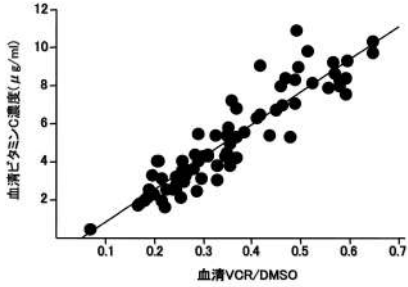
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Maeda T, Kobayashi O, Ihara K, Bos AF. Fidgety movements assessment accuracy survey in Japan. Int. J. Environ. Res. Public Health. 2021; 18(24):13428 2. 前田知己. 新生児期・乳児期早期の発達評価-General movements評価法を中心に. 脳と発達 2020; 52:141-146 3. Maeda T, Sekiguchi K, Wasada R, Ihara K. Caffeine not associated with irritable behaviour in very low-birth-weight infants. Ear Hum Dev. 2019; 137: 104835 4. 前田知己. 脳性麻痺の診断と小児科治療. Medical rehabilitation 2019; 232:1-7 5. Maeda T, Iwata H, Sekiguchi K, Takahashi M, Ihara K. The association between brain morphological development and the quality of general movements. Brain Dev. 2019;41:490-500 6. Maeda T, Inoue M, Sekiguchi K, Ihara K. Aminophylline-associated irritable behaviour in preterm neonates. Ear Hum Dev 2016;99:37-41 <p>●GM-Trust主催の評価講習会2011年基礎コース、2013年、2017年にアドバンスコースを受講し評価認証を受けている。2018年に本邦で初めての基礎評価法講習会を開催した。</p>
---------------	--

所属・職位	医学部医学科内分泌代謝・膠原病・腎臓内科講座・准教授	
氏名	正木 孝幸 (Masaki Takayuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、2000年3月	
SDGs目標	 	




研究分野	医学
研究キーワード	肥満症、糖尿病、代謝性症候群
研究内容	<p>●脂肪由来因子アディポネクチンのエネルギー代謝への影響に関する研究 肥満糖尿病モデルマウスにおいてアディポネクチンを投与した時に褐色脂肪組織や骨格筋での脱共役タンパク質の発現増加作用を示した。アディポネクチンはエネルギー代謝調節作用を持つことが示唆された(論文 1)。</p> <p>●脂肪由来因子アディポネクチンの肝臓の炎症への影響に関する研究 本研究ではアディポネクチンの肝臓における抗炎症効果について調べた。肥満症肝炎モデルにアディポネクチンは肝炎に保護的に作用することが分かった(論文 2)。</p> <p>●神経ヒスタミンの摂食リズムやエネルギー代謝への影響に関する研究 肥満糖尿病モデルマウスにおいて神経ヒスタミンは脱共役タンパク質の発現増加作用を持つことや摂食のリズムに関連することが示唆された(論文 3)。</p> <p>●ヒト内臓脂肪蓄積と血圧変動との関連についての解析 本研究では耐糖能異常のある患者さんの24時間血圧変動と内臓脂肪蓄積の関連について解析した。耐糖能異常の患者さんにおいて内臓脂肪蓄積は特に夜間の高血圧と関連することが示唆された(論文 4)。</p> <p>●GLP-1アナログ製剤の糖代謝と食行動への影響に関する研究 肥満糖尿病の患者さんでGLP-1アナログ製剤セマグルチド投与は糖尿病改善と併せて食行動の改善所見も認めた。特に食行動の中でも空腹満腹感が糖代謝の改善と関連することが示唆された(論文 5)。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●主な論文 (論文1). Masaki T, et al. Diabetes. 52:2266, 2003. (論文2). Masaki T, et al. Hepatology. 40:177, 2004. (論文3). Masaki T, et al. Trends Pharmacol Sci. 27:279, 2006. (論文4). Masaki T, et al. Diabetes Care. 34: e32, 2011. (論文5). Masaki T, et al. Metabolites 12:147, 2022.</p> <p>●受賞 2003年、日本肥満学会 Young Investigate Award 2008年、日本肥満学会 学術奨励賞</p>

所属・職位	医学部医学科マトリックス医学講座・准教授	
氏名	松尾 哲孝 (Matsuo Noritaka)	
取得学位	博士 (農学)、九州大学、1996年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	マトリックス生物学、生化学、分子生物学	
研究キーワード	細胞外マトリックス、細胞分化、転写、機能性因子	
研究内容	<p>1) 細胞外マトリックス分子の機能解析</p> <p>我々の生体は、種々の細胞とそれを取り巻く細胞外環境の相互作用によって組織・臓器が形成され、機能が維持されています。従って、生命現象や疾患のメカニズムを解明するためには、細胞自身だけでなく、細胞外マトリックスの役割を知る事が重要と思われます。我々は、これら分子の中で、コラーゲン分子に着目し、その発現調節機構や分子自身の機能について解析を進めています。</p> <p>2) 天然成分の生体調節機能因子</p> <p>我々の周りには、数多くの天然成分が存在していますが、その中には、我々の生体維持に機能的に作用する因子を含んでいる事が知られています。これら機能因子を検索、同定することは、医薬とは異なり、日常生活で我々の健康状態を維持し、改善することが可能となります。我々は、天然成分の様々な生体調節機能を検討すると共に、その作用機序の解明を進めています。</p> <p>3) 間葉系幹細胞の組織特異的分化に関わる因子の検索及び機能解析</p> <p>未分化間葉系幹細胞からは、骨・軟骨・皮膚・筋肉・脂肪細胞などに分化していくことが知られています。これら各組織への分化メカニズムについては、未だ謎の部分が多いですが、組織特異的な転写因子や足場となる細胞外マトリックス分子などがこの課程に関与していることが判ってきました。我々は、再生医療を目指して、組織特異的な分化課程に関与する因子を検索し、その機能解析を進めています。</p> <p>関連リンク：https://www.med.oita-u.ac.jp/matrix/</p>	
研究業績・アピールポイント	<p><代表的な論文></p> <p><u>N. Matsuo, S. Tanaka, M. K. Gordon, M. Koch, H. Yoshioka, F. Ramirez.</u> CREB/AP1 protein complexes regulate transcription of the collagen XXIV gene (Col24a1) in osteoblasts. J. Biol. Chem. 281; 5445-52; 2006</p> <p>H. Nagato, <u>N. Matsuo</u>, H. Sumiyoshi, K. Sakata-Takatani, M. Nasu, H. Yoshioka. The transcription factor CCAAT-binding factor CBF/NF-Y and two repressors regulate the core promoter of the human pro-α3(V) collagen gene (COL5A3). J. Biol. Chem. 279; 46373-83; 2004</p> <p><u>N. Matsuo</u>, W. Yu-Hua, H. Sumiyoshi, K. Sakata-Takatani, H. Nagato, K. Sakai, M. Sakurai, H. Yoshioka. The Transcription factor CCAAT-binding factor CBF/NF-Y regulates the proximal promoter activity in the human α1(XI) collagen gene (COL11A1). J. Biol. Chem. 278; 32763 - 70; 2003</p> <p>R. Kawano, <u>N. Matsuo</u>, H. Tanaka, M. Nasu, H. Yoshioka, K. Shirabe. Identification and characterization of a soluble cadherin-7 isoform produced by alternative splicing. J. Biol. Chem. 277; 47679-85; 2002</p>	

所属・職位	医学部医学科麻酔科学講座・准教授	
氏名	松本 重清 (Matsumoto Shigekiyo)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2010年3月	
SDGs目標	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>3 すべての人に健康と福祉を</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>4 質の高い教育をみんなに</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>9 産業と技術革新の基盤をつくろう</p>  </div> </div>	




研究分野	麻酔科学、集中治療医学、周術期管理医学
研究キーワード	酸化ストレス、炎症、ビタミンC、敗血症、術後せん妄、胎児仮死
研究内容	<p>●ビタミンCリアルタイム測定法の確立と各種病態における酸化ストレスの評価に関する研究</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>図1. DMSO添加後に得られる血漿VCRのESRシグナル。Mnマーカーのシグナル高(MI)に対するVCRのシグナル高(VI)の比を血漿VCR/DMSOとした。</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>図2. ESR装置で測定したVCR/DMSOとHPLCで測定したビタミンC濃度には有意な正の相関関係を認めた(論文1)。</p> </div> </div> <p>電子スピン共鳴(ESR)装置を用いた血漿ビタミンCリアルタイム測定法を確立し、これを応用して、急性肺傷害(論文1)や胎児仮死(論文2)において、リアルタイムで酸化ストレスの程度を評価することに成功した。さらに、敗血症性ショックの機序として、過剰な酸化ストレスに伴うビタミンCの減少による副腎不全の可能性を指摘し(論文3)、基礎研究にて検証中である(東京都健康長寿医療センター研究所・石神研究部長との共同研究)。また、現在、心臓手術後のビタミンCの減少と術後せん妄の関連性について臨床研究を行っている。</p> <p>●酸化ストレスと栄養療法に関する概説 重症病態において、抗酸化栄養療法により酸化ストレスを制御することの重要性を概説した(著書1)。</p> <p>●呼気中揮発性代謝産物のリアルタイム測定法の開発 近年、疾患に関連する呼気中揮発性代謝産物が多数報告され、呼気からの揮発性代謝産物検知による疾患の早期発見や予防への期待が高まっているが、周術期においてはいまだに検討されていない。周術期には、手術侵襲により組織代謝が著明に変化する。それに伴い産生された揮発性代謝産物は生体膜を通過して呼気中に出現する。本研究では、水晶振動子ガスセンサシステム(北九州市立大学・李教授との共同研究)を用いて、呼気揮発性代謝産物のリアルタイム検出法を確立し、周術期合併症や予後との関連を検討中である。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2010年、The impact of oxidative stress levels on the clinical effectiveness of sivelestat in treating acute lung injury: an electron spin resonance study. J Trauma. 68: 796-801. 2014年、New evaluation of fetal oxidative stress: measurement of the umbilical cord blood dimethyl sulfate-induced ascorbyl-free radical by an electron spin resonance method. J Matern Fetal Neonatal Med. 27: 1550-4. 2011年、Effects of the Antioxidant-Enriched Concentrated Liquid Diet ANOM on Oxidative Stress and Multiple Organ Injury in Patients with Septic Shock: A Pilot Study. J Anesthe Clinic Res. 2: 8. <p>著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 2009年、抗酸化栄養療法とその可能性. 臨床栄養臨時増刊号, 114, 659-665

所属・職位	医学部・准教授	
氏名	道越 淳一 (Michikoshi Junichi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2020年6月	
SDGs目標	  	
研究分野	人工臓器学 (呼吸器系・代謝系)	
研究キーワード	人工呼吸器、気道管理、急性血液浄化、持続的血液濾過器	
研究内容	<p>●人工呼吸管理で気道管理に必要な気管チューブ・気管カニューレのカフに関する研究 (カフ圧の自然脱気やシール能力をカフの材質・形状・大きさなどから解析)、気管吸引・加温加湿に関する研究を通し、急性期・慢性期・在宅における安全な人工呼吸管理を目指した研究。(著書1.・2.・3.・4.)</p> <p>●自動カフ圧調整装置の開発 気管チューブのカフ圧の管理は人工呼吸器関連肺炎予防のためにも重要である。現在行われている一般的な管理方法は間欠的な調整方法であり十分な管理が困難であるため、カフ圧を持続的に安定した圧力で管理するため、電源を必要としない新たな自動カフ圧調整装置を開発。(論文1.・受賞2.)</p> <p>●持続緩徐式血液濾過で使用される濾過器の吸着特性を研究。病態に応じた膜の選択を可能にするため、各種タンパクや細胞の吸着による除去特性が、いかにして臨床効果につながるかについて研究。(論文2.・受賞1.)</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>臨床ニーズに合った医療機器をより早く臨床に反映させる機器開発。 生体情報のモニタリング機器の研究開発。 医療安全の見地から、各種医療機器の分析を行い臨床に反映させる研究。</p> <p>●論文 1.2016年 Performance comparison of a new automated cuff pressure controller with currently available devices in both basic research and clinical settings. Journal of Intensive Care 2016;4:4. 2.2019年 Evaluation of Proteins and Cells that Adsorb to Dialysis Membranes Used in Continuous Hemodiafiltration: Comparison of AN69ST,Polymethylmethacrylate,and Polysulfone Membranes. Blood purification 2019;48(4):P358-367.</p> <p>●著書 1.2015年 どう回避し,対処する? 事例から学ぶ人工呼吸療法時のトラブル,気管チューブに関するトラブル事例と対処 月刊 Clinical EngineeringVol.26 No.9 2015,P894~900 2.2017年 臨床工学技士のための人工呼吸療法トラブル事例と対処:臨床工学技士のための人工呼吸療法 第4章,3,P234~242 学研メディカル秀潤社 3.2018年 気管カニューレのカフ圧持続管理の重要性 月刊難病と在宅ケアVol.23 No11. 2018.2 4.2020年 [特集]呼吸管理上級編2020 気管チューブカフと自動カフ圧コントロール装置 月刊 Clinical Engineering VOL.31 NO.11 2020,P947~954 学研メディカル秀潤社</p> <p>●受賞 1.2018年 第2回日本集中治療学会 支部総会 最優秀演題賞 2.2019年 日本臨床工学会 第2回医工連携Award特別賞</p>	

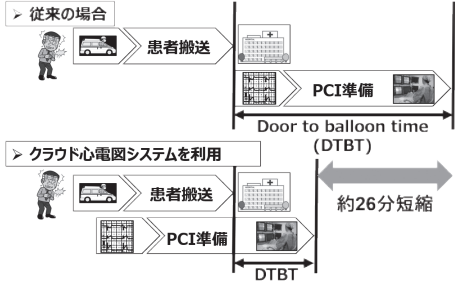

所属・職位	医学部附属医学教育センター・准教授	
氏名	山本 恭子 (Yamamoto Kyoko)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2015年12月	
SDGs目標	 	

研究分野	医学教育
研究キーワード	医学教育 総合診療
研究内容	<p>① 認知症予防に関する研究 介護予防拠点での介護予防の取り組みの有用性 認知症早期発見に関する研究</p> <p>② 医学教育に関する研究 総合診療に関する学生の学び 鑑別診断に基づく身体診察 (HDPE) を用いた診察技能向上</p> <p>③ 総合診療に関する研究 身体症状の訴えの数とうつ病の関連</p>
研究業績・アピールポイント	<p>山本恭子, 中川幹子, 北野敬明, 宮崎英士. コロナ禍のオンライン講義—アクティブラーニングで健康の社会的決定要因 (SDH) を学ぶ—. 大分大学高等教育開発センター紀要 第13号,111-121,2021.</p> <p>Kyoko Y., Seiji S., Shigeki O., Akiko K., Aoi Y., Koh A., Kazunari M., Toshio F. A Diagnosis of Depression Should Be Considered in Patients with Multiple Physical Symptoms in Primary Care Clinics. <i>Tohoku J. Exp. Med.</i>,229,279-285 (2013).</p> <p>山本恭子,塩田星児,中川幹子,北野敬明,宮崎英士.特集: コロナ禍より生まれた医学教育イノベーション—鑑別診断を考えながら行う身体診察 (HDPEモデル) に基づく教育実践—認知的徒弟制の枠組みを用いた学生によるシナリオ作成とその成果—. 医学教育52(3): 241-245,2021.</p> <p>Kyoko Yamamoto, Aoi Yoshiiwa et al. Intervention study for elderly people attending Salons - Initiative to prevent dementia in local Government. WONCA2021 World Conference.</p>

所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座・准教授	
氏名	幸松 美智子 (Yukimatsu Michiko)	
取得学位	修士(看護学)、高知女子大学、2002年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	小児看護学	
研究キーワード	慢性疾患を抱える子ども 病児の家族看護 病児のしつけ 基礎教育 アセスメント能力	
研究内容	<p>●看護学生が捉える子どもの甘えの構造</p> <p>病児だけでなく子どもの成長発達に「甘え」は不可欠であるが、「甘え」の研究を紐解くと文化の中に「甘え」があるものの、子どもを養育する際には「甘え」は許されぬものとなっている。病児やその家族は強いストレスを抱えており、その意味でも「甘えや依存」は重要なコーピングであるが、医療従事には自立を促すことが必要であると甘えを許さない傾向が先行研究で明らかとなった。将来看護師となる看護学生が「甘え」をどのように捉え、対応すべきと考えているかを明らかにすることは、養育の専門家を育成するための重要な資料となるため取り組んだ(論文1)</p> <p>●学生の分析力向上におけるアセスメント・モデルの効果</p> <p>看護教育において学生の看護実践能力の向上が急務であるが、高校までの学習方法(科目の暗記)しか修得できていない学生にとって知識を統合して事象を正しく判断することは極めて難しい。そのため、学生の修得した知識の統合を図る手段が必要であり、本研究は臨床判断のモデルを用いて、より学生の活用し易いモデルへと改変したものを、学生に実際に使ってもらい、その効果を明らかにしたものである(論文2)</p> <p>●慢性疾患を抱える子どものしつけ</p> <p>子どもの養育に関する知識と技術の修得は、子育て不安が社会問題となっている現状において看護職に求められる能力である。子どもの育児に関する基本的な知識をまとめ、看護に応用できるようにしたものである(著書1)</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 看護学生が捉える「甘え」について, 九州・沖縄小児看護教育研究会誌、第20号、2019 2. 学生の分析力向上におけるアセスメント・モデルの効果, 九州・沖縄小児看護教育研究会誌、第20号、2019 <p>著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 幼児期の子どもの成長・発達と看護, 小児の成長と発達、P99~133、メディカ出版、2021 2. アトピー性皮膚炎をもつ子どもと家族, 場面で学ぶ小児看護学(改訂版) P139-152、メディカ出版、2019 3. 子どもの成長・発達. 場面で学ぶ小児看護学(改訂版) p36-53、2019 	

所属・職位	医学部医学科循環器内科・臨床検査診断学講座・准教授	
氏名	油布 邦夫 (Yufu Kunio)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2008年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	循環器内科学
研究キーワード	病院前12誘導心電図・血管内皮機能・冠動脈インターベンション・心臓再同期療法・構造的疾患・心筋梗塞




<p>研究内容</p> <p>急性心筋梗塞患者の経皮的冠動脈インターベンション(PCI)で、予後を左右するDoor to balloon time (DTBT:患者の病院到着から冠動脈閉塞の再疎通までの時間)をいかに短縮するかが重要で、事実大分県では全国に先駆け、救急車に12誘導心電計を搭載して搬送前に病院へ伝送するクラウド心電図伝送システムを導入。</p> <p>実際にこのシステムを活用し、DTBTが平均96分から70分へ約26分短縮したことを図1のように論文報告した(Yufu K et al. Circulation Reports. 2019)。図2は現在のクラウド心電図伝送システムの分布であり以下の研究を行っている。</p> <p>Ⅰ. DTBTの調査…DTBTをC-ECGシステム群とコントロール群で比較。</p> <p>Ⅱ. 至適患者搬送の調査…心電図伝送後の患者の流れの調査。従来搬送と比較。</p> <p>Ⅲ. 都市部と辺域地域の調査…PCI施設の密集する都市部と遠隔地域で同システムの有効性の相違を群間比較。</p> <p>Ⅳ. 時間帯による有効性の差異の調査…日直帯と当直帯による伝送効果の差異を群間比較。</p> <p>Ⅴ. 治療効果、医療経済的効果を算出…同システムで治療された患者の予後・入院費用・人件費・医療費などを算出。</p>	 <p>図1. クラウド心電図システムによるDoor to balloon timeの短縮</p>  <p>図2. 大分県クラウド心電図伝送システムの分布 □ システム参加地域 救急車にシステム搭載 ○ PCI可能施設 ● 地域中核病院 (非PCI施設)</p>
<p>研究業績・アピールポイント</p> <p>・Yufu K, Takahashi N, et al. Outcome of Patients With Cardiac Sarcoidosis Who Received Cardiac Resynchronization Therapy: Comparison With Dilated Cardiomyopathy Patients. J Cardiovasc Electrophysiol. 2017;28:177-181. (Impact Factor:2.424) : 主要心脳血管イベントをみると、心サルコイドーシス群45%に対し拡張型心筋症群14%と有意に心サルコイドーシスにイベントが多かった。このため心サルコイドーシスの重症の慢性心不全患者に心臓再同期療法を考慮する際は適応に十分な検討を加えるべきである。</p> <p>・Yufu K, Takahashi N, et al. Impact of Mobile Cloud Electrocardiography System on Door-to-Balloon Time in Patients With Acute Coronary. Circulation Reports. 2019;1:241-247. (Impact Factor:未) : 急性心筋梗塞に対する緊急経皮的冠動脈インターベンション (PCI) において救急搬送後冠動脈を再開通させるまでの時間、すなわちドアーバルーン時間を短縮することは重要である。大分県での全国有数と思われるクラウド心電図システムの緊急PCIに対する効果は明白である。</p> <p>・Tanino T, Yufu K, et al. Proposal criteria of paradoxical low-flow low-gradient aortic stenosis for predicting prognosis in patients undergoing transcatheter aortic valve implantation. Heart Vessels. 2021 Nov 25. doi: 10.1007/s00380-021-01992-y. : 重症大動脈弁狭窄症に対する経カテーテル的大動脈弁留置術が発展してきている。奇異性低灌流低圧較差大動脈弁狭窄症は術後も予後不良であるがこれを予測する評価法を提案。</p>	

所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座（成人看護学）・准教授	
氏名	脇 幸子 (Waki Sachiko)	
取得学位	博士（看護学）、大阪大学、2016年9月	
SDGs目標	     	

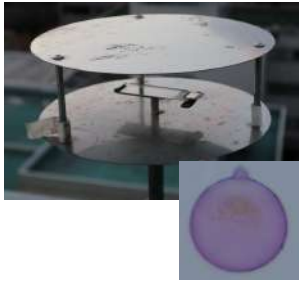
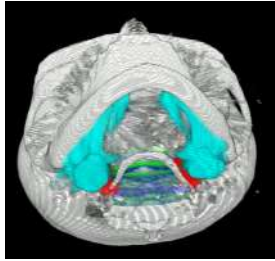
研究分野	看護学
研究キーワード	慢性疾患看護、セルフケア支援、チーム医療、地域医療、看護教育学、看護生涯学習
研究内容	<p>●【研究1】慢性疾患(糖尿病)を持つ人のセルフケア支援に関する研究(研究活動①～④)</p> <p>糖尿病重症化予防のためのセルフケア支援では、単に食事や運動などのセルフケア方法や知識だけでなく、自分自身で自分のセルフケア状況を自己評価できる力を育成することが重要であるが、病院での支援だけでは効率的ではない。そこで、糖尿病・予備軍のある人と糖尿病療養指導士との相互作用の場である、患者会活動や地域活動(就労支援)において、先行研究で示唆された『糖尿病をもつ人のセルフケア自己評価を促す支援のガイドライン』やACP概念を活用したセルフケア支援を行い、患者会や地域との協働によるセルフケアpower upプログラムの有効性を探究している。(加えて、慢性疾患患者の防災プロジェクト参加)</p> <p>●【研究2】研究1と連動：チーム医療、地域医療、多職種連携に関する研究(研究活動⑤)</p> <p>大分県での糖尿病医療と地域連携システムの検討として、情報提供・共有、相談導入など両者が共に活用できる資源としてタッチパネル式コンピュータ：アンドロイドを作製した。</p> <p>●【研究3】研究1・2と連動：介護老人保健施設における糖尿病チーム医療・介護モデルの開発(研究活動⑥)</p> <p>介護老人保健施設における糖尿病チーム医療のモデル開発とアプリ作製・糖尿病療養指導士の介入による糖尿病チーム医療・介護の実践</p> <p>●キャリア開発・看護学教育でのVR教材開発</p>
研究業績・アピールポイント	<p>①基盤C(平成19・20年度)「外来看護での糖尿病患者のセルフケア自己評価の試みと自己決定能力向上との関連」</p> <p>②基盤C(平成22～24年度)「タッチパネル式情報提供コンピュータを活用した糖尿病患者のセルフケア自己評価の試み」</p> <p>③基盤C(平成25～28年度)「糖尿病患者のセルフケア自己評価支援ツールとCDE看護師育成プログラムの開発」</p> <p>* Structural model of self-care agency in patients with diabetes: A path analysis of the Instrument of Diabetes Self-Care Agency and body self-awareness, Sachiko WAKI, etc, <i>Japan Journal of Nursing Science</i> (2016.5.25) doi:10.1111/jjns.12127</p> <p>* Insights into self-care behavior of patients with diabetes: support using a computerized self-evaluation system, Sachiko Waki, etc, <i>Journal of Nursing Education and Practice</i> 2016, Vol. 6, No. 10, 51-64. DOI: 10.5430/jnep.v6n10p51 URL: http://dx.doi.org/10.5430/jnep.v6n10p51</p> <p>④基盤C(平成30～令和4年度)「糖尿病療養指導士と患者会の協働によるセルフケアpower upプログラムの有効性」</p> <p>⑤萌芽(平成13～14年度)分担「地域における糖尿病患者のためのチーム医療の現状と連携システムの構築」地域貢献特別支援事業費(平成15～16年度)「生活習慣病等へき地医療対策支援事業 糖尿病管理のための情報の共有化：糖尿病管理のための情報の共有化」文科省概算要求事業(平成19・20年度) 分担「ICTを活用した双方向性型地域再生モデル事業」</p> <p>⑥基盤C分担(平成30～令和4年度)「介護老人保健施設における糖尿病チーム医療・介護モデルの開発」(平成26～30年度)「介護老人保健施設における糖尿病療養指導士の介入による糖尿病チーム医療・介護の実践」</p>

医学部

所属・職位	医学部医学科心臓血管外科学講座・准教授	
氏名	和田 朋之 (Wada Tomoyuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1999年3月	
SDGs目標	   	
研究分野	成人心臓病外科疾患	
研究キーワード	自己心膜心臓弁膜再建術、SHD (Structure heart disease)、大動脈疾患	
研究内容	<p>弓部大動脈瘤ステントグラフト治療、In situ fenestration法の有用性</p> <p>J-ORCHESTRA Study (J-Open caRdiac aortic arCH disEase replacement Surgical TheRApy Study) (本邦における弓部大動脈疾患に対する術式を評価するため、オープンステントグラフト術並びに、従来の治療法である弓部全置換術を対象とする臨床研究)</p> <p>大動脈組織のバイオバンク構想を用いた国際間共同研究 (患者からの血管および血管周囲の組織と血液サンプルで構成される生体材料バンクの設立意義は、血管疾患の病態機構の解明である。)</p> <p>破裂性腹部大動脈瘤に対する開腹手術とステントグラフト内挿術の治療選択 に関する全国多施設観察研究</p> <p>モバイル端末を活用した救急医療支援システムの有用性評価 (スマートフォンアプリを用いた実用性評価研究)</p> <p>自己心膜強度測定に関する検討</p> <p>体外式膜型人工肺インスパイア臨床使用実態調査</p> <p>カテーテル塞栓法による僧帽弁置換術後弁輪部逆流の制御に関する研究</p> <p>バイオチューブを用いた末梢血行再建術の有用性の検討</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>自己心膜による大動脈弁再建術の多施設共同研究体制とデータベースの確立 (大動脈弁再建術 (AVNEO) 専用の登録システムを構築する、多施設共同研究)</p> <p>自己心膜を用いた大動脈弁再建術の安全性と有効性に関する多施設共同遠隔研究</p> <p>大動脈弁疾患に対する自己心膜を用いた大動脈弁形成術</p> <p>高難度医療申請 「経皮的僧帽弁クリップ術 (経皮的僧帽弁接合不全修復術、マイトラクリップ手術)」 「胸腔鏡下左心耳切除術 (WOLF-OHTSUKA法: WO法)」 「大動脈弁疾患に対する自己心膜を用いた大動脈弁形成術」 「経カテーテル大動脈弁留置術TAVI」</p>	

所属・職位	医学部医学科耳鼻咽喉科学講座・准教授	
氏名	渡邊 哲生 (Watanabe Tetsuo)	
取得学位	医学博士、大分医科大学、1990年9月	
SDGs目標	 	

研究分野	耳鼻咽喉科頭頸部外科学
研究キーワード	①アレルギー性鼻炎、スギ花粉、②深頸部感染症、深頸部解剖

研究内容	<p>①スギ花粉情報と飛散予測</p> <p>1990年より挟間キャンパス屋上にてスギ花粉飛散数の計測を行なっている。スギ花粉情報は毎年のスギ花粉飛散期に大分県医師会と協力して花粉情報を提供している。飛散予測は総飛散数、飛散開始、飛散期の日々の飛散予測があるが、現在は日々の飛散予測にAIの活用も試みている。そのほか、秋にも少数ながらスギ花粉が飛散するが、飛散予測の一助とするため、秋期の飛散数計測も行なっている。</p> <p>②深頸部感染症の基礎と臨床</p> <p>基礎としては頸部の筋膜と間隙からなる複雑な解剖を理解しやすくするため、正常CT画像からの3Dモデルの作成を試みている。</p> <p>臨床としては最も症例が多い扁桃周囲膿瘍の病態解明、その他の膿瘍については予後を規定する因子の検討を行なっている。</p>	 
------	---	--

研究業績・アピールポイント	<p>論文</p> <p>①スギ花粉情報と飛散予測</p> <p>1) 渡辺哲生、末永智、松下太、他：大分大学医学部(大分県由布市挾間町)におけるスギ花粉飛散予測 アレルギー 2005; 54: 1272-1278.</p> <p>2) 渡辺哲生、鈴木正志：スギ花粉飛散数の累積曲線の検討 耳鼻咽喉科免疫アレルギー 2010; 28: 297-300.</p> <p>3) 渡辺哲生、鈴木正志：大分大学医学部(大分県由布市挾間町)における秋期スギ花粉飛散状況の検討 アレルギー 2014; 63: 920-927.</p> <p>4) 渡辺哲生、鈴木正志:大分大学医学部(大分県由布市挾間町)におけるスギ花粉飛散予測の検証 日耳鼻 2016; 119: 1210-1219.</p> <p>5) 渡辺哲生、鈴木正志：大分大学医学部におけるダーラム式計測器と自動計測器によるスギ・ヒノキ花粉飛散数の比較と分析 耳鼻咽喉科免疫アレルギー 2017; 35: 271-277.</p> <p>6) 渡辺哲生、鈴木正志：スギ花粉飛散と比較したヒノキ花粉飛散状況の検討 日耳鼻 2020;123:139-144.</p> <p>②深頸部感染症、深頸部解剖</p> <p>1) 渡辺哲生、鈴木正志：扁桃周囲膿瘍症例の検出菌についての検討。口咽科2005; 17: 345-352.</p> <p>2) Watanabe T, Suzuki M: Bilateral peritonsillar abscesses: Our experience and clinical features. Ann Otol Rhinol Laryngol 2010; 119: 662-666.</p> <p>3) 野田加奈子、児玉悟、野田謙二、渡辺哲生、鈴木正志：深頸部感染症299例の臨床的検討。日耳鼻2010; 113: 898-906.</p> <p>4) 渡辺哲生：解剖から見た扁桃周囲膿瘍・深頸部膿瘍。口咽科2016; 29: 9-17.</p>
---------------	--

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部


医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等



所属・職位	医学部医学科医学生物学講座・講師	
氏名	池田 八果穂 (Ikeda Yatsukaho)	
取得学位	博士 (理学)、筑波大学、2001年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	動物系統分類学
研究キーワード	進化、発生、線虫、昆虫
研究内容	<p>●動物系統分類学的な研究</p> <p>昆虫類や線虫類についての系統分類学的な研究を行っている。原始的な昆虫であるコムシ目のウロコナガコムシ<i>Lepidocampa weberii</i>については胚発生の詳細な観察を行い、昆虫の基本的体制に関わる特徴、特に背器の形成過程を明らかにした(論文1.)。線虫類についてはアマガエルに寄生した新属新種<i>Paracosmocercella rosettae</i>を記載(論文3.)、また分子系統学的手法により蟯虫や糞線虫の分子同定法の開発に携わってきた(論文2, 4.)。</p> <p>●モデル線虫を用いた薬剤評価システムの開発</p> <p>線虫の一種である<i>Caenorhabditis elegans</i>にRNA干渉法を使って特定の遺伝子をノックダウンすると表現型に異常を示す線虫が得られる。これをモデル線虫として様々な化合物を加えて表現型の回復が起きる化合物を探索し、その化合物が作用する標的を同定するといった手法によって、薬剤の生体評価システムを構築することを目指している。Hippo pathwayは細胞や臓器の大きさ、腫瘍の抑制、組織の再生など多くの生命現象に重要な働きを担っているシグナル伝達経路であり、ヒトや<i>C. elegans</i>を含む多くの動物で進化的に保存されている。このHippo pathwayを構成するコンポーネント遺伝子をノックダウンしたモデル線虫を作成することで、発生や生理的機能の解明、さらにはガンや再生医療における創薬などに貢献できるものと考えられる。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 2001年、Y. Ikeda, R. Machida. Embryogenesis of the dipluran <i>Lepidocampa weberii</i> Oudemans (Hexapoda: Diplura, Campodeidae): formation of dorsal organ and related phenomena. <i>Journal of Morphology</i> 249, no. 3: 242-51. 2006年、T. Nakano, M. Okamoto, Y. Ikeda, H. Hasegawa. Mitochondrial cytochrome c oxidase subunit 1 gene and nuclear rDNA regions of <i>Enterobius vermicularis</i> parasitic in captive chimpanzees with special reference to its relationship with pinworms in humans. <i>Parasitology Research</i> 100, no. 1: 51-57. 2007年、H. Hasegawa, Y. Ikeda. <i>Paracosmocercella rosettae</i> n. gen. et n. sp. (Nematoda: Cosmocercidae: Cosmocercidae) collected from the Japanese tree frog, <i>Hyla japonica</i> (Anura: Hylidae), in Japan. <i>Journal of Parasitology</i> 93, no. 4: 884-88. 2009年、H. Hasegawa, S. Hayashida, Y. Ikeda, H. Sato. Hyper-variable regions in 18S rDNA of <i>Strongyloides</i> spp. as markers for species-specific diagnosis. <i>Parasitology Research</i> 104, no. 4: 869-74.

所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座 母性看護学領域・講師	
氏名	猪俣 理恵 (Inomata Rie)	
取得学位	修士 (助産学)、The University of Aberdeen、2006年11月	
SDGs目標	   	
研究分野	母性看護学	
研究キーワード	Women centred care, Shared decision making, Birthplace choice	
研究内容	<p>●母体搬送の経験がその後の助産業務に与える影響についての研究</p> <p>スコットランドでは、助産師が正常出産の主たるケアの担い手として認識されており、ハイリスク出産の担い手である産科医師との分業が確立している。またNHSという包括的医療体制のもと、女性や家族がどこで誰と出産をするかという選択が尊重されている。しかし、産科医療機関の集約化が進み、地域の国営助産所 (Midwifery-led Unit) で出産する場合、正常から逸脱した際の母体搬送に困難が生じていた。そこで、助産師たちの母体搬送の経験についてインタビューを行い、その後の助産業務にどのような影響を与えているかを質的に分析した。</p> <p>結果は、スコットランドという雪深く、離島を有する地域性から、搬送に有する時間やタイミングは計りにくい中で、女性や家族の安全とともに希望に沿った分娩ができるようにするため、国営助産所の助産師たちは常に孤独と葛藤を抱えながら業務していることが明らかになった。また、同じ助産師という職種であっても、搬送先 (病院) の助産師に理解してもらえないことも多く、そのことが円滑な協力体制を阻害する要因になっていることも分かった。母体搬送の経験から、国営助産所では助産師たちが定期的に研修会やシュミレーショントレーニングを主体的に行い、安全に備える体制づくりをしていることが明らかになった。更に、NHSという組織下での搬送体制であるため、病院と国営助産所の助産師たちの相互研修の必要性などが示唆された。(学位論文)</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●学位論文 2005年 An Exploration of Midwives' Experiences of Maternal Transport: What Are The Impact of These Experiences on Their Future Practice?</p> <p>●共著論文 2015年 妊婦健康診査・分娩施設までの所要時間と施設の選択・転院理由との関連 日本母子看護学会誌</p> <p>2014年 分娩施設に関する情報の活用についての調査 日本母子看護学会誌</p> <p>2011年 患者や家族が安心して退院できるような継続支援のあり方の検討 日本看護学会論文集</p>	

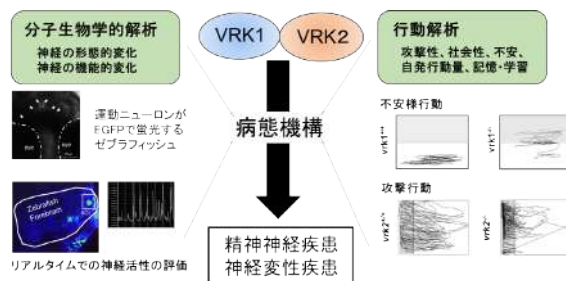
所属・職位	医学部看護学科基盤看護学講座精神看護学領域・講師	
氏名	岩本 祐一 (Iwamoto Yuichi)	
取得学位	修士 (看護学)、熊本大学、2013年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	精神看護学
研究キーワード	精神障害者 看護実践 退院支援 向精神薬
研究内容	<p>●精神科入院中の患者の自殺に関する看護実践の研究 (論文1.)</p> <p>精神科看護師が経験した慢性期統合失調症患者の予測困難な自殺から、入院中における慢性期統合失調症患者の自殺のリスク判断に必要な視点を明らかにすることを目的として研究を行った。本研究により、精神科看護師が【患者-看護師関係の長期化に伴う弊害】を中核とした慢性期統合失調症患者の自殺のリスク判断に必要な視点をもつ事で、慢性期統合失調症患者の自殺の予防や効果的な支援に繋がるとことが考えられた。</p> <p>●精神科長期入院患者に対する看護師による退院支援に関する研究 (論文2.)</p> <p>精神看護専門看護師 (以下CNS) が行なう精神科長期入院患者の退院に向けた支援を明らかにすることを目的として研究を行った。本研究では、1年以上入院しているケア困難な精神障害者への支援および治療チームへのコンサルテーションを行っている精神看護専門看護師を対象として支援に関するデータを得た。データの分析にはGTAを用いて質的に分析を行った。その結果CNSは病棟看護師とケアを振り返り、提供できているケアとできていないケアを明確にしていた。また、患者への介入の糸口が見えない病棟看護師とその患者との治療的な関係を構築していた。さらには、長期入院患者が新しい試みを行う際に動機づけを明確にする事や、患者家族に対しての支援を行っていた。</p> <p>●一般科看護師のためのBZD系薬剤漸減時の離脱症状アセスメントツールの開発</p> <p>本研究の目的は、向精神薬であるベンゾジアゼピン系薬剤 (以下、BZD) の漸減時に見られる反跳性不安の視点を踏まえ、精神・身体・知覚症状に焦点を当てた一般科看護師のための離脱症状アセスメントツールを開発することである。本研究により、BZD漸減を促進し、さらには向精神薬の適正使用とBZDを使用する患者のQOL向上にむけての新たな提言につながると考えている。まずはBZD漸減時の看護アセスメントの実態調査を行い、アセスメント項目を抽出した。その後、予備的調査を経て看護実践自己評価尺度を開発した。現在、大規模調査にて尺度の信頼性・妥当性を検証中である。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>これまで、精神科領域における看護師の実践に関する研究を行い、公表してきた。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 岩本祐一, 藤野成美. 入院中における慢性期統合失調症患者の自殺のリスク判断に必要な精神科看護師の視点. 日本精神保健看護学会誌.29(1), 60-69, 2020. 岩本祐一. 長期入院患者への退院支援における精神科看護師の支援 ~精神看護専門看護師の立場から~. 日本精神保健看護学会誌 26(2), 21-30, 2017. <p>●受賞</p> <p>第9回 中塚医学賞 (大分大学医学研究表彰), 2019.</p>

所属・職位	医学部・講師	
氏名	梅田 涼平 (Umeda Ryohei)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2022年3月	
SDGs目標		

研究分野	生理学、神経科学、病態生理学、行動生理学
研究キーワード	生理機能解析、in vivoモデル、遺伝子改変ゼブラフィッシュ、病態モデル、行動解析、形態学的解析

研究内容	<p>●VRK familyの神経変性疾患、精神神経疾患における病態機構の解明と創薬基盤の開発</p> <p>Vaccinia related kinase (VRK) familyは主に細胞増殖が盛んな細胞に発現し、細胞に対する様々な刺激に応答して細胞の増殖や細胞周期の調節に関与する遺伝子群である。その中でもVRK1、VRK2はそれぞれ神経変性疾患、精神神経疾患と関連が深いと報告されている。これまでにVRK familyの細胞内における作用は報告されているものの、生体内での役割はほとんど明らかになっていない。</p> <p>VRK familyに関連の深いとされる神経変性疾患や精神神経疾患は、中枢神経系や運動神経の異常から運動機能障害や精神症状を呈する疾患群であるが、その病態メカニズムは解明されておらず、治療法やバイオマーカーはいまだ同定されていない。我々はVRK familyの生理機能を解明することでこれらの疾患の病態機構の一部を明らかにし、創薬基盤を確立することを目的に研究を進めている。(論文2.)</p> <p>上記のVRK familyの解析にあたって、ゼブラフィッシュを用いてVRK familyの遺伝子改変モデルを樹立し、表現型解析においてモデル動物の情動の変化を評価するために行動実験（自発的運動量、不安様行動、攻撃行動、社会性行動、学習・記憶行動）を行っている。さらに、異常な行動がどのような病態メカニズムによって惹起されるのかを解明するために、分子生物学的手法およびプロモーター下で蛍光を発する物質（EGFP、Kaede、GCaMP、GRABセンサーなど）を発現させて神経細胞の形態を解析する形態学的な手法を用いて解析し、その知見をもとに、治療方法の開発の基盤となる病態基盤の確立を目指している。</p>
------	---



研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・ 遺伝子改変ゼブラフィッシュ、行動実験・解析、生理学的解析、形態学的解析 ・ 神経伝達物質可視化ゼブラフィッシュモデルの作製、解析 <p>【代表論文】 *責任著者</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Umeda R, *Tokumaru O et al. <i>J Clin Biochem Nutr.</i> 64(1): 20-26. 2019. 2. Umeda R, *Hanada R et al. <i>Genes Cells.</i> 27(4): 254-265. 2022. <p>【ホームページ】 http://www.med.oita-u.ac.jp/seiri1/</p>
---------------	--

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院




理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科皮膚科学講座・講師	
氏名	後藤 瑞生 (Goto Mizuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2006年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	皮膚科学
研究キーワード	iPS細胞、創傷治癒
研究内容	<p>iPS細胞は様々な臓器の細胞に分化する細胞で、再生医療への利用が期待されている。我々はヒトiPS細胞から誘導した細胞を用いて、創傷治癒に対する再生医療として利用する計画を検討中である(研究業績3)。そして、iPS細胞のもう一つの利点として、今まで採取が困難であった患者の疾患臓器の細胞をiPS細胞から作製し、創薬研究に利用できるということが挙げられる。我々も難治性の皮膚疾患の患者より作製したiPS細胞を使った研究を行っている。具体的には、患者のiPS細胞から皮膚細胞を作製することに加えて、iPS細胞から皮膚細胞などへの分化過程の観察も詳細に行う。分化してしまった細胞の研究内容は、今まで行われていた臨床研究の内容とあまり変わらないが、細胞の分化過程において問題があれば、その点を解析することにより、その疾患の新たな原因を発見できる可能性がある。また、その原因に対する治療方法は今までの既存の治療方法とは全く異なったものになりえる。</p> <p>関連リンク：http://www.med.oita-u.ac.jp/dermatology/research_ips.html</p>
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> 1. Yokouchi Y, Suzuki S, Ohtsuki N, Yamamoto K, Noguchi S, Soejima Y, <u>Goto M</u>, Ishioka K, Nakamura I, Suzuki S, Takenoshita S, Era T. Rapid repair of human disease-specific single-nucleotide variants by One-SHOT genome editing. Sci Rep, 2020 Aug 18;10(1):13927. 2. Matsuda-Hirose H, Yamate T, <u>Goto M</u>, Katoh A, Kouji H, Yamamoto Y, Sakai T, Uemura N, Kobayashi T, Hatano Y. Selective Inhibition of β-Catenin/Co-Activator Cyclic AMP Response Element-Binding Protein-Dependent Signaling Prevents the Emergence of Hapten-Induced Atopic Dermatitis-Like Dermatitis. Ann Dermatol, 2019 Dec;31(6):631-639. 3. Eto S, <u>Goto M</u>, Soga M, Kaneko Y, Uehara Y, Mizuta H, Era T. Mesenchymal stem cells derived from human iPS cells via mesoderm and neuroepithelium have different features and therapeutic potentials. Plos One, 2018 Jul 25;13(7):e0200790. 4. Sato T, <u>Goto M</u>, Takeo N, Hatano Y. Case of generalized morphea with the manifestation of diffuse systemic cutaneous sclerosis without sclerodactyly. J Dermatol, 2018 May;45(5):e100-e101. 5. Wang Z, Nakamura K, Jinnin M, Kudo H, <u>Goto M</u>, Era T, Kira T, Nakashima T, Fukushima S, Ihn H. Establishment and gene expression analysis of disease-derived induced pluripotent stem cells of scleroderma. J Dermatol Sci, 2016; 84(2): 186-196. 6. Tsuchisaka A, Numata S, Teye K, Natsuaki Y, Kawakami T, Takeda Y, Wang W, Ishikawa K, <u>Goto M</u>, Koga H, Sogame R, Ishii N, Takamori S, Hoshino T, Brandt O, Pas HH, Fujiwara S, Hashimoto T. Epiplakin is a paraneoplastic pemphigus autoantigen and related to bronchiolitis obliterans in Japanese patients. J Invest Dermatol, 2016, 136(2), 399-408. 7. <u>Goto M</u>, Sumiyoshi H, Sakai T, Fassler R, Ohashi S, Adachi E, Yoshioka H, Fujiwara S. Elimination of epiplakin by gene targeting results in acceleration of keratinocyte migration in mice. Mol Cell Biol, 2006; 26(2): 548-558

所属・職位	医学部看護学科基盤看護学講座・講師	
氏名	佐藤 祐貴子 (Sato Yukiko)	
取得学位	修士 (看護学)、大分大学、2015年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	看護学
研究キーワード	ポジショニング、安楽、看護教育

研究内容	<p>●安楽なポジショニングに関する研究</p> <p>看護においてポジショニングは、身体を自力で動かすことのできない患者やクライアントの安楽を保持するため、将来的な観点も含めた日常生活行動遂行のための姿勢の調整を行う基本的な看護技術の一つである。患者のリハビリテーションや日常生活援助において、生じる身体背面への摩擦力を軽減する方法として圧取り除きグローブを用いた圧抜きが用いられる。圧取り除きグローブの普及については、ポジショニングの道具として幅広く病床や在宅で活用され始めて概ね5～6年であり、優れた新たな道具がエビデンスに沿った看護技術として普及されることを目指す。これまで、同一体位を持続することによる苦痛を時間の観点から明らかにしている(論文1,論文2)(科研費; 圧取り除きグローブを用いた同一体位における安楽なポジショニングケアの開発, 平成28年～令和元年)。現在は、体軸の観点からそのエビデンスを明らかにすることに取り組んでいる(科研費; 安楽なポジショニングケアの開発: 圧抜き方法のエビデンスの検証, 令和3年～令和6年)。</p> <p>●コルブの経験学習理論を用いた初学者における看護技術教育の取り組み</p> <p>実践を伴う科学である看護において、経験、省察、思考、行動、という要素を持つコルブの経験学習理論は有用な学習理論である。看護技術の初学者が、初めて学ぶ看護技術の科目において、この基本的な学修プロセスを踏んで学ぶ教育効果について検討している。</p> <p>●自然災害に対する平時及び発生時における地域住民の災害時健康危機管理向上のための準備教育プログラムの開発</p> <p>地域住民の中でも特に、慢性疾患患者・高齢者という災害脆弱者が、災害が発生しても自らの治療や療養を継続し安心して安全に生活を継続していくことができるよう、準備教育プログラムの開発や、教材開発、避難所におけるDXの活用について検討している。</p>
研究業績・アピールポイント	<p>安楽なポジショニングに関する研究内容を主軸として活動を行っており、業績については以下の通りである。</p> <p>●論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 佐藤 祐貴子, 原田 千鶴. 背部拳上背臥位の2 時間までの経時的な苦痛に関する研究. 日本看護技術学会誌, 17: 1-10, 2018. 査読: 有 2. Sato Yukiko, Tokumaru Osamu, Eshima Nobuoki, Yokoi Isao, Harada Chizuru. Physical pain and muscle activity during hospital bed rest. the 92nd Annual Meeting of The Physiological Society of Japan, 2015. <p>●著書</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 佐藤 祐貴子. ギャッチアップしたあと圧解除するのは、今や常識. 月刊ナーシング 37(5): 87-88, 学研メディカル秀潤社, 2017. <p>●受賞</p> <p>中塚医賞看護学専門分野受賞 (2016年10月)</p>

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科医学英語教育学講座・講師	
氏名	Chidlow Sean Michael (チドウロウ ショーン マイケル)	
取得学位	修士 (英文学)、Queen's University、1993年10月	
SDGs目標	 	
研究分野	医療人文学	
研究キーワード	医療人文学、EMP	
研究内容	<p>●医療人文学データベースの開発</p> <p>医療を学ぶ学生や医療従事者が医療に関する文化や医療用語を学ぶことができる本や映画を英語と日本語の2か国語で紹介するデータベース「Medical Humanities Database Japan」を構築した(論文1・論文2・外部資金：科研費基盤研究(C) 24520163)。 ※関連リンク：http://www.medicalhumanitiesjapan.com.</p> <p>●英語医療面接の評価方法に関する研究および英語医療面接自動採点システムの開発</p> <p>医療従事者の英語力育成のために、英語医療面接の評価方法に関して研究し、これまでに以下の成果をあげてきた。</p> <p>①Can-do listを用いて英語医療面接のpeer evaluationを実施した結果、英語力に関する評価項目(発音・流暢さ)および発話の適性さ(relevance)に関しては、教員とpeer evaluationの評価の間に大きなギャップが見られ、学生間の評価の信頼性は低く、教師の評価への依存性の高さが明らかになった(学会発表1)。</p> <p>②コロナ禍で英語医療面接をZoomとMoodleを用いて実施し、オンライン実施上の利点を明らかにした(学会発表2)。</p> <p>現在は、これまでの研究をもとに、英語医療面接における英語スピーキング学習・自動評価システムの開発を行っている。</p> <p>※関連リンク： http://oitauniv-soran.ad.oita-u.ac.jp/profile/ja.a212ee11f9518446520e17560c007669.html</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>●論文</p> <p>1. 2013年、Chidlow, S. 「Medical Humanities Database Japan: Motivating Medical Students and Professionals to Read English Literature for Pleasure」 <i>Journal of Medical English Education Vol. 12(3)</i>, pp. 56-62.</p> <p>2. 2014年、Chidlow, S. 「Rationalizing the Use of Graphic Novels for EMP Education」 <i>大分大学高等教育開発センター紀要 (6)</i>, pp. 93-99.</p> <p>●学会発表</p> <p>1. 2018年、Chidlow, S. & Oshita, H. 「Creating an effective peer evaluation Can-do list for medical interviews.」 第21回日本医学英語教育学会学術集会.</p> <p>2. 2021年、Chidlow, S. & Oshita, H. 「Evaluating student performance in online medical interviews in English with simulated patients.」 第24回日本医学英語教育学会学術集会.</p>	

所属・職位	医学部附属臨床医工学センター・講師（診療教授）	
氏名	友 雅司 (Tomo Tadashi)	
取得学位	博士（医学）、大分医科大学、2000年9月	
SDGs目標	  	
研究分野	人工臓器学 代謝系	
研究キーワード	人工腎臓、尿毒症性溶質、腹膜保護	
研究内容	<p>カスケード型尿毒症性溶質の除去に関する研究 人工腎臓に関して従来の蓄積型毒素のみならずカスケード型毒素の除去できるモダリティの開発研究を行っている。</p> <p>日本国特許：金成泰,友 雅司,山下明泰 特許第6889504号(P6889504)</p> <p>腹膜透析における腹膜劣化予防に関する研究を行っている。</p> <p>国際特許:Agent for inhibiting peritoneal membrane thickening:Patent No US 8,842,262,B2: International Filing Date 30.03.2010</p>	
研究業績・アピールポイント	<p><u>Tomo T</u>, Okabe E, Yamamoto T, Namoto S, Iwashita T, Matsuyama K, Kadota J, Nasu M. Synergistic cytotoxicity of acidity and 3,4-Dideoxyglucosone-3-ene under the existence of lactate in peritoneal dialysis fluid. Ther Apher Dial.:9(2):182-7. 2005</p> <p>*<u>Tomo T</u>, Okabe E, Matsuyama K, Iwashita T, Yufu K, Nasu M. The effect of peritoneal rest in combination therapy of peritoneal dialysis and hemodialysis: using the cultured human peritoneal mesothelial cell model. J Artif Organs. 2005;8(2):125-9.</p>	

役員

大学院教育
教育学部
教育学研究科

経済学部





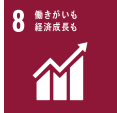



医学部

医学部
附属病院





理工学部


福祉健康科学部

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科解剖学講座・講師	
氏名	三浦 真弘 (Miura Masahiro)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1994年6月	
SDGs目標	      	






研究分野	髄液循環生理学、リンパ学、区域麻酔、がん生物学、酵素組織化学、微細構造解析学
研究キーワード	Neurofluid、髄液漏出症、癌リンパ性転移、区域麻酔、皮下浮腫間質、脈管外通路
研究内容	<p>●AMED課題研究：「脳脊髄液減少症の病態生理と診断法の開発」（2020-2023年）</p> <p>①椎骨動脈神経叢-交感神経成分による髄膜リンパ系-髄液圧調節機構の解明（代表）</p> <p>②特発性低髄液圧症候群SIHに伴う慢性硬膜外血腫における血腫被膜の組織学的検討</p> <p>1.2. 三浦, 脊椎脊髄28(6)2015,脊椎脊髄33(9),2020. 3.三浦, 医学の歩み270(13)2019</p> <p>●科研費課題研究(1) (基盤B・基盤C) (2011-2018年, 2022-2024年) (脳神経外科)</p> <p>①ヒト脳髄膜・脊髄神経鞘内-Neurofluid排液systemの微細構造学的・MRI解析(代表)</p> <p>②経リンパCSF側副吸収路における正常・異常CSF漏出機序の解明とその動態解析(代表)</p> <p>③MRIを用いた脳脊髄液及び間質液の動態解析 (Gadolinium髄注-MRI解析) (分担)</p> <p>1.三浦, 画像診断38(3)2018. 2.三浦, 医学の歩み270(13)2019 3. Miura M, SRA.41(10), 2020</p> <p>●科研費課題研究(2) (基盤C) (2017-2019年, 2020-2022年) (解剖学・麻酔科学)</p> <p>新たな超音波ガイド下各種神経ブロック法の開発と解剖学的evidence解明 (代表)</p> <p>●厚労省・科研費課題(3)：腹膜偽粘液腫の本邦における発生頻度・病態の解明・治療法の開発。(分担)</p> <p>(2011～2014年)、* 腹膜播種性転移機構の酵素組織化学解析 (代表)</p> <p>1.三浦, 腹膜播種の治療. 2017 (腹膜リンパ系) 2. Yonemura & Miura M, et al. JCM.11, 2022</p> <p>●共同研究1 (形成外科)：皮下慢性リンパ浮腫の診断と治療法 (間質変化・液性通路閉塞機序) (代表)</p> <p>1. Miura M, Surgical Treatment for Lymphedema, 86-102, 2017(Person shobo).</p> <p>●共同研究2 (乳腺外科) (代表) 乳癌センチネルリンパ節の血管支配-形態学的解析</p> <p>乳腺リンパ排液経路 1. Miura M, SRA.41(10), 2019. 2. Abe M, Miura M, Anat.Sci. Int.96, 2021</p> <p>●共同研究3 (麻酔科学)：中腋窩線で穿刺するM-TAPAの効果範囲に関する解剖学的検討</p>
研究業績・アピールポイント	<p>Neurofluid循環、髄液漏出症・iNPHの発症機序、脈管外通路、癌腫リンパ行性転移機構、神経ブロック法開発、腱・靭帯線維束解析、皮下浮腫発生機序に関わる臨床解剖的研究に従事</p> <p>●論文：1. 2022年, Miura M, et al. Description of the latest neurofluid absorption mechanisms. JANS. 2. 2022年, Uchino T, Miura M, et al. Comparison of three nerve block techniques for injectate spread into the obturator canal. J. Anesthesia. 3. 2021年, Abe M, Miura M, et al. Arterial blood supply patterning (MSLNs). Anat. Sci. Int. 4. 2020年, 高橋, 三浦, 脊髄瘻に伴う髄液減少症.脊椎脊髄(33).</p> <p>●著書：1. 2017年, Miura M :Surgical Treatment for Lymphedema,86-102. (Person Shobo,Tokyo). 2.三浦: 腹膜播種転移の分子機構 (スキルス胃癌 基礎と臨床) 158-177, 2010 (医薬ジャーナル社)</p> <p>●受賞：1. 2009年, 日本リンパ学会・奨励賞 (西満正賞). 2 2013年, 第60日本麻酔科学学会・最優秀演題賞(指導研究). 3. 2018年, 九州山口スポーツ医科学研究会・臨床部門・最優秀演題賞. 4. 2018年, 第6回日本区域麻酔科学学会・最優秀演題賞. 2019年, 第7回日本区域麻酔科学学会・最優秀演題賞. 5. 2019年, 第4回日本リンパ浮腫治療学会学術集会・最優秀ポスター賞.</p>

所属・職位	医学部・講師	
氏名	八尋 隆明 (Yahiro Takaaki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2014年6月	
SDGs目標	  	
研究分野	ウイルス学、細胞診断学、臨床検査学	
研究キーワード	SARS-CoV-2、熱帯感染症ウイルス、下痢症ウイルス、ゲノム解析、遺伝子検査	
研究内容	<p>● 感染症ウイルスの分子疫学的解析</p> <p>感染症は、途上国ばかりでなく先進国においても、未だ人類の脅威となっています。2019年12月より世界中に蔓延している新興感染症のCOVID-19 (SARS-CoV-2)、熱帯感染症ウイルス (Dengue, Zika 等)、下痢症ウイルス (Rota, Noro, Bufa, Adeno 等) を分子疫学的解析法によって、ウイルスの塩基配列変異をもとにした系統分類・プロファイリングを行っています。Bufa virusはType1~3の3つの型が存在しており、その中のType3を世界で初めて発見し、ウイルスの全ゲノムを明らかにしました(8)。</p> <p>● デングウイルスと新型コロナウイルスの重複感染による重症化メカニズムの解析 (若手研究、JSPS、2022-2024年度)</p> <p>バングラデシュにおいて、デング出血熱(DHF)が急増しており、原因メカニズムの解明と対応策が喫緊の課題です。重症化メカニズムを解析すると同時に、対応策として途上国で運用可能となる迅速かつ適切な医療診断システムの構築を目指しています。</p>	
研究業績・アピールポイント	<p>● 代表論文</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) Recent downhill course of COVID-19 at Rohingya refugee camps in Bangladesh: Urgent action solicited. Sakirul Khan, Sheikh Mohammad Fazle Akbar, Kimitsuki K, Saito N, Yahiro T, Mamun Al Mahtab, Nishizono A. <i>J Glob Health</i>. 11:03097, (2021) (2) Analysis of the prevalence and species of <i>Anisakis</i> nematode in Sekisaba, <i>Scomber japonicus</i> caught in coastal waters off Saganoseki, Oita in Japan. Hidano S, Mizukami K, Yahiro T, Shirakami K, Ito H, Ozaka S, Arika S, Saechue B, Dewayani A, Chalalai T, Soga Y, Goto M, Sonoda A, Ozaki T, Sachi N, Kamiyama N, Nishizono A, Murakami K, and Kobayashi T. <i>Jpn J Infect Dis</i>. JJID.2020.859.(2021) (3) Nineteen Years of Japanese Encephalitis Surveillance in Sabah, Malaysian Borneo. arilyn Charlene Montini Maluda, Jenarun Jelip, Mohd Yusof Ibrahim, Maria Suleiman, Mohammad Saffree Jeffree, Azalina Farina Binti Aziz, Jaeyres Jani, Yahiro T, Ahmed K. <i>Am J Trop Med Hyg</i>. 103(2):864-868.(2020) (4) Long-Term Potable Effects of Alkaescent Mineral Water on Intestinal Microbiota Shift and Physical Conditioning. Yahiro T, Hara T, Matsumoto T, Ikebe E, Koshinomi N-F, Zhaojun Xu, Hiratsuka T, Iha H, Inomata M. <i>Evid Based Complement Alternat Med</i>. 2020:6706239,(2019) (5) Human-porcine reassortant rotavirus generated by multiple reassortment events in a Sri Lankan child with diarrhea. Yahiro T, Takaki M, Chandrasena TGAN, Rajindrajith S, Iha H, Ahmed K. <i>Infect Genet Evol</i>. 65:170-186.(2018) (6) Bufavirus genotype 3 in Turkish children with severe diarrhea. Yahiro T, Altay A, Bozdayi G, Matsumoto T, Sahin F, Ozkan S, Nishizono A, Söderlund-Venermo M, Ahmed K. <i>Clin Microbiol Infect</i>. S1198 743X(15) 00619-9.(2016) (7) Norovirus GII.21 in children with Diarrhea, Bhutan. Yahiro T, Wangchuk S, Wada T, Dorji C, Matsumoto T, Mynak ML, Tshering KP, Nishizono A, Ahmed K. <i>Emerg. Infect. Dis</i>. 21(4):732-4.(2016) (8) Novel genotype 3 human bufavirus from children with severe diarrhea in Bhutan. Yahiro T, Wangchuk S, Tshering K, Bandhari P, Zangmo S, Dorji T, Tshering K, Matsumoto T, Nishizono A, Soderlund-Venermo M and Ahmed K. <i>Emerg. Infect. Dis</i>. 20(6):1037-9.(2014) <p>● 受賞</p> <p>「Appreciation Night 2016」優秀賞 (PUBLICATION部門) / University Malaysia Sabah 「PEREKA 2016」ブロンズ賞 / Center for Research & Innovation, Malaysia</p>	

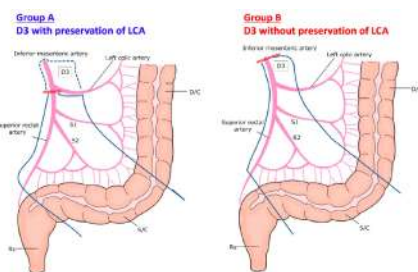
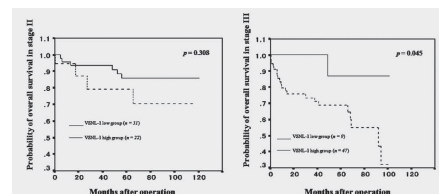
所属・職位	医学部医学科結核医療体制強化事業・講師
氏名	山末 まり (Yamasue Mari)
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2020年3月
SDGs目標	 3 すべての人に健康と福祉を




研究分野	呼吸器学、感染症
研究キーワード	<ol style="list-style-type: none"> 1. 高齢者、呼吸器感染症 (主に抗酸菌感染症) 2. びまん性肺疾患、希少肺疾患
研究内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 高齢者における肺結核の早期診断と予後に関する研究 本邦における肺結核患者の大半を高齢者が占め、高齢者肺結核の早期診断と予後の改善は、先進諸国が結核感染を制御する中に未だ結核中蔓延国である日本の結核診療において、一つの重要な課題と言える。高齢者における肺結核は、若年者と比較し非典型的な臨床像となり易く、誤嚥性肺炎など一般細菌による感染の合併による修飾などもあり、診断の遅れ、果ては治療介入の遅れに繋がりが易い。高齢者の肺結核患者を対象に、早期診断に繋がる検査法や画像診断法の開発や、また予後予測因子についての分析を行う。 2. 非結核性抗酸菌症の診断および治療に関する研究 結核罹患率は後期高齢者以外の年代では低下の一途であるが、非結核性抗酸菌感染症は中高年の女性を中心に罹患数が増加している。非結核性抗酸菌症は薬剤に対する感受性が低く、治療に難渋することが多い。このため、標準的な治療が実施できない症例におけるより有効な治療レジメンの検討や、本疾患類似の臨床像をとる呼吸器疾患・感染症は多いため、これらの鑑別に有用な画像所見の解析を進めている。 3. 県内における希少肺疾患の発生および受療状況の調査 希少肺疾患は情報が少ないが故に診断の付かないまま専門機関への受診に結び付いていない患者が存在する可能性がある。県内での希少肺疾患 (を疑う) 患者の実態調査を行い、肺希少疾患患者を潜在化させずに専門機関に結び付ける橋渡しシステムの構築を行っていく。
研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> 1. Comparison of chest computed tomography features between pulmonary tuberculosis patients with culture-positive and culture-negative sputum for non-mycobacteria: A retrospective observational study. Kan T, Komiya K, Yamasue M, et al. <i>Medicine (Baltimore)</i>. 2021 Aug 6;100(31):e26897. 2. Quantitative assessment of the association between erector spinae muscle and in-hospital mortality in elderly patients with pulmonary tuberculosis. Tanaka A, Komiya K, Yamasue M, et al. <i>BMC Res Notes</i>. 2021 Apr 13;14(1):134. 3. A solitary pulmonary nodule caused by <i>Mycobacterium tuberculosis</i> var. BCG after intravesical BCG treatment: a case report. Itai M, Yamasue M, et al. <i>BMC Pulm Med</i>. 2021 Apr 7;21(1):115. 4. The COVID-19 pandemic and the true incidence of Tuberculosis in Japan. Komiya K, Yamasue M, et al. <i>J Infect</i>. 2020 Sep;81(3):e24-e25. 5. Features of active pulmonary tuberculosis without abnormal chest X-ray findings. Matsumoto H, Komiya K, Yamasue M, et al. <i>Infect Dis (Lond)</i>. 2020 Jul;52(7):520-523. 6. Factors associated with false negative interferon-γ release assay results in patients with tuberculosis: A systematic review with meta-analysis. Yamasue M, Komiya K, et al. <i>Sci Rep</i>. 2020 Jan 31;10(1):1607. 7. Effect of long-term clarithromycin therapy on prevention of pneumonia in older adults: A randomized, controlled trial. Yamasue M, Komiya K, et al. <i>Geriatr Gerontol Int</i>. 2019 Oct;19(10):1006-1009.

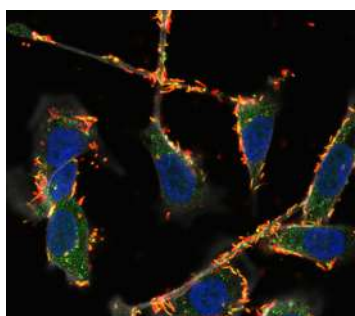
所属・職位	医学部医学科消化器・小児外科学講座・助教	
氏名	赤木 智徳 (Akagi Tomonori)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2012年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	腫瘍外科学/分子生物学/大腸癌 炎症性腸疾患
研究キーワード	低侵襲性治療、集学的治療
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ● 大腸癌の新規予後規定遺伝子の同定 進行大腸癌のリンパ節転移に関連する新規遺伝子をマイクロアレイ解析にてVSNL-1遺伝子を同定、臨床データより予後規定因子であることを報告した (Akagi T. et al. <i>Int J Ca</i> 2012)。 ● 左側大腸における左結腸動脈温存術式の有用性 左側大腸癌に対する左結腸温存リンパ節郭清の意義を短期・長期成績で非温存郭清と比較検討し、温存術式での妥当性を報告した (Akagi T. et al. <i>Ann Gastroenterol Surg</i> 2020)。





所属・職位	医学部医学科環境・予防医学講座・助教	
氏名	赤田 純子 (Akada Junko)	
取得学位	博士 (医学)、山口大学、2000年3月	
SDGs目標	    	


研究分野	細菌学・生化学
研究キーワード	ヘリコバクター・ピロリ感染症 病原性
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>ヘリコバクター・ピロリ (ピロリ菌) が胃に慢性感染し胃癌を誘導する機序は、胃癌多発地域である東アジアのピロリ菌株に、秘められた謎があるはずと考えています。研究室にストックされた世界のピロリ菌株とそのゲノム情報を活用し、学内の臨床及び基礎研究室研究者と共同で、ピロリ菌研究者の集積した大分大学という環境だからこそできる病原因子機能解析研究を目指して、留学生と日々取り組んでいます。</p>



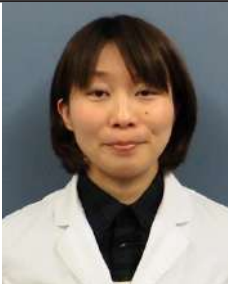

医学部

所属・職位	医学部医学科薬理学講座・助教	
氏名	赤嶺 孝祐 (Akamine Takahiro)	
取得学位	博士 (臨床薬学)、九州大学、2017年3月	
SDGs目標		



研究分野	薬理学・時間薬理学
研究キーワード	ROCK、時計遺伝子
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>・血管透過性調節機構に基づくARDS治療の基盤構築</p> <p>ARDS (acute respiratory distress syndrome, 急性呼吸促進症候群) は肺胞の血管内皮細胞障害により血管透過性が亢進し、血液液体成分が肺胞内へ漏出・貯留することで起こる予後不良かつ死亡率の高い疾患である。セリン・スレオニンキナーゼROCKは血管内皮細胞の運動や接着を介して血管透過性の制御を担っている。そこで本研究ではROCKが血管透過性を制御するメカニズムを明らかにすることでARDSの新規治療法開発の基盤構築を目指している。(若手研究: 20K17217)</p> <p>研究業績 Akamine T, et al. Accumulation of sorbitol in the sciatic nerve modulates circadian properties of diabetes-induced neuropathic pain hypersensitivity in a diabetic mouse model. <i>Biochem Biophys Res Commun.</i> 503(1);181-187, 2018.</p>

所属・職位	医学部医学科循環器内科・臨床診断学講座・助教	
氏名	秋岡 秀文 (Akioka Hidefumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2019年3月	
SDGs目標		

研究分野	循環器学
研究キーワード	急性心筋梗塞、気象、シースレスカテーテル
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>急性心筋梗塞発症と気象条件に関する研究やシースレスカテーテルと穿刺部の合併症の研究を行ってきた。</p> <p>現在日本人に多いとされている冠攣縮性狭心症と不飽和脂肪酸の関係について臨床研究を行っている。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) Seasonal variations of weather conditions on acute myocardial infarction onset: Oita AMI Registry Heart Vessels (2019) 2) Impact of Age on Gender Differences in the Acute Myocardial Infarction Onset-Weather Association - Oita AMI Registry Circ Rep (2020) 3) Reduction of bleeding complications on puncture site after percutaneous coronary intervention using a 6.5-French sheathless guiding catheter Heart Vessels (2022)

所属・職位	医学部医学科歯科口腔外科学講座・助教	
氏名	阿部 史佳 (Abe Ayaka)	
取得学位	学士 (歯学)、徳島大学、2008年3月	
SDGs目標		

研究分野	口腔外科学
研究キーワード	口腔潜在的悪性疾患、口腔粘膜疾患
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>【研究内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> 口腔潜在的悪性疾患に関する臨床病理学的研究 口腔異型上皮の早期検出に関する研究 性差と口腔癌に関する研究 <p>【研究業績】</p> <ul style="list-style-type: none"> Ayaka Abe, Tatsuyuki Kono, Kana Uchida, Yoshihiro Takahashi and Kenji Kawano Osteosarcoma of the jaw: Report of four cases. Journal of Oral and Maxillofacial Surgery, Medicine, and Pathology (in press) Tatsuyuki Kono, Ayaka Abe, Kaori Noguchi, Kana Uchida, Mao Shinoda, Kenji Kawano Extralingival peripheral ameloblastoma arising in the infratemporal fossa: A case report with an assessment of proliferative activity. Oral Science International (in press)

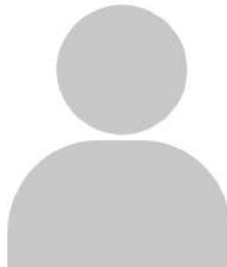


所属・職位	医学部医学科整形外科学講座・助教	
氏名	阿部 徹太郎 (Abe Tetsutaro)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2013年3月	
SDGs目標		

研究分野	脊椎脊髄病学
研究キーワード	骨粗鬆症、脊椎骨癒合、脊椎アライメント
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●脊椎骨癒合に関する研究</p> <p>人口の高齢化が進むに従い、インプラントを用いた脊椎固定術が増加している。良好な結果を得るためには椎体間の骨癒合が重要となる。ラッドを用いた関津港側方固定モデルを用い、最適な骨癒合促進剤の使用方法等について検討を進めている。</p> <p>(Abe T, et al. Optimal intermittent administration interval of parathyroid hormone 1-34 for bone morphogenetic protein-induced bone formation in a rat spinal fusion model. JOR Spine. 2021 Aug 18;4(3):e1168)。</p> <p>●脊椎アライメントに関する研究</p> <p>手術侵襲に伴い、術後経過中に脊柱後弯症等の脊椎アライメント変化が生じる危険性がある。実際の症例を参照にアライメント変化の危険因子を明らかにし、予防策等について検討を行っている。</p> <p>(Abe T, et al. Analysis of the risk factors for increasing cervical sagittal vertical axis after cervical laminoplasty for cervical spondylotic myelopathy. Arch Orthop Trauma Surg. 2022 Apr;142(4):553-560)。</p>



医学部

所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座・助教	
氏名	阿部 世史美 (Abe Yoshimi)	
取得学位	修士 (看護学)、大分大学、2022年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	看護学	
研究キーワード	摂食嚥下障害、フレイル、オーラルフレイル、高齢者、頭頸部がん	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●口腔がん術後摂食嚥下障害高齢者の退院後の経験 口腔がん術後に摂食嚥下障害のある状態で自宅退院した高齢者を対象に、退院後の経験を明らかにした。退院後、口腔機能の低下、活動耐性の低下などの課題があるが、対応には高齢者のレジリエンスが活かされていた。</p> <p>●頭頸部がんで放射線化学療法を受ける患者の栄養管理の検討</p> <p>●頭頸部がん化学放射線療法における誤嚥性肺炎リスク因子の検討 化学放射線療法施行患者の栄養管理方法や誤嚥性肺炎リスク因子を検討した。リスク因子として、栄養状態や口腔機能の低下、また咽頭知覚の低下による不顕性誤嚥があり、栄養管理や口腔ケアの重要性が明らかになった。</p>	

所属・職位	医学部医学科小児科学講座・助教	
氏名	糸永 知代 (Itonaga Tomoyo)	
取得学位	学士 (医学)、熊本大学、2008年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	小児内分泌学	
研究キーワード	成長、思春期、性分化	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●21水酸化酵素欠損症に関する研究 21水酸化酵素欠損症は、副腎という臓器から作られる「ステロイドホルモン」が生まれつき不足する病気です。しかし、治療に使用している薬の調整はとても難しく、特定の検査項目のみを目安として調整をできるかどうかはまだわかりません。</p> <p>この病気では、治療薬が足りないと女性の患者さんで男性化が起きたり、思春期が早く来すぎたりということが起きます。適切な治療の調整方法を見つけるための研究をしています。特に、小児の患者さんから苦痛なく集めることができる尿を用いた検査が役に立たないかを調べています (論文1. Itonaga T et al. Frontiers in Endocrinology)。</p>	





所属・職位	医学部医学科産科婦人科学講座・助教	
氏名	井上 尚実 (Inoue Naomi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2021年6月	
SDGs目標	 	

研究分野	産科婦人科・周産期医学
研究キーワード	胎盤
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●ヒト胎盤栄養膜細胞における酸化ストレス負荷によるメタボローム解析 妊娠高血圧症候群には胎盤虚血による低酸素、低栄養が影響していると考えられている。ヒト胎盤絨毛を構成する栄養膜細胞を用いて種々の手法により作成した胎盤虚血モデルにおいて代謝産物の網羅的解析を行う。さらに虚血に陥った栄養膜細胞ではどのような代謝経路の変化が起こっているのかを明らかにすることで病態の更なる解明を目的としている。</p> <p>●胎児心拍数モニタリング異常における胎盤代謝変化の検討 分娩前はlow riskと評価されたが、分娩時には胎児心拍モニタリング異常を認めた胎盤、臍帯血における低酸素の影響の有無やその他の代謝変化の有無について、ガスクロマトグラフ質量分析計 (GC-MS) 等を用いて検討する。</p>



所属・職位	医学部医学科消化器内科学講座・助教	
氏名	岩尾 正雄 (Iwao Masao)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2021年3月	
SDGs目標		

研究分野	医学 (消化器内科学)
研究キーワード	NAFLD、NASH、腸内細菌
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>研究内容：NAFLDと腸内細菌との関連性について 研究業績：非アルコール性脂肪性肝疾患 (NAFLD) は、肥満の有病率の劇的な増加に伴い、重大な公衆衛生上の問題となっています。NAFLDの病因の一つに腸内細菌叢が挙げられており、私達は食餌誘導性肥満モデルのラットを用いた実験結果から、分岐鎖アミノ酸 (BCAA) の投与で腸内細菌として<i>R. falvefaciens</i>が増加し、増加した<i>R. flavefaciens</i>がセルロースを基質として酢酸を産生し、その酢酸が肝細胞のAMPKを活性化し、脂肪合成関連遺伝子であるFASやACCの発現を抑制し、肝での脂肪合成を抑制し、肝の脂肪化が改善することを報告しました¹⁾。 BCAAは肝硬変症などの治療薬ですすでに広く普及している薬剤でありヒトのNAFLDにおいても薬物治療の選択肢の一つとなれば、近年増加傾向を示しているNAFLDの改善に寄与して、多くの人々の健康に寄与できる可能性があります。</p> <p>1) : Masao Iwao, Koro Gotoh, Kazunari Murakami, Hirotaaka Shibata, et al. Supplementation of branched-chain amino acids decreases fat accumulation in the liver through intestinal microbiota-mediated production of acetic acid. <i>Scientific Reports</i>. 2020. 10 (1), 18768. doi: 10.1038/s41598-020-75542-3.</p>

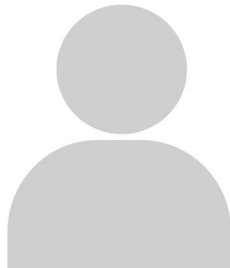

医学部

所属・職位	医学部医学科生物物理学講座・助教	
氏名	岩城 貴史 (Iwaki Takafumi)	
取得学位	博士 (理学)、京都大学、2004年3月	
SDGs目標	  	



研究分野	生物物理学
研究キーワード	DNA, polyelectrolyte, flow fields, interfacial phenomena, data analysis
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ● DNA高次構造の流体場に対する応答についての研究 マイクロプールの希薄DNA溶液に圧力をかけてマイクロ流路に押し出すとき、流路の入り口付近の流れ場は伸長流となり、DNA一分子の引き延ばしが観測される。これはDNAを手軽に引き延ばす手法と期待され、そのメカニズムを研究している[1]。 ● 物理学実験教育のデジタル化と学内共通基盤の構築 近年デジタルトランスフォーメーションが叫ばれ、大学教育の現場にもその波が押し寄せつつある。物理学実験のデジタル化と解析結果評価システムの構築に学内の物理学実験教育担当の先生方と協力して取り組んでいる[2]。 <p>[1] Stretching of single DNA Molecules caused by accelerating flow on a microchip, K. Hirano, T. Iwaki, T. Ishido, Y. Yoshikawa, K. Naruse, K. Yoshikawa, JCP 149, 165101(2018)</p> <p>[2] 実験データに基づいて解析結果を評価できるe-learningシステム、長屋智之、菊池武士、片山武夫、北西滋、岩城貴史、近藤隆司、工学教育、70-2, 53-58(2022) <i>in press</i>.</p>




所属・職位	医学部医学科法医学講座・助教	
氏名	内田 智久 (Uchida Tomohisa)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2004年6月	
SDGs目標		

研究分野	病理学
研究キーワード	ヘリコバクター・ピロリ、アジアの疫学研究、胃がん
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>Helicobacter pylori (ピロリ菌)感染による慢性炎症の持続が胃がん発症に重要な役割を果たしている。アジアの胃がん発症率は国・地域によって大きな差があり、日本では胃がん発症率が高い一方で、インドネシア、タイでは胃がん発症率は本邦の1/10以下と非常に低い。アジアにおける胃がん発症頻度の差を明らかにするために、フィールドワークで得た生検組織、同時に採取した血清検体を解析することで、胃がんにつながる胃粘膜の病態解析を行い、胃がん発症頻度に差がある原因の解明をおこなっている。さらに、胃粘膜に感染しているピロリ菌病原遺伝子の解析を行い、アジアの胃がん発症率の多様性の原因を遺伝子的な側面から明らかにする研究をおこなっている。</p>

所属・職位	医学科附属地域医療学センター・助教	
氏名	宇都宮 理恵 (Utsunomiya Rie)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2013年3月	
SDGs目標		

研究分野	内科学、地域医療
研究キーワード	総合診療、地域医療、高齢者医療、感染症
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ① 外来診療における血液培養陽性者の予測因子分析 ② 終末期・高齢者医療についての学生・研修医の意識調査研究 ③ 医師の外来診療における高齢者フレイル予防に関する実態

所属・職位	医学部医学科内視鏡下心臓外科学講座・助教	
氏名	梅野 惟史 (Umeno Tadashi)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2012年3月	
SDGs目標		

研究分野	再生医療
研究キーワード	生体医工学、生体内組織形成術(iBTA)、Biotube
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>「生体内組織形成術を用いた心臓血管外科領域における生体材料の開発」 対象者（患者）自身の体内組織で生成する移植組織・血管グラフトの臨床使用に向けた研究、実験に取り組んでいます。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">    </div>

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部



福祉健康科学部

その他学内施設等



医学部

所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座・助教	
氏名	江藤 千晴 (Etou Chiharu)	
取得学位	修士 (看護学)、佐賀大学、2008年3月	
SDGs目標	    	
研究分野	臨床看護学, 小児看護学, 家族看護学	
研究キーワード	家族 障害児・者	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>1. 2014年, 学外組織, 災害看護学実習にエマルゴトレーニングシステム・集団災害訓練を導入した学習効果, 活水論文集 第2集, 2014年</p> <p>2. 2019年, 学内単一組織, 看護学生が捉える“子どもの甘え”, 九州・沖縄小児看護研究会誌, 2019年</p> <p>科学研究費補助金 課題: AYA世代重症心身障害児・者の家族が抱く養育における介護負担感への支援策の検討, 2021~2023, 代表</p>	

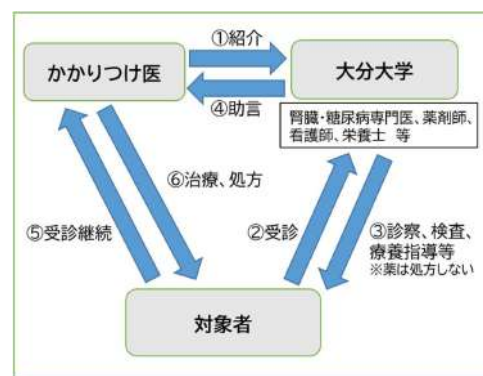
所属・職位	医学部看護学科実践看護学講座・助教	
氏名	大野 夏稀 (Oono Natsuki)	
取得学位	修士 (看護学)、大分大学、2012年3月	
SDGs目標		
研究分野	臨床看護学	
研究キーワード	がん看護、緩和ケア、終末期看護、意思決定支援、症状マネジメント	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>論文：A施設の看護師の意思決定支援における倫理調整者としての実践状況—振り返り票を用いた自己評価—, 第51回日本看護学会論文集 看護管理 看護教育、243-246、2021、査読有 菅原真由美、品川陽子、大野夏稀、川野京子、平山珠江、脇幸子、寺町芳子</p> <p>学会発表等：終末期がん患者・家族との対話に対するロールプレイ後の学生の思い、第51回日本看護学会 看護教育 学術集会、2020 (web開催) 大野夏稀、寺町芳子、脇幸子</p> <p>病を持っていてもいなくても“よりよく生きる”を目指した人生会議の意義、看護研究学会 第26回九州・沖縄地方会学術集会、2022 (web開催) 大野夏稀、脇幸子、森元竜太郎、佐藤祐貴子</p>	

所属・職位	医学部医学科消化器内科学講座・助教	
氏名	岡本 和久 (Okamoto Kazuhisa)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2022年5月	
SDGs目標		

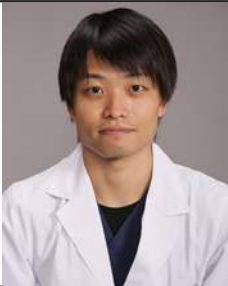

研究分野	超音波内視鏡 H.pylori
研究キーワード	胆膵内視鏡
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>Immunohistochemical differences in gastric mucosal damage between nodular and non-nodular gastritis caused by Helicobacter pylori infection Kazuhisa Okamoto et.al. J Clin Biochem Nutr. 2021 Sep;69(2):216-221.</p> <p>臨床面では主に胆膵内視鏡に従事しております。 超音波内視鏡下胆道ドレナージ(EUS-BD)を2019年より導入しこれまで40症例超に施行。今後はこれらに関するevidenceの発信と後進の育成に注力したいと考えています。</p>

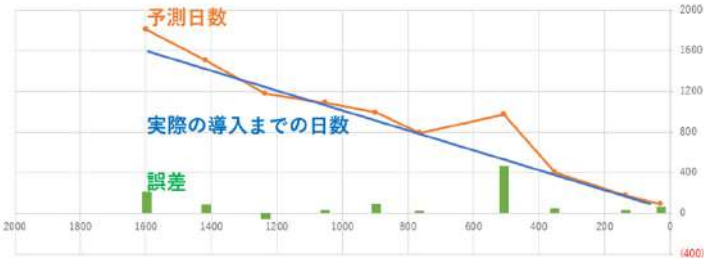
所属・職位	医学部医学科糖尿病性腎症重症化予防事業・助教	
氏名	岡本 光弘 (Okamoto Mitsuhiro)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2014年3月	
SDGs目標		

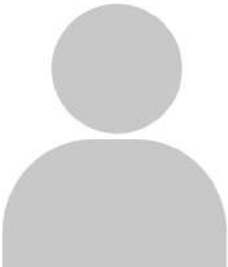



研究分野	糖尿病、糖尿病性腎症
研究キーワード	腎症重症化予防、病診連携
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>大分県では、2016年に「糖尿病性腎症重症化予防プログラム」を策定し、2019年には腎症重症化予防強化のため、大分県医師会、大分大学と「大分県糖尿病性腎症及び慢性腎臓病の重症化予防に係る連携協定」を締結し、「かかりつけ医と専門医、かかりつけ医と市町村・保険者の連携体制の強化」の一環で、重症化予防専門外来を大学に設置しております。この外来では、早期腎症でも、将来的に重症化が予測される患者を受け入れ、看護師、管理栄養士、糖尿病専門医、腎臓専門医などの多職種による生活指導に主眼をおいております。更に患者・かかりつけ医と指導内容と共有し、連携した重症化予防を行なっています。個別指導による腎症重症化を予防する因子への影響を研究すると共に、地域かかりつけ医との病診連携の方法について、より良い連携システムを構築や評価方法の策定につながることを目標にしています。</p>








医学部

所属・職位	医学部医学科内分泌代謝膠原病腎臓内科学講座・助教	
氏名	沖田 純 (Okita Jun)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2016年3月	
SDGs目標	 3 すべての人に健康と福祉を	



研究分野	腎臓内科学
研究キーワード	腎臓、透析、機械学習
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●機械学習を用いた透析導入時期の予測の検討</p> <p>近年AI技術（機械学習）を医療分野に応用することが期待されている。機械学習を用いて慢性腎臓病患者の透析導入時期を予測できるかの検討をおこない、決定係数0.83も予測モデルをつくることのできた。下図は今回の予測モデルを使用した一例であるが、5年間の経過で概ね100日以内の誤差で導入時期を予測することが出来た。今後は今回作成したモデルの精度を高め臨床応用を目指し、より質の高い医療を提供することを目標としている。</p>
	

所属・職位	医学部医学科（研究マネジメント機構）・助教	
氏名	奥山 みなみ (Okuyama Minami)	
取得学位	博士 (獣医学)、北海道大学、2014年3月	
SDGs目標	   9 産業と技術革新の基盤をつくろう 14 海の豊かさを守ろう 15 陸の豊かさも守ろう	

研究分野	繁殖生理学、野生動物学
研究キーワード	野生動物、豚、繁殖、子宮、精漿
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●精漿による子宮機能調節と受胎性向上に関する研究</p> <p>精漿を利用した豚の繁殖成績の向上を目指し、精漿がどのように子宮に作用し受胎性を向上させるのかを研究している。</p> <p>●鯨類の新規人工授精方法の確立を目指した繁殖生理の評価</p> <p>鯨類の新しい人工授精方法を確立させるために、精子の長期保存方法の開発や、雌の発情診断基準の確立、季節的な繁殖生理の評価を行っている。</p> <p>●特定外来生物アライグマの個体数増加・分布拡大に関する研究</p> <p>近年、特定外来生物アライグマの九州地域における生息域は急速に拡大している。「なぜアライグマの個体数がこんなにも増えるのか」を繁殖生理学的な視点で、「どのように生息域を広げているのか」を行動学的・遺伝学的な視点で解析をしている。</p>
	




所属・職位	医学部医学科大分こども急性救急疾患学部門医療・研究事業・助教	
氏名	小栗 沙織 (Oguri Saori)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2014年3月	
SDGs目標	  	

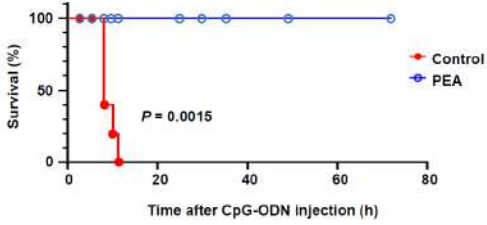
研究分野	小児科学
研究キーワード	小児呼吸器、遺伝学
研究内容・研究業績・アピールポイント	ゼブラフィッシュを用いたACTA2遺伝子変異による左室心筋緻密化障害の発症機構の解析研究 (アクチンアイソフォームの1つであり、 α 平滑筋アクチンをコードするACTA2遺伝子は、遺伝子変により家族性大動脈瘤・大動脈解離・冠動脈疾患・もやもや病などの血管疾患や多臓器平滑筋機能障害候群を生じる。左室心筋緻密化障害を伴うACTA2遺伝子バリエーションの患者を経験し、トランスジェニックゼブラフィッシュを用いた機能解析を行っている。)



所属・職位	医学部医学科感染予防医学講座・助教	
氏名	小坂 聡太郎 (Ozaka Sotaro)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2022年3月	
SDGs目標		

研究分野	消化器病学、免疫
研究キーワード	炎症性腸疾患、バイオマーカー
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●炎症性腸疾患の新規バイオマーカーの開発に関する研究</p> <p>潰瘍性大腸炎やクローン病で代表される炎症性腸疾患 (IBD) は難治性の消化管疾患です。IBDは病気の活動性に応じて治療が選択されます。そのためIBDの活動性を簡便に把握できるバイオマーカー (病気の強さを反映する血液や便の中の特定の物質) の開発が求められています。私は以前、分泌型好中球プロテアーゼ阻害分子 (SLPI) というタンパクがIBDモデル動物の腸炎を改善することを報告しました (論文¹⁾)。そこで現在はこのSLPIがヒトIBD患者の活動性に応じて血液中や便中で増減し、それを測定することで活動性を把握するバイオマーカーに利用できないか研究をしています。</p> <p>(参考論文) Ozaka, S et al. Protease inhibitory activity of secretory leukocyte protease inhibitor ameliorates murine experimental colitis by protecting the intestinal epithelial barrier. <i>Genes Cells</i>. 2021.</p>



医学部

所属・職位	医学部医学科内分泌代謝・膠原病・腎臓内科学講座・助教	
氏名	尾崎 貴士 (Ozaki Takashi)	
取得学位	学士 (医学)、熊本大学、2006年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	膠原病学、免疫学
研究キーワード	脂質メディエーター、PEA、OEA、Toll様受容体、炎症、全身性エリテマトーデス
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●全身性エリテマトーデス (SLE) の炎症病態に対する抗炎症性脂質メディエーターPEA、OEAの研究 (若手研究18K16155、若手研究 (B) 15K19577)</p> <p>液体クロマトグラフ・質量分析計を用いてSLEモデルマウスの体内に存在する脂質メディエーターを解析し、パルミトイルエタノールアミド (PEA) やオレオイルエタノールアミド (OEA) の濃度が野生型マウスに比べて有意に低下していることを見出した。また、マウス樹状細胞やB細胞において、PEAやOEAは、SLEに関連するToll様受容体9(TLR9)刺激を介する炎症性サイトカイン産生や細胞表面マーカー発現を抑制した。さらに、CpG-ODN (TLR9リガンド) を用いた敗血症モデルマウスは、PEAを投与することで生命予後が著明に改善することを見出した (右図、in preparation)。これらの抗炎症性脂質メディエーターは、自己免疫疾患や炎症性疾患に対する治療応用への発展が期待される。</p>
	

所属・職位	医学部医学科診断病理学講座・助教	
氏名	小山 雄三 (Oyama Yuzo)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2020年3月	
SDGs目標		

研究分野	人体病理学
研究キーワード	診断病理学, 唾液腺腫瘍, 皮膚腫瘍, 腎生検の病理
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>研究内容 病理組織像, 免疫染色, FISH法, 分子病理学的手法を駆使して, 病理診断, 病理学研究に従事している。近年ではWNTシグナル, ALPK1遺伝子に注目し, それらの経路, 遺伝子異常に関わる腫瘍発生の研究を行っている。</p> <p>研究業績</p> <ol style="list-style-type: none"> ① Difference in transducin-like enhancer of split 1 protein expression between basal cell adenomas and basal cell adenocarcinomas - an immunohistochemical study. Diagn Pathol. 2018 Jul 27;13(1):48. ② Short 57 kb CDKN2A FISH probe effectively detects short homozygous deletion of the 9p21 locus in malignant pleural mesothelioma. Oncol Lett. 2021 Dec;22(6):813.



所属・職位	医学部看護学科基盤看護学講座（精神看護学）・助教	
氏名	折橋 隆三 (Orihashi Ryuzo)	
取得学位	博士（医学）、佐賀大学、2022年3月	
SDGs目標		

研究分野	精神看護学、精神神経科学
研究キーワード	高齢者、認知機能、バイオマーカー開発、脳画像解析(Voxel Based Morphometry)
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>高齢者の精神的健康に関する長期疫学縦断研究</p> <p>Oxytocin and elderly MRI-based hippocampus and amygdala volume: a 7-year follow-up study. <i>Brain Communications</i>. 2(2):fcaa081. 2020. DOI: 10.1093/braincomms/fcaa081</p> <p>Association Between sTREM2, an Immune Biomarker of Microglial Activation, and Aging-Related Brain Volume Changes in Community-Dwelling Older Adults: A 7-Year Follow-Up Study. <i>Frontiers in Aging Neuroscience</i>. 13:665612. 2021. DOI: 10.3389/fnagi.2021.665612</p>




所属・職位	医学部医学科微生物学講座・助教	
氏名	カーン シャキル (KHAN SAKIRUL)	
取得学位	博士（農学）、愛媛大学、2009年9月	
SDGs目標		

研究分野	神経障害感染症、ウイルス学
研究キーワード	神経発達障害、獣共通感染症、新型コロナウイルス
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●ニワトリを用いた二分脊椎モデルに関する研究</p> <p>ニワトリは、ワクチン開発の他、倫理面や安全面などの点においてヒトの病態解析モデルに適している。これまでに、先天性奇形の1つである二分脊椎（SBA）について、ニワトリヒナモデルの時間経過に伴った感覚運動機能障害の病態変化の詳細を明らかにした（Khan et al., 2020; 2017）。また、神経栄養因子の一つであるプロサポシンに由来する18アミノ酸の合成ペプチドが、SBAヒナの脊髄神経回路網の障害を防ぎ、出生後の感覚運動機能を劇的に改善することを明らかにした。</p> <p>●感染病原体に関する研究</p> <p>バングラデシュの研究チームと共同でCOVID19に対する新しい治療/予防戦略の開発を目指している（Khan et al., 2021; 2020）。現在は、人獣共通感染症（特に狂犬病）の研究も進めている。</p> <p>※関連リンク：https://researchmap.jp/MSI_KHAN</p>



医学部

所属・職位	医学部医学科腎泌尿器外科学講座・助教	
氏名	甲斐 友喜 (Kai Tomoki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2016年9月	
SDGs目標		




研究分野	泌尿器科学
研究キーワード	腎細胞癌、泌尿器科病理、泌尿器腫瘍
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>・腎細胞癌発生・進展に関わる遺伝子の研究</p> <p>様々な遺伝子異常により腎細胞癌が発生し、進展する。腎細胞癌の増殖に関わるキー遺伝子を同定し、遺伝子をターゲットとしたあらたな新薬の開発を目標としている。</p> <p>参考文献：</p> <p>Kidney-specific knockout of Sav1 in the mouse promotes hyperproliferation of renal tubular epithelium through suppression of the Hippo pathway. J Pathol. 2016 May;239(1):97-108. doi: 10.1002/path.4706. Epub 2016 Mar 30.</p> <p>Downregulation of WDR20 due to loss of 14q is involved in the malignant transformation of clear cell renal cell carcinoma. Cancer Sci. 2016 Apr;107(4):417-23. doi: 10.1111/cas.12892. Epub 2016 Mar 4.</p> <p>Downregulation of NDUFB6 due to 9p24.1-p13.3 loss is implicated in metastatic clear cell renal cell carcinoma. Cancer Med. 2015 Jan;4(1):112-24. doi: 10.1002/cam4.351. Epub 2014 Oct 15.</p>

所属・職位	医学部看護学科基盤看護学講座地域看護学領域・助教	
氏名	金崎 理子 (Kanezaki Ayako)	
取得学位	修士 (看護学)、大分大学、2019年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	看護学
研究キーワード	保健師、児童虐待、母子保健活動
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●子どもの不適切な養育に対する小児科外来看護職の認識・行動に関する研究 (平成30年度修士論文)</p> <p>小児科外来に勤務する看護職を対象に質問紙調査を実施し、外来受診する親子のどのような様子に対して不適切な養育環境を認識し行動するのか、その実態を把握し、さらには看護職の背景要因との関連について統計的手法を用いて明らかにすることを目的とした。</p> <p>小児科外来看護職は、子どもの言動より親の言動を重視しやすい傾向にあること、子どもの愛着形成状況のアセスメントや親への対応については困難感を抱きやすいことが明らかになった。</p>

所属・職位	医学部医学科感染予防医学講座・助教	
氏名	神山 長慶 (Kamiyama Naganori)	
取得学位	博士 (医学)、大阪大学、2013年3月	
SDGs目標		



研究分野	免疫学、ウイルス学、寄生虫学
研究キーワード	多発性硬化症、蚊媒介性ウイルス疾患、ジカウイルス、トキソプラズマ原虫
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>多発性硬化症の発症メカニズムの解明とその新規治療法の開発 多発性硬化症は四肢の筋力低下などが主症状である自己免疫疾患で、我が国でも患者数が激増しているにもかかわらず、未だにその決定的な治療法は確立されていない。近年、多発性硬化症の増悪化および発症には病原性T細胞の中枢神経系への遊走が重要であることが明らかになりつつある。T細胞におけるシグナル伝達分子TRAF6が病原性T細胞の遊走能や病原性に与える影響を分子レベルで明らかにし、TRAF6およびその下流で発現する分子を標的とした効果的かつ安全な新規治療法を開発することを目指す。 参考文献 <i>Biochem Biophys Res Commun.</i> 2018 Sep 26;504(1):245-250.</p> <p>蚊媒介性ウイルス疾患の発症メカニズムの解析とその治療法の開発 ジカウイルス感染が小頭症やギランバレー症候群などの神経変性疾患の発症および増悪化に関与することが知られている。近年、ジカウイルス感染と多発性硬化症との関連を示唆する症例報告がなされたが、その詳細は未だ明らかになっていない。我々はジカウイルスを感染させたマウスを用いて多発性硬化症モデルを作製するという独自のモデルを樹立し、ジカウイルスが免疫細胞の活性化を介して多発性硬化症の病態に与える影響を分子レベルで解析している。最終的には、感染によって発現が上昇し、病態に深く関わる分子を標的とした新規治療法を開発することを目的とする。 参考文献 <i>Antiviral Res.</i> 2017 Oct;146:1-11.</p> <p>蚊媒介性ウイルス感染症の簡便で安価な診断法の開発 チクングニアウイルスは感染した蚊に吸血されることでヒトに感染し、非常に重篤な関節痛を引き起こすことで、QOLを大きく低下させることが大きな問題になっている。世界的にその診断法は専らPCR法によるものであるが、特に発展途上国においては経費や人材の不足により、診断を実施しないまま二次感染が広がっている傾向がある。そこで、RT-LAMP法など応用することで、人材や高額な機器が整備されていない発展途上国においても誰もが使用できる安価で簡便な検出法の開発を目指す。 参考文献 <i>Genes Cells.</i> 2020 Sep;25(9):615-625.</p> <p>先天性トキソプラズマ症の発症メカニズムの解析とその予防法の開発 トキソプラズマ原虫はネコ科の動物を終宿主とする寄生虫で、妊婦が初感染した際に子供に重篤な障害が生じることがある(先天性トキソプラズマ症)。近年、先天性トキソプラズマ症が多く原因不明の流産の原因となっていることが示唆されている。しかし、我が国での認知度は低く、未だこの予防法は確立されていない。そこで、種々の遺伝子改変マウスを用いてトキソプラズマ原虫の垂直感染モデルを作製し、先天性トキソプラズマ症の発症メカニズムを明らかにし、新規治療法の開発を目指す。 参考文献 <i>J Exp Med.</i> 2011 Jul 4;208(7):1533-46.</p>

所属・職位	医学部附属地域医療学センター・助教	
氏名	川崎 貴秀 (Kawasaki Takahide)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2015年3月	
SDGs目標	   	



研究分野	消化器外科、肥満外科、内視鏡外科治療学、地域医療学
研究キーワード	肥満外科、低侵襲治療、内視鏡外科
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>肥満外科手術の確立、消化器疾患に対する内視鏡外科手術の新しい機器開発、消化器外科手術の安全性の向上に関する研究を行なっている。</p> <p>●研究</p> <p>(1)肥満外科手術が視床下部摂食中枢に与える影響についての研究 腹腔鏡下スリーブ状胃切除術の視床下部摂食中枢に与える影響を明らかにする。</p> <p>(2)新しいカメラ付きトロッカーの評価に関する研究 スコピストが不要である新しいトロッカーの臨床応用を行い、低侵襲手術の新たな機器開発とその有用性を検討する。</p> <p>(3)術中光イメージングを用いた安全な膵切除術の確立 (図) 膵切除術において術中に近赤外光イメージングや色相強調イメージングを行う。膵断端の多角的な評価を行うことにより膵液瘻の減少を目指す。</p> <p>●論文</p> <p>(1) Kawasaki T, et al. Effects of sleeve gastrectomy and gastric banding on the hypothalamic feeding center in an obese rat model. <i>Surg Today.</i> 45.2015</p> <p>●受賞</p> <p>(1) 2015年第22回日本外科学会 研究奨励賞</p>



医学部

所属・職位	医学部医学科心臓血管外科学講座・助教	
氏名	河島 毅之 (Kawashima Takayuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2022年6月	
SDGs目標		

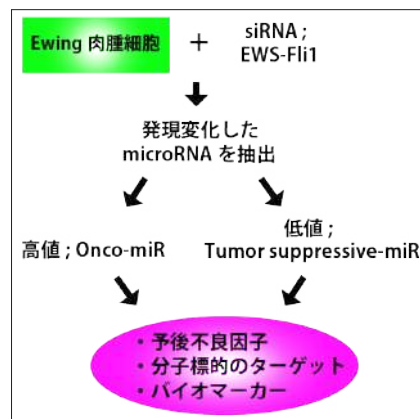
研究分野	心臓血管外科学
研究キーワード	再生医療、生体内組織形成術
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>基礎研究として生体内組織形成術を用いた新規生体材料の研究、脊髄虚血に伴う対麻痺予防の研究を行っており、心臓血管外科領域の各種臨床研究を行っております。</p> <p>● 論文</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Kawashima T, Umeno T, Terazawa T, Wada T, Shuto T, Nishida H et al. Aortic valve neocuspidization with in-body tissue-engineered autologous membranes: preliminary results in a long-term goat model. <i>Interact CardioVasc Thorac Surg</i> 2021; 32:969-77. doi:10.1093/icvts/ivab015. 2. Kawashima T, Yoshimura K, Shuto T, Wada T, Okamoto K, Kawano M, Sato H, Hongo N, Miyamoto S. Extensive Aortic Stent Graft Coverage for Thoracoabdominal Aortic Aneurysm is Associated With Hemorrhagic Complications Induced by Disseminated Intravascular Coagulation. <i>Ann Vasc Surg</i>. 2022;78:152-160. doi:10.1016/j.avsg.2021.06.017 3. Kawashima T, Okamoto K, Wada T, Shuto T, Umeno T, Miyamoto S. Femoral artery anatomy is a risk factor for limb ischemia in minimally invasive cardiac surgery. <i>Gen Thorac Cardiovasc Surg</i>. 2021;69(2):246-253. doi:10.1007/s11748-020-01442-y



所属・職位	医学部医学科耳鼻咽喉科学講座・助教	
氏名	川野 利明 (Kawano Toshiaki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2013年6月	
SDGs目標		

研究分野	耳鼻咽喉科学、免疫学
研究キーワード	粘膜免疫、上気道感染、ウイルス学、ワクチン
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>アジュバント付加型鼻腔投与インフルエンザウイルスワクチンの研究</p> <p>現在まだ適応のないアジュバントを付加したインフルエンザウイルスワクチンを作成し、鼻腔から投与することによって粘膜免疫誘導や血清抗体産生を効果的に増加させる新たなワクチン戦略を構築する。</p> <p>(科学研究費 基盤研究 (C) 令和3年～6年 M2タンパクと複合アジュバントを用いた新たなインフルエンザウイルスワクチン戦略)</p> <p>Thymic stromal lymphopoietin (TSLP)を標的としたアレルギー病態と慢性感染炎症の制御</p> <p>T細胞の数と多様性の維持にはT細胞ホメオスタシスのプロセスが重要であり、その維持にはTSLPなどが関与している。TSLPとアレルギーや扁桃反復感染の関連について免疫学的評価を行い、TSLP抗体の上気道反復感染に対する有効性を検討する。</p> <p>(研究活動支援、奨学寄付、田辺三菱研究助成 令和3年 口蓋扁桃上皮に発現するTSLPを標的としたアレルギー病態と慢性感染炎症の制御)</p>

所属・職位	医学部医学科整形外科学講座・助教	
氏名	河野 正典 (Kawano Masanori)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	骨軟部腫瘍
研究キーワード	肉腫、がん遺伝子、マイクロRNA
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>Ewing肉腫特異的融合遺伝子タイプによるマイクロRNA発現制御機構に関する研究</p> <p>我々はEwing肉腫の特異的融合遺伝子産物EWS-Fli1が、そのsubtypeによってマイクロRNA及び標的mRNA発現にどのような影響を与えているかを研究している。特に特異的siRNAによりknock down後、有意な発現変化を示すmiRNAとその標的mRNAを網羅的に解析することで、1) Ewing肉腫の性質を普遍的に規定する因子、2) 予後不良例の特有な予後規定因子、3) より選択的な治療標的となる因子、の同定を目指している。</p>



所属・職位	医学部医学科大分子ども急性救急疾患学部門医療・研究事業・助教	
氏名	岸本 慎太郎 (Kishimoto Shintaro)	
取得学位	博士 (医学)、久留米大学、2012年2月	
SDGs目標		

研究分野	小児循環器
研究キーワード	先天性心疾患、川崎病
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>Increased plasma type B natriuretic peptide in the acute phase of Kawasaki disease. <i>Pediatric International</i> 2011 ;53 :736-41.</p> <p>川崎病急性期ではBNP上昇が見られます。そのBNP上昇は、心エコーでの心機能指標は相関せず、炎症所見 (CRPやIL-6) と相関することを発見しました。</p>

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部



福祉健康科学部

その他学内施設等

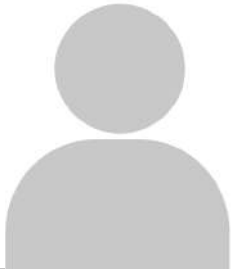

医学部

所属・職位	医学部医学科微生物学講座・助教	
氏名	君付 和範 (Kimitsuki Kazunori)	
取得学位	博士 (獣医学)、北里大学、2018年3月	
SDGs目標		
研究分野	獣医学、病理学、ウイルス学	
研究キーワード	狂犬病、Neglected Tropical Diseases	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●フィリピンにおける狂犬病の調査と新規診断方法開発 狂犬病対策として、犬の狂犬病をコントロールすることが最も重要であるにも関わらず、多くの狂犬病流行国では十分なサーベイランス自体が行えていないのが現状である。そこで、より簡便に動物の狂犬病診断を行うべく、狂犬病流行国における狂犬病疑い動物のサーベイランスの実態調査、迅速診断キットによる簡易診断方法の評価、新規遺伝子検出方法の開発、病理組織学解析などを現地の研究者らと行なっている (Mananggit MR. et al 2021, and Kimitsuki K. et al 202)。 ※関連リンク：http://www.med.oita-u.ac.jp/biseibut/SATREPS.html</p> <p>●狂犬病ウイルス感染モデルマウスを用いた病態解析 末梢感染性の高い野外流行株 (街上毒) を用いた末梢感染モデルを解析することで、潜伏期間中におけるウイルスの病原性発現機序、及び宿主応答を明らかにすることを目指す。さらに、これらの感染モデルマウスを用いて、抗ウイルス薬などの治療効果についても評価を進めている (Kimitsuki et al 2017, Yamada, K 2021)。</p>	

所属・職位	医学部医学科小児科学講座・助教	
氏名	木村 裕香 (Kimura Yuka)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2010年3月	
SDGs目標		
研究分野	小児成育学、小児腎臓病学	
研究キーワード	小児腎疾患	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>小児腎臓病分野に関する研究業績</p> <p>1) Yuka Kimura, Kyoko Kiyota, Hiroshi Koga, Souichi Suenobu, Kenji Ihara: Renal lesions mimicking acute focal bacterial nephritis in pediatric leukemia. <i>Pediatrics International</i>. 2022 Jan; 64(1): e14838.</p> <p>2) Yuka Kimura, Kyoko Kiyota, Mayo Ikeuchi, Kazuhito Sekiguchi, Kenji Ihara: Rituximab-induced serum sickness in a girl with nephrotic syndrome. <i>CEN case reports</i>. 2022 (in press).</p>	

所属・職位	医学部医学科解剖学講座・助教	
氏名	久保 修一 (Kubo Shuichi)	
取得学位	博士 (生命科学)、鳥取大学、2020年9月	
SDGs目標		

研究分野	解剖学、分子生物学
研究キーワード	ピロリ菌、炎症性発癌、胃がん
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●<u>ピロリ菌感染による炎症性発癌機序の解明</u></p> <p>ピロリ菌、特に菌体から胃粘膜上皮細胞へ注入されるCagAと呼ばれる毒素蛋白質をもつピロリ菌は、慢性胃炎から胃癌へと進展する、炎症を基盤とした強い発癌活性を示します。本研究では「炎症に密接に関連する生理活性物質」に着目し、CagAをもつピロリ菌感染によって生じる炎症を基盤とした発癌過程の解明を目指します。</p> <p>●<u>研究業績</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 1) Ninomiya R, <u>Kubo S</u> et al (2021) Inhibition of low-density lipoprotein uptake by <i>H. pylori</i> virulence factor CagA. BBRC. 556, 192-198. 2) <u>Kubo S</u> et al (2020) Oct motif variants in Beckwith-Wiedemann syndrome patients disrupt maintenance of the hypomethylated state of the H19/IGF2 imprinting control region. FEBS letters. 594, 1517-1531. 3) Morita M et al (2020) Biology open. 9. 4) Hori N, <u>Kubo S</u> et al (2020) Gene. 743, 144606-144606.

所属・職位	医学部医学科脳神経外科学講座・助教	
氏名	久保 毅 (Kubo Takeshi)	
取得学位	博士 (医学)、大分医科大学、1995年3月	
SDGs目標		

研究分野	脳神経外科
研究キーワード	脳血管障害 脳卒中 脳動静脈奇形 血管新生 分子細胞生物学
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>脳血管障害におけるCAT assayと細胞内シグナルの解析</p> <p>脳血管障害発生には血管内皮前駆細胞からのvasculogenesisのメカニズムと、血管内皮細胞の形成 (angiogenesis) の過程があり、さらにvascular remodelingが加わる。脳血管障害における分子メカニズムは不明な点が多く、これらに特異的な細胞内シグナルをCAT assayとともに解明することで治療困難な脳の病勢把握や新たな血管内治療法開発に寄与する。</p>

医学部

所属・職位	医学部医学科眼科学講座・助教	
氏名	久保 夕樹 (Kubo Yuki)	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、2021年2月	
SDGs目標	   	
研究分野	眼科学	
研究キーワード	網膜静脈閉塞症、糖尿病網膜症	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>網膜静脈閉塞症や糖尿病網膜症に代表される網膜虚血性疾患に関して血管新生や増殖膜形成を惹起する分子の特定とそれらに対する抗体医薬などの分子標的薬の創生を目指している。</p> <p>また、当該疾患に対する既存の分子標的治療に関しての治療効果を解析することを通じて、治療レジメンの検討を行っている。</p> <p>論文 Kubo Y, et al. Periostin and tenascin-C interaction promotes angiogenesis in ischemic proliferative retinopathy. Sci Rep. 2020 Jun 9;10(1):9299. doi: 10.1038/s41598-020-66278-1.</p>	

所属・職位	医学部医学科病態生理学講座・助教	
氏名	桑 慎一郎 (Kume Shinichiro)	
取得学位	博士 (理学)、総合研究大学院大学、2016年10月	
SDGs目標	  	
研究分野	電気生理学、分子生理学	
研究キーワード	イオンチャネル	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●イオンチャネル分子の構造と機能の関係性に関する研究</p> <p>心臓の規則正しい拍動には、電気信号による調節が不可欠です。この電気信号は心筋内外でのイオンの移動により生じており、イオンチャネルという分子群が担っています。例えば、突然変異でイオンチャネルの分子構造が変化すると、その正常な機能が維持できず、結果的に不整脈などの心疾患を引き起こします。</p> <p>私はこれらのイオンチャネルのうち、特に電位作動性K⁺チャネルの1つであるhERGチャネルに焦点を当てた研究をしています (論文1)。イオンの移動を電流として測定できるパッチクランプ法や、分子の構造変化を光の変化として測定できるFRET法、また、遺伝子工学などの技術を駆使して、このチャネルの構造と機能の関係性を解明することで、心疾患の予防や治療に貢献したいと考えています。</p> <p>1: Kume S <i>et al.</i>, J Physiol. 596, 4629-4650 (2018)</p>	



所属・職位	医学部医学科総合診療・総合内科学講座・助教	
氏名	栗林 良子 (Kuribayashi Ryoko)	
取得学位	学士 (医学)、帝京大学、2016年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	総合診療、高齢者医療、地域基盤型研究
研究キーワード	ソーシャルキャピタル、家庭医療、アドボカシー
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>【研究内容】 高齢者が住み慣れた街で自分らしく過ごせる街創りを推進するために、フレイル、サルコペニア状態にある高齢者とその介護者をはじめとするご家族に対して、身体活動度の向上を目指すための認知行動療法を取り入れた教育活動を推進する。また、フレイル、サルコペニアを有する高齢者に対して認知行動療法を行うことのできる家庭医、総合診療医を育成するための教育プログラムを開発する。</p> <p>【アピールポイント】 現在、厚生労働省「総合的な診療能力を持つ医師の養成推進事業～総合診療医センター」を担当する助教として医学生、研修医の教育を行いながら、彼らとともに高齢者が住み続けられるまちづくりについて考え、またソーシャルキャピタルやアドボカシーが高齢者のQOL向上に如何に関与しているか質的研究を行っている。</p>




所属・職位	医学部看護学科基盤看護学講座・助教	
氏名	後藤 奈穂 (Goto Naho)	
取得学位	修士 (看護学)、大分大学、2012年3月	
SDGs目標	   	

研究分野	看護学
研究キーワード	保健師、地域ケアシステム
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>【テーマ】 行政保健師に医療的ケア児を対象とした活動指標の開発</p> <p>【内容】 本研究の問いは「医療的ケア児とその家族の支援における行政保健師ならではの活動内容とは？期待される活動とは？」である。行政保健師は、公的機関に所属の看護職として、住民の健康を守るという責任のもと保健・医療・福祉・介護等の住民サービスの充実を図る役割を担っており、医療的ケア児とその家族に対しても、家庭訪問などの直接的な支援や関係機関との連携、サービスの開拓・調整を行っている。そこで、それらの保健師活動について以下の方法にて活動指標を開発しようとするものである。</p> <p>医療的ケア児とその家族に対する保健師活動を行った行政保健師へのインタビュー調査をもとに指標原案を作成し、その後、全国の行政保健師ならびに医療的ケア児支援に関わる多職種への質問紙調査等によって見直し・検証を経て完成版活動指標の作成を目指す。</p>

医学部

所属・職位	医学部医学科循環器内科・臨床検査診断学講座・助教	
氏名	近藤 秀和 (Kondo Hidekazu)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2015年8月	
SDGs目標		
研究分野	循環器内科学	
研究キーワード	心房細動, 心外膜脂肪, SGLT2阻害薬	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>#1. 心外膜脂肪の遺伝子発現プロファイルに対するSGLT2阻害薬の効果 イギリス留学時にSGLT2阻害薬の心筋redoxへの直接効果を検証した研究をもとに、現在はSGLT2阻害薬の心外膜脂肪への効果を追究している。留学時に培ったヒト組織からの細胞培養法を駆使してより臨床に近いヒト検体を用いた実験にこだわって研究を進めている。</p> <p>#2. 術後心房細動予防のための心外膜脂肪中新規標的因子の解明 心臓血管外科とコラボレーションし、術後心房細動患者の心外膜脂肪組織で特異的に発現亢進している因子を同定しようとしている。</p> <p>#3. デバイス植込み患者の患者背景・予後と皮下脂肪組織・骨格筋組織の遺伝子発現プロファイルの関係 業績詳細はhttps://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/?term=kondo+hidekazu&sort=dateへ</p>	

所属・職位	医学部医学科皮膚科学講座・助教	
氏名	酒井 貴史 (Sakai Takashi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2015年3月	
SDGs目標	 	
研究分野	皮膚科学	
研究キーワード	アトピー性皮膚炎	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>● アトピー性皮膚炎の病態解明、新規治療開発、バイオマーカー探索に関する研究</p> <p>アトピー性皮膚炎 (AD) は、かゆみと繰り返す湿疹を特徴とする最もありふれた炎症性皮膚疾患で、AD患者は身体的苦痛、心理的苦痛によって自身および家族などの身の周りの人への生活の質に多大な影響を及ぼす。私はこれまで大分大学およびボン大学 (ドイツ) で、ADの病態、新規治療、バイオマーカーに関する研究に携わり、現在も基礎研究、臨床研究を通して、ADに関する新しい知見を重ねている。</p> <p>代表業績 : Sakai T, et al. <i>Allergy</i> 76(10):3220, 2021. Sakai T et al, <i>Allergy</i> 76(8):2592, 2021. 代表受賞歴 : Young JSID Award (December 3, 2021) ※ 関連リンク : https://researchmap.jp/sakai-t-2006</p>	

所属・職位	医学部医学科麻酔科学講座・助教	
氏名	佐々木 美圭 (Sasaki Mika)	
取得学位	学士 (医学)、熊本大学、2008年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	医学
研究キーワード	麻酔、周術期禁煙
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●ポータブル型パルスCOオキシメータを用いた周術期禁煙指導の有効性の検討</p> <p>周術期禁煙は喫緊の課題であり、手術は患者教育の機会 (teachable moment ; TM) の観点で禁煙の動機付けとして重要性が指摘されている。</p> <p>一般的な禁煙外来での禁煙の動機づけに呼気一酸化炭素 (CO) 濃度測定を行うが、パルスオキシメータによる一酸化炭素濃度 (SpCO) ではより侵襲的に測定可能である。周術期の禁煙指導にSpCOの測定を繰り返し行うが喫煙者に禁煙の動機づけとなり、周術期禁煙指導を行うことで禁煙率を上昇させるかどうか、さらには長期禁煙につながるかどうか調査中である。</p>

所属・職位	医学部医学科神経生理学講座・助教	
氏名	鹿野 健史朗 (Shikano Kenshiro)	
取得学位	博士 (学術)、広島大学、2018年3月	
SDGs目標		

研究分野	生理学、神経内分泌学、内分泌代謝学、ペプチド科学
研究キーワード	神経ペプチド、エネルギー代謝、肥満
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>1. 中枢性エネルギー代謝調節機構の解明</p> <p>肥満の主な原因である過食は、脳の摂食中枢におけるエネルギー代謝調節機構が破綻することで生じるため、中枢性エネルギー代謝調節機構のさらなる解明が求められている。これまでの先行研究において視床下部特異的に発現する新規脳内因子に関して食欲亢進作用を有することを明らかにしてきた (研究業績1,2)。現在、この脳内因子について独自に遺伝子欠損マウスを作製し、生理機能解析を行っている。これまでに本遺伝子欠損マウスが摂食量の低下やエネルギー代謝の亢進により「痩せ」を生じさせることが判明している。今後この「痩せ」が生じるメカニズムを明らかにすることで、本因子が関与する肥満発症機構の解明や肥満症治療基盤の開発を目指したい。</p> <p>【研究業績】</p> <p>1. Shikano K et al. <i>J Endocrinol.</i> 244(1):1-12. 2020.</p> <p>2. Iwakoshi-Ukena E and Shikano K et al. <i>eLife.</i> 6:e28527. 2017</p>



医学部

所属・職位	医学部医学科放射線医学講座・助教	
氏名	島田 隆一 (Shimada Ryuichi)	
取得学位	学士 (医学)、大分医科大学、2002年3月	
SDGs目標		

研究分野	放射線診断学、Interventional radiology
研究キーワード	神経放射線診断、腹部放射線診断、Interventional radiology
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>これまでCT、MRIや血管造影など脳神経領域の画像診断に関する研究を行い、脳血管内治療の際に必要な詳細な血管構築及びそれに基づいた治療戦略について国内外で発表を行ってきた (論文1.2、学会発表1-3)。また、腹部放射線領域についても肝胆膵領域の画像診断に関する研究を行っている (論文3)。</p> <p><論文></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Shimada R, Kiyosue H, Tanoue S, Mori H, Abe T. Superior Petrosal Sinus: Hemodynamic Features in Normal and Cavernous Sinus Dural Arteriovenous Fistulas. <i>Am J Neuroradiol.</i> 2013 Mar;34(3):609-15. 2. Ide S, Kiyosue H, Shimada R, Hori Y, Okahara M, Kubo T. Selective transvenous embolization combined with balloon angioplasty of the occluded inferior petrosal sinus for the treatment of cavernous sinus dural arteriovenous fistulas. <i>Interv Neuroradiol.</i> 2021 May 6;15910199211016234. doi: 10.1177/15910199211016234. Epub ahead of print. 3. Takaji R, Yamada Y, Shimada R, Matsumoto S, Daa T, Endo Y, Inomata M, Asayama Y. Retrospective evaluation of venous phase contrast-enhanced computed tomography images in patients who developed pancreatic adenocarcinomas after treatment for nonpancreatic primary cancer. <i>BJR Open.</i> 2021 Jul 5;3(1):20200069. doi: 10.1259/bjro.20200069. eCollection 2021. <p><学会発表></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Shimada R. Anatomical evaluation of the inferolateral trunk by multiplanner reformatted images of rotational angiography: normal anatomy and pathologic features. <i>European Congress of Radiology.</i> Mar 6-10, 2014 Vienna, Austria. 2. Shimada R. Spontaneous carotid-superior petrosal sinus AVF in a patient with Marfan's syndrome. Sep 13-17, 2014 Glasgow, United Kingdom. 3. Shimada R. Borden type I transverse-sigmoid sinus dural arteriovenous fistulas cured by selective transvenous embolization for shunted venous pouches. May 28-30, 2015 Miyazaki, Japan.

所属・職位	医学部医学科細胞生物学講座・助教	
氏名	清水 誠之 (Shimizu Nobuyuki)	
取得学位	博士 (医学)、九州大学、2013年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	分子生物学、ケミカルバイオロジー
研究キーワード	疾患モデル、CRISPR/Cas9、ゼブラフィッシュ、プロテインノックダウン
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>X連鎖性ミオチューブラーミオパチーに合併する肝臓障害に関する研究</p> <p>X連鎖性ミオチューブラーミオパチーは、MTM1遺伝子の変異により、全身の筋緊張低下を主症状とし、まれに肝障害に起因する出血性ショックにより致死的な状態に陥る。体が透明で、組織・器官の病態プロセスを高精度に追跡できる小型魚類において、本疾患を模倣するモデルを作成した。ライブイメージング技術などを駆使し、病態メカニズムの解明と治療法の確立、創薬の開発に向けた基盤研究をおこなっている。</p> <p>白血病治療薬ポマリドミドの適応拡大に関する研究</p> <p>一部の血液がんのみ使用が認可された薬剤ポマリドミドの適応拡大を目指した研究を行い、ポマリドミドによって分解誘導される新しい基質PLZFを同定した。これにより、ポマリドミドがPLZFに起因する急性前骨髄球性白血病 (APL) に対して、抗腫瘍効果を示すことが明らかとなった (<i>Communications Biology.</i> 2021)。</p>

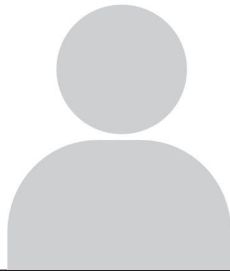
所属・職位	医学部看護学科基盤看護学講座・助教	
氏名	箕河原 靖子 (Sugahara Seiko)	
取得学位	修士 (看護学)、大分大学、2015年3月	
SDGs目標		

研究分野	地域看護学
研究キーワード	地域看護
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>【研究業績】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 箕河原靖子、後藤奈穂、志賀たずよ、井手知恵子；運動教室後の健康づくり活動にかかわる看護援助ニーズ、第18回日本地域看護学会学術集会講演集、2015 ・ 箕河原靖子、岡本静香、松原麻夏他；結核の早期発見・服薬確認を軸とした患者支援体制の検討、第38回大分県看護研究学会、2015


所属・職位	医学部医学科神経内科学講座・助教	
氏名	角 華織 (Sumi Kaori)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2015年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	神経内科学、認知症
研究キーワード	糖尿病、認知症、アミリン、オリゴマー
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●ヒトアミリンオリゴマー仮説に基づく2型糖尿病および認知症の研究</p> <p>ヒト膵島アミロイドポリペプチド (hIAPP；アミリン) は膵臓のβ細胞からインスリンと共分泌されます。2型糖尿病(T2DM；Type 2 diabetes mellitus)では、hIAPPが凝集して膵島にアミロイドとして沈着することが特徴的な形態変化のひとつであり、膵β細胞量の減少と膵島アミロイドの蓄積は相互に依存していることがわかっています。また、T2DM患者は健常者と比較して約1.5倍～2.5倍の認知症発症リスクがあり、T2DMおよびAD患者の脳には異常に増加したアミリンやアミリン-Aβ混合プラークも発見されています。2T2DMと認知症に共通する発症基盤としてアミリンについての研究を進めています。</p>

医学部


所属・職位	医学部医学科救急医学講座・助教	
氏名	竹中 隆一 (Takenaka Ryuichi)	
取得学位	学士 (医学)、大分医科大学、2001年3月	
SDGs目標		

研究分野	救急集中治療学分野
研究キーワード	酸化ストレス、生体侵襲、メタボローム解析、呼吸不全、外傷
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>○重症救急患者における生態侵襲制御を目的とした酸化ストレス制御 重症外傷や心停止・心停止後症候群など救急患者を対象として、生体侵襲に伴う酸化ストレスの動向をリアルタイムに把握する方法を確立させ、どのようなタイミングでどの程度の量の抗酸化物質を投与することが予後改善につながるかを検討。 (科研費基盤研究C 2019年度～2021年度 研究責任者)</p> <p>○救急患者および呼吸不全患者におけるメタボローム解析を利用した重症度・予後予測マーカー、疾患特異的マーカー、治療標的物質の網羅的検討 学内で実施可能であるメタボローム解析を用い、救急患者・呼吸不全患者の臨床検体から、重症度や予後と関連する物質やカスケードの特定を行い臨床応用に繋げる。最終的には治療標的となる物質やカスケードの特定まで結び付けたい。</p>

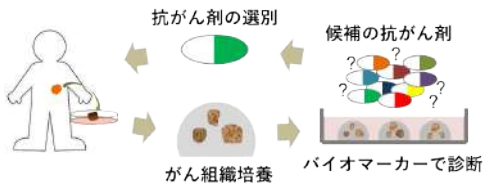
所属・職位	医学部医学科結核地域医療体制強化事業・助教	
氏名	竹野 祐紀子 (Takeno Yukiko)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2007年3月	
SDGs目標		

研究分野	呼吸器内科分野
研究キーワード	気管支拡張、器質化肺炎、嫌気性菌
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p><研究内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・気管支拡張症における菌分離を目的とした気管支鏡検査の役割 ・特発性器質化肺炎と続発性器質化肺炎の臨床所見の比較 ・呼吸器内科における気道検体からの嫌気性菌分離状況と臨床的特徴 <p><研究業績></p> <p>Quantitative assessment of the association between erector spinae muscle and in-hospital mortality in elderly patients with pulmonary tuberculosis Ai Tanaka #^{1,2}, Kosaku Komiya #^{3,4}, Mari Yamasue #^{1,2}, Yumiko Ando ⁵, Yukiko Takeno ^{1,2}, Shuichi Takikawa ¹, Kazufumi Hiramatsu ², Jun-Ichi Kadota ² BMC Res Notes. 2021 Apr 13;14(1):134. doi: 10.1186/s13104-021-05546-3.</p>

所属・職位	医学部医学科人工関節学講座・助教	
氏名	田中 健誠 (Tanaka Kensei)	
取得学位	博士 (医学)、北里大学、2016年3月	
SDGs目標		

研究分野	人工関節学
研究キーワード	人工股関節、Full HA(hydroxyapatite) coated stem、有限要素解析
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●フルHAコーティング型人工股関節ステムの応力解析における研究</p> <p>近年、人工股関節置換術や人工骨頭置換術ではフルHAコーティング型ステムが広く使用されている。Depuy社が販売しているCorail® はその代表格であり、約30年の長期臨床成績が報告されている。現在では各メーカーより同タイプのステムが販売されているが、そのステム形状やコーティングの仕様は微妙に異なっている。本研究では同タイプステムの1例を対象とし、実際に生体に設置された生理的荷重を受けた状態を再現しつつ、有限要素解析にて大腿骨内の応力状態を解明することを目的としている。</p>
	
	フルHA型ステム1例

所属・職位	医学部医学科分子病理学講座・助教	
氏名	塚本 善之 (Tsukamoto Yoshiyuki)	
取得学位	博士 (生命科学)、鳥取大学、2004年9月	
SDGs目標	  	

研究分野	分子病理学
研究キーワード	病理、消化器がん、抗がん剤効果予測、がん組織培養
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>研究テーマ：がん個別化医療の実現へ向けた基盤研究</p> <p>抗がん剤は臨床試験を通してもっとも効果的なものが決められているが、実際は同じ抗がん剤・同じ臓器がんでも患者さんによって効果が異なる。そのため、抗がん剤治療前に効果が予測できれば、患者さんに合った治療法を選択できる。これを「個別化医療」と呼ぶが、医療現場ではまだ十分ではない。私たちは患者さんのがん組織を培養し、バイオマーカーを用いてその患者さんの抗がん剤に対する効果を予測する方法の開発を目指している。将来的に個別化医療の実現に役立てたい。</p> <p>関連リンク https://researchmap.jp/tsukamoto-yoshiyuki</p>
	

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部

福祉健康科学部

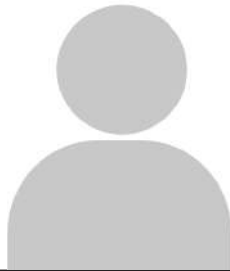

その他学内施設等

所属・職位	医学部医学科神経生理学講座・助教	
氏名	寺西 仁志 (Teranishi Hitoshi)	
取得学位	博士 (医学)、久留米大学、2005年3月	
SDGs目標		

研究分野	生理学、神経科学、ペプチド科学、行動実験学、病態生理学
研究キーワード	ストレス、ペプチドホルモン、遺伝子改変マウス、行動実験
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>1. ニューロメジンUシステムの精神・神経疾患における臨床応用を目指した研究</p> <p>現在社会はストレス社会であると言われ、過度のストレスはうつ病やPTSDなどの精神・神経疾患の誘因となる。我々は、神経ペプチドであるニューロメジンU (NMU) システムの遺伝子改変マウスを用いた行動実験により、NMUがストレス応答に深く関与していることを見出している。現在、得られた研究結果をもとに、NMUシステムを介した精神・神経疾患の詳細な病態生理機構ならびに創薬標的としてのNMUシステムの可能性について研究を進めている。</p> <p>【研究業績】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Teranishi H, Hanada R. Neuromedin U, a Key Molecule in Metabolic Disorders. <i>Int J Mol Sci.</i> 22(8) :4238. 2021 2. Teranishi H, Hanada R et al. Role of neuromedin U in accelerating of non-alcoholic steatohepatitis in mice. <i>Peptides.</i> 99 :134-141. 2018

所属・職位	医学部医学科薬理学講座・助教	
氏名	寺林 健 (Terabayashi Takeshi)	
取得学位	博士 (医学)、東京大学、2007年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	薬理学、細胞生物学
研究キーワード	細胞運動、細胞骨格、上皮細胞恒常性
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>基底細胞恒常性維持シグナルを標的とした慢性炎症性皮膚疾患治療薬開発</p> <p>アトピー性皮膚炎など慢性炎症性皮膚疾患の発症・増悪化の大きな要因の1つが、表皮を構成する基底細胞の増殖と分化の不均衡によって生じる皮膚バリア機能異常である。しかしながら、基底細胞の増殖と分化のバランスを制御するシグナル伝達やその標的となる転写因子群については未だに不明な点が多く残されたままである。我々は、アクチン細胞骨格を基調として基底細胞の分化に関わる因子の同定を行ってきた。同定された因子の活性制御機構の解明を通じて、慢性炎症性皮膚疾患に対する治療戦略と治療薬開発に向けた基盤研究を進めている。</p> <p>がん細胞の浸潤・転移を抑制する天然由来化合物の探索</p> <p>がん細胞は走化性を獲得することにより、原発巣からの浸潤・転移を可能にする。生薬をはじめとした天然資源には様々な生物活性を有する化合物が含まれていることから、がんの走化性を標的とした成分の探索と同定を進めている。</p>

所属・職位	医学部附属地域医療学センター・助教	
氏名	土井 恵里 (Doi Eri)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2012年3月	
SDGs目標		



研究分野	医療
研究キーワード	高齢者
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・在宅の高齢者における口腔ケア、リハビリの実態とADL、QOLの関係 ・豊後大野市の医療介護に関するアンケート調査 ・在宅の高齢者における口腔ケア、リハビリの実態と問題点の抽出 ・国東市における地域包括ケアで求められる医師の役割 <p>看取りを含めた在宅医療を行うには、患者家族との信頼関係が大切であり、安心感を与えることが必要不可欠である。従って患者およびその家族の背景を理解し、寄り添いながら話を聞ける医師が必要だと思われる。また在宅医療を行っていく上で、患者・家族への適切な指導・助言を行うこと、若い医師に対しても在宅医療の教育が重要である。そして、地域包括ケアを円滑に推進していくためには多職種間での連携が必要である。医師は立場上接しにくいことが多いため、多職種間での顔の見える関係性作りが大切であり、各々の立場や職種について理解することが重要で、医師も多職種研修に積極的に参加することが大切である。地域性の異なる市町村における医療従事者の認識についてはさらなる研究が必要である。</p>




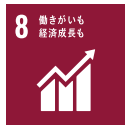

所属・職位	医学部医学科放射線医学講座・助教	
氏名	道津 剛明 (Dotsu Takeaki)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2008年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	画像診断、血管内治療全般
研究キーワード	血管内治療 スtentグラフト
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ol style="list-style-type: none"> ① 大動脈ステントグラフト治療の有効性や合併症に関する研究 (2019-) ② 大動脈ステントグラフト留置後のエンドリークに対する治療法開発 (2019-) ③ タイプIbエンドリークの血行動態解析に基づいた治療法の選択 (2019-) ④ 髄膜腫に対する至適塞栓物質の検討およびその有効性の確認 (2015-2016年) ⑤ 硬膜動静脈瘻に対する治療法の検討 (2010-2019年) <p>過去、脳神経領域を主として血管内治療全般的な研究を行ってきたが、現在は大動脈ステントグラフトの研究を中心に行っており、2020年5月の日本インターベンショナルラジオロジー学会では大動脈ステントグラフト留置後の合併症であるエンドリークタイプIbの血行動態解析や治療方法を解析、2021年4月の日本医学放射線学会総会ではエンドリークタイプIbに関する血管内治療および成績について報告を行った。</p>

医学部

所属・職位	医学部医学科臨床薬理学講座・助教	
氏名	中村 優佑 (Nakamura Yusuke)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2010年3月	
SDGs目標		
研究分野	皮膚科学、臨床薬理学	
研究キーワード	全身性強皮症、iPS細胞、低分子化合物、創薬	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>全身性強皮症患者由来iPS細胞を用いたモデルに対する抗線維化作用を有する低分子化合物の薬効評価に関する研究：</p> <p>全身性強皮症は、線維症の代表的な疾患で未だ有効な治療法が存在しない。全身性強皮症の疾患特異的iPS細胞を用いて薬効評価が可能な3次元<i>in vitro</i>細胞モデルを構築する。次にそのモデル系に対して当講座TCB(translational chemical biology)研究室で合成された細胞内タンパク質間相互作用を標的とした低分子化合物を加えることにより、その抗線維化作用効果を評価し、新規の抗線維化薬になりうるかを検討する。</p>	

所属・職位	医学部医学科解剖学講座・助教	
氏名	二宮 遼 (Ninomiya Ryo)	
取得学位	修士 (医科学)、大分大学、2014年3月	
SDGs目標		
研究分野	解剖学、細胞生物学	
研究キーワード	ピロリ菌、胃がん、オルガノイド	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>● <u>ピロリ菌感染による胃炎および胃がんの発生機序の解明</u></p> <p>ピロリ菌、特にCagAと呼ばれる毒素を持つピロリ菌は、胃炎や胃がんの発症に深く関与していることが報告されています。当研究室ではショウジョウバエを用いた遺伝学的スクリーニングにより、複数のCagA新規標的分子を同定することに成功しました。本プロジェクトでは、これらの標的分子について、マウスやヒトの胃組織、さらには胃組織幹細胞より作製したオルガノイドを駆使して解析を進めていき、新たな胃炎・胃がん発症機序の解明、および新規治療法の開発を目標とします。</p> <p>● <u>研究業績</u></p> <p>(1) <u>Ninomiya R et al (2021)</u> Inhibition of low-density lipoprotein uptake by <i>H. pylori</i> virulence factor CagA. Biochem. Biophys. Res. Commun. 556, 192-198.</p> <p>(2) <u>Iwasaki K, Ninomiya R et al (2018)</u> Chronic hypoxia-induced slug promotes invasive behavior of prostate cancer cells by activating expression of ephrin-B1. Cancer Sci. 109, 3159-3170.</p>	

所属・職位	医学部看護学科基盤看護学講座・助教	
氏名	野上 龍太郎 (Nogami Ryutaro)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2021年9月	
SDGs目標	   	

研究分野	基礎看護学
研究キーワード	基礎看護、看護技術
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>研究内容 文部科学省科学研究費 (若手研究) 「安全な気管吸引法確立のためのエビデンスの開発に関する研究」 気管吸引による気道粘膜への影響に着目し、より安全な気管吸引法確立を目的とした研究に取り組んでいます。</p> <p>研究論文 Ryutaro Nogami・Nobuhiro Kaku・Tatsuo Shimada・Tomonori Tabata・Hiroaki Tagomori・Hiroshi Tsumura、Three-dimensional architecture of the acetabular labrum in the human hip joint、Medical Molecular Morphology、Springer、Vol.53 No.1、pp21-27、March 2020</p>

所属・職位	医学部医学科歯科口腔外科学講座・助教	
氏名	野口 香緒里 (Noguchi Kaori)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2018年12月	
SDGs目標		

研究分野	歯原性腫瘍、顎骨壊死、歯科口腔外科手術での周術期管理
研究キーワード	エナメル上皮腫、ARONJ、有病者歯科
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>骨吸収抑制薬関連性顎骨壊死ははまだ治療法が確立していません。 適切な治療法を提案できるよう過去の治療の解析を行っています。</p> <p>歯科治療には思いがけない急変や気道トラブルが起きる可能性が多々あります。 医学部麻酔科学講座の協力の元、歯科医師が注意すべき全身既往歴による治療上でのリスクの認識や周術期管理の勉強にも力を入れています。</p>

役員

大学院教育学研究科
教育学部

経済学部

医学部

医学部附属病院

理工学部



福祉健康科学部

その他学内施設等





医学部

所属・職位	医学部医学科呼吸器・乳腺外科学講座・助教	
氏名	橋本 崇史 (Hashimoto Takafumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2018年12月	
SDGs目標	  	



研究分野	分子腫瘍学、外科腫瘍学
研究キーワード	非小細胞肺癌、EGFR遺伝子変異、耐性、腫瘍内不均一性
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●肺癌腫瘍内の遺伝子学的不均一性と薬剤耐性に関する研究 進行肺癌に対する分子標的治療の耐性化には、同一腫瘍内に多彩な遺伝子変異あるいは発現パターンを有する腫瘍内不均一性が関与していると考えられており、これまでに同一腫瘍内に異なる遺伝子パターンと細胞活性を有する部位があることを証明してきた (論文1)。さらに薬剤耐性の解析を進め、肺癌の予後向上を目指している。</p> <ol style="list-style-type: none"> 2018年、Hashimoto T, Osoegawa A, Takumi Y, Abe M, Kobayashi R, Miyawaki M, Takeuchi H, Okamoto T, Sugio K. Intratumoral heterogeneity of copy number variation in lung cancer harboring L858R via immunohistochemical heterogeneous staining. <i>Lung Cancer</i>.124:241-247 2018年、Osoegawa A, Hashimoto T, Takumi Y, Abe M, Yamada T, Miyawaki M, Takeuchi H, Okamoto T, Sugio K. Acquired resistance to an epidermal growth factor receptor-tyrosine kinase inhibitor (EGFR-TKI) in an uncommon G719S EGFR mutation. <i>Invest New Drugs</i>. 36(6):999-1005 <p>●胸部悪性腫瘍に対する低侵襲手術の開発 胸腔鏡手術やロボット支援下手術などの低侵襲手術を提供するとともに、それらの術式開発をすすめている。</p>

所属・職位	医学部医学科腎泌尿器外科学講座・助教	
氏名	羽田 真郎 (Hata Shinro)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2019年9月	
SDGs目標		

研究分野	泌尿器癌
研究キーワード	前立腺癌、低酸素
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>Angiopoietin-like protein 4 (ANGPTL 4) は、angiopoietinと構造上類似した蛋白であり、低酸素で誘導され、糖脂質代謝や血管新生因子としての働きが指摘されている。近年様々な癌において、診断および予後因子としての有用性が報告されている。前立腺癌においても、ANGPTL4は低酸素で誘導され、Aktのリン酸化を介してその増殖・遊走能が亢進することを発見した。また前立前全摘出標本におけるANGPTL4の発現は、術後生化学的再発の独立した予測因子であることも判明した。</p> <p>・ Hata, S., et al. (2017). Hypoxia-induced angiopoietin-like protein 4 as a clinical biomarker and treatment target for human prostate cancer. <i>Oncology reports</i>, 38(1), 120-128.</p> <p>・ Hata, S., et al. (2021). Degarelix as a neoadjuvant hormonal therapy for acute urinary tract toxicity associated with external beam radiotherapy for intermediate-and high-risk prostate cancer: a propensity score matched analysis. <i>Japanese Journal of Clinical Oncology</i>, 51(3), 478-483.</p>



所属・職位	医学部医学科神経内科学講座・助教	
氏名	花岡 拓哉 (Hanaoka Takuya)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2015年12月	
SDGs目標	  	

研究分野	神経内科学、臨床神経生理学
研究キーワード	神経筋疾患、認知症、神経生理検査
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>① 神経生理検査を用いた神経筋疾患の病態解明 論文：疾患関連遺伝子エクソーム解析によりLMNA遺伝子変異を認めたらミノパチーの1例. 中村憲一郎, 松田貴雄, 花岡拓哉, 後藤勝政, 松原悦朗 臨床神経学 2021</p> <p>② 認知症の発症に関する病態の解明と発症の予防 論文：Relationship between white matter lesions and regional cerebral blood flow changes during longitudinal follow up in Alzheimer's disease. Hanaoka T, Kimura N, Aso Y, Takemaru M, Kimura Y, Ishibashi M, Matsubara E. Geriatr Gerontol Int. 2016</p>




所属・職位	医学部附属臨床医工学センター・助教	
氏名	花田 克浩 (Hanada Katsuhiko)	
取得学位	博士 (理学)、東京大学、2001年3月	
SDGs目標		

研究分野	天然物化学、分子生物学
研究キーワード	遺伝子組換え、天然物化学、遺伝毒素、老化
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>遺伝毒素に関する研究を中心として活動をしている。我々の日常生活の中には、遺伝子にストレスを与える毒素が多く存在する。それらの毒素に対して、遺伝子を守る生体防御の仕組みを解明する研究をしている。生物の中には、生態系での生存競争で勝ち残るために遺伝毒素を積極的に生産し、活用しているものが存在する。そのような生物が生産する遺伝毒素の役割について解明したい。一方、視点を変えてこのような遺伝毒素のことを考察すると、特定の種類の生物を選択的に殺傷できる成分は、医薬品、農薬などに活用できる潜在的能力を有していると考えられる。我々は、遺伝子を環境から守る仕組みを理解することを目標に、我々が住む環境に存在する遺伝毒素の種類、作用に関する理解を深めると同時に、それを活用する技術開発研究を進めていきたいと考えている。 Inoue N, Terabayashi T, Takiguchi-Kawashima Y, Fujinami D, Matsuoka S, Kawano M, Tanaka K, Tsumura H, Ishizaki T, Narahara H, Kohda D, Nishida Y, Hanada K. The benzylisoquinoline alkaloids, berberine and coptisine, act against camptothecin-resistant topoisomerase I mutants. Sci Rep. 2021 Apr 8; 11(1): 7718.</p>



医学部

所属・職位	医学部医学科精神神経医学講座・助教	
氏名	平川 博文 (Hirakawa Hirofumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2022年3月	
SDGs目標		



研究分野	精神医学
研究キーワード	環境光、高照度光療法、光調整療法、脳画像研究
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>・光を応用した研究</p> <p>光の持つ抗うつ効果を、人工光を用いて活用する治療法として光線療法がある。現在、私は光と神経新生に着目して研究を行っている。健常成人に対して、1ヶ月間の高照度光照射を行ったところ、左海馬歯状回の体積が増加しており、同部位で神経新生が生じた可能性を示唆する所見を得た (Hirakawa et al., J Psychiatr Res, 2021)。</p> <p>また、¹⁸F-FDG PETを用いて環境光と脳機能の関連を精査した研究では、左小脳虫部の糖代謝と環境光が有意な負の相関を示した (Hirakawa et al., BMC Neurosci, 2018)。環境光により、気分抑制的に働く小脳虫部の機能を抑えて抑うつに傾くことを予防している可能性が示唆された。 https://www.oita-u-psy.jp/research/03.html</p>


所属・職位	医学部医学科小児科学講座・助教	
氏名	平野 直樹 (Hirano Naoki)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2010年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	小児科学
研究キーワード	小児血液腫瘍、QOL
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●小児がん長期生存者のQOL向上を目指した医療・教育・福祉の連携体制の確立に関する研究</p> <p>本研究は当院で治療を行い5年以上経過した、調査時年齢16歳以上の小児がん経験者50名を対象とした。患者背景と支援体制に関するアンケート表とQOL評価尺度を用いて、小児がん経験者のQOL関連因子の抽出を行った。小児がん経験者のQOL改善には、教育・行政機関での身体的状況に配慮した支援や、長期フォローアップでの年齢に応じた精神面への支援の強化の有効性が示された。(第61回日本小児血液・がん学会、2019年11月14日に報告した。)</p> <p>科学研究費助成事業 若手研究(B)課題番号17K13248 (2017~2019年度)</p>



所属・職位	医学部医学科脳神経外科学講座・助教	
氏名	札幌 博貴 (Fudaba Hirofumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2017年6月	
SDGs目標		

研究分野	脳腫瘍学
研究キーワード	腫瘍微小環境、ウイルス療法、画像診断、アドバンスケアプランニング
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●腫瘍微小環境、ウイルス療法に関する研究 中枢神経系原発悪性リンパ腫において、腫瘍辺縁に介在するマクロファージのSiglec-15発現が予後良好因子となることを見出した(Sci Rep 2021)。また、腫瘍溶解性単純ヘルペスウイルスを用い、悪性髄膜腫に対する有効性を検証している。</p> <p>●画像診断に関する研究 MRIによる新たな画像診断法(PASL)により、神経膠腫の分類や予後が術前予測できることを見出した(AJNR 2014, World Neurosurg 2021)。</p> <p>●アドバンスケアプランニングに関する研究 悪性脳腫瘍患者に対し、急性期病院におけるアドバンスケアプランニングの導入を行い、患者および家族のQOL改善に影響するか検証している。</p> <p>* 関連リンク https://researchmap.jp/hirotakafudaba</p>




所属・職位	医学部医学科公衆衛生・疫学講座・助教	
氏名	船越 弥生 (Funakoshi Yayoi)	
取得学位	博士 (医学)、熊本大学、2012年3月	
SDGs目標		

研究分野	公衆衛生学、疫学
研究キーワード	栄養疫学
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●骨密度を規定する生活習慣要因に関する疫学研究 栄養疫学を専門にしています。私のこれまでの研究成果では、生活習慣病は遺伝要因と環境要因の相互作用により発症することが明らかになっています。Relation of bone mineral density to vitamin D receptor gene polymorphism and lifestyle factors in Japanese female workers aged 22-44 years: a cross-sectional study.) 遺伝要因を変えることは出来ませんが、環境要因である食事、運動、休養、飲酒、喫煙などの行動を変容させるための方法について提供することが出来ます。</p> <p>疫学(Epidemiology)とは？</p>  <p>※関連リンク： https://jglobal.jst.go.jp/detail?JGLOBAL_ID=202101007178540260</p>

医学部

所属・職位	医学部医学科整形外科学講座・助教	
氏名	細山 嗣晃 (Hosoyama Tsuguaki)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	股関節学
研究キーワード	変形性股関節症、脚長差
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> 人工股関節全置換術前後における脚長差の影響とその因子 3Dテンプレートをを用いた術前計画におけるステムアライメントの検討 変形性股関節症診療ガイドライン策定委員会メンバー論文 <ul style="list-style-type: none"> 骨軟部腫瘍に対するGemcitabine+Docetaxel併用療法の効果 Orthopedics & Traumatology 64 (1), 176-181, 2015 Contemporaneous Insufficiency Fractures of Bilateral Femoral Necks in an Older Patient Taking Bisphosphonate: A Case Report and Literature Review Hiroaki Tagomori, Nobuhiro Kaku, Shota Sato, Tsuguaki Hosoyama, Hiroshi Tsumura Case Rep Orthop. 2022; 9294289. Published online 2022 Apr 29. Microvascular system of hip joint constituents with special reference to ultrastructural findings and early arteriosclerosis Nobuhiro Kaku, Tatsuo Shimada, Tsuguaki Hosoyama & Hiroshi Tsumura <i>Medical Molecular Morphology</i> volume 55, pages 158-165 (2022)



所属・職位	医学部医学科おおい地域医療支援システム構築事業講座・助教	
氏名	松田 史佳 (Matsuda Fumika)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2013年3月	
SDGs目標	 	

研究分野	小児内分泌学
研究キーワード	小児1型糖尿病、発達障がい、トランジション
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ●発達障がいに合併した小児1型糖尿病児の自立支援プログラムの開発 本研究では、発達障がいを有する1型糖尿病患児の特性について、アンケート調査と直接の聴き取りをもとに自己管理上の問題点を明らかにし、その上で患者と家族への新しい支援プログラムを確立することを目的としている。 科学研究費助成事業 若手研究(B)課題番号19K19677(2019~2023年度) ●大分県内の過去22年間の小児期発症の1型糖尿病の発症率 本研究では、小児慢性特定疾病のデータおよび大分県内の医療施設と協力し、得られたデータを用いて、大分県内の小児期発症した1型糖尿病の発症数・発症率の調査を行った。結果を第54回日本小児内分泌学会学術集会、第95回日本内分泌学会学術総会で発表した。 ●小児インスリン治療研究会(第5コホート) 小児期発症1型糖尿病の治療・予後改善のための多施設共同研究に、大分大学医学部附属病院のメンバーとして参加している。

所属・職位	医学部医学科環境・予防医学講座・助教	
氏名	松本 昂 (Matsumoto Takashi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標	   	



研究分野	感染症
研究キーワード	ゲノム解析、ヘリコバクター・ピロリ感染症、国際協力
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>アジア・アフリカ地域において現地政府および医療機関と連携し、公衆衛生上の課題となる感染症の制圧を目指す。次世代シーケンス技術によるヘリコバクター・ピロリのゲノム解析に取り組み、学部生、大学院生や海外若手研究者の育成に貢献する。AMEDとJICAが実施する地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム (SATREPS) では、ブータン保健省王立疾病管理センターにおけるゲノム解析基盤および迅速検査キット製造のキャパシティ・ディベロップメントと社会実装を目標とする。</p> <p>【業績リンク】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ research map: https://researchmap.jp/oita-u%5Ematsumoto ・ research-er.jp: https://research-er.jp/researchers/view/589799 <p>【講座ホームページ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ https://oitadepm.com/



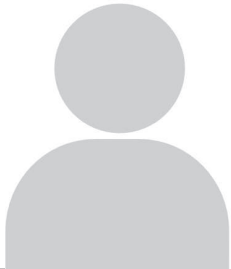

所属・職位	医学部医学科呼吸器・感染症内科学講座・助教	
氏名	松本 紘幸 (Matsumoto Hiroyuki)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2012年3月	
SDGs目標		

研究分野	呼吸器内科
研究キーワード	呼吸器感染症、抗酸菌感染症
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●活動性肺結核患者における胸部単純X線所見陰性例の割合と特徴に関する研究</p> <p>活動性肺結核における胸部単純X線所見陰性例の割合を調査し、その症例の特徴や背景について検討した (Matsumoto et al. Infect Dis. 2020;52(7):520-523)。</p>



医学部

所属・職位	医学部医学科呼吸器・感染症内科学講座・助教	
氏名	水上 絵理 (Mizukami Eri)	
取得学位	学士 (医学)、大分医科大学、2001年3月	
SDGs目標		

研究分野	呼吸器内科一般・慢性閉塞性肺疾患
研究キーワード	慢性閉塞性肺疾患、間質性肺炎
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>「慢性閉塞性肺疾患における胸部単純X線所見と重症度に関する検討」</p> <p>胸部単純X線検査所見とスパイロメトリーにおける呼吸機能検査結果の相関性を検討し、新たなCOPDの評価方法を模索することを目的とした検討を行っている。この結果により、健康診断やプライマリ・ケアの段階でCOPDを発見およびコントロールできる一助となりうることを期待できる。</p> <p>「6分間歩行試験と間質性肺炎の自覚症状の関係性の検討」</p> <p>超高齢化社会を迎え、90歳以上の間質性肺炎の患者数が増加傾向にある。高齢者のADLはもともと低下しており、呼吸困難の自覚症状と実際の呼吸状態が乖離していることも多い。高齢者の間質性肺炎の患者に積極的に6分間歩行試験を行い、解析を行うことにより実際の呼吸状態をより早くて正確に判断できる可能性が高い。</p>

所属・職位	医学部医学科法医学講座・助教	
氏名	村田 久美 (Murata Kumi)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2013年3月	
SDGs目標		

研究分野	法医学
研究キーワード	
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>2022年1月から法医学に所属しました。</p> <p>これまでは臨床医として働いており、数回、学会に参加してcase reportの発表を行う程度でした。今後は本教室で死後のCTから死亡経過時間を推定できる方法や、死後に髄液中で増減する物質等を解析したりしたいと考えています。</p>

所属・職位	医学部医学科精神神経医学講座・助教	
氏名	室長 祐彰 (Muronaga Masaaki)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2016年3月	
SDGs目標		

研究分野	精神医学
研究キーワード	気分障害、双極性障害、薬物療法
研究内容・研究業績・アピールポイント	気分障害における抗うつ薬や気分安定薬、非定型抗精神病薬の効果に関する後方視的研究 双極性障害や双極スペクトラムの再発予防の中心となる薬物療法の効果を検討しており、双極Ⅰ型障害、双極Ⅱ型障害、双極スペクトラムの長期経過と、それに及ぼすリチウム、バルプロ酸、カルバマゼピン、ラモトリギン、抗うつ薬、抗精神病薬、ベンゾジアゼピン系薬剤の影響を、後方視的に比較検討している。 https://www.oita-u-psy.jp/manage/wp-content/uploads/2021/05/optout1.pdf

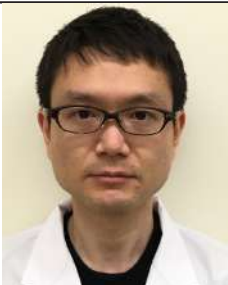


所属・職位	医学部医学科耳鼻咽喉科学講座・助教	
氏名	森山 宗仁 (Moriyama Munehito)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2019年3月	
SDGs目標		

研究分野	免疫学
研究キーワード	TREM-1、TLR-4
研究内容・研究業績・アピールポイント	・鼻咽腔粘膜における好中球機能とTLR4およびTREM-1の協調的作用に関する研究 今までの検討から、インフルエンザ菌性急性鼻副鼻腔炎モデルにおいて、TLR4およびTREM-1の協調的作用が存在することが推測されたため、マウスモデルのさらなる追加データにて検証を行い、鼻腔内に遊走する好中球と鼻粘膜組織に存在する好中球を採取し、副鼻腔炎症動態の変化をTLR4およびTREM-1との関連について組織学的、細胞生物学的、分子細胞学的手法を用いて解析を行っている。 (論文: Moriyama M, Hirano T, Kawano T, Kadowaki Y, Kodama S, Suzuki M.: Triggering receptor expressed on myeloid cells (TREM-1) expression on polymorphonuclear cells enhanced the bacterial clearance from the nasopharynx in synergy with TLR4. International Journal of Pediatric Otorhinolaryngology 112, 27-33 2018)

医学部

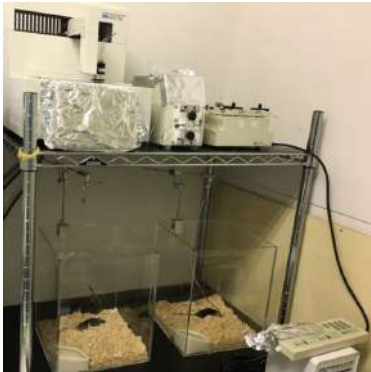
所属・職位	医学部医学科眼科学講座・助教	
氏名	八塚 洋之 (Yatsuka Hiroyuki)	
取得学位	博士 (医学)、大分大学、2021年3月	
SDGs目標	 	



研究分野	眼科学、細胞生物学
研究キーワード	ゼブラフィッシュ、CRISPR-Cas9、網膜変性
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●RNA代謝異常による遺伝性網膜変性症の疾患モデル作製と発症機序の解明</p> <p>RNAエキソソームは、様々なRNAを分解・修飾する多タンパク質複合体であり、RNAの品質管理に重要な役割を担っている。このRNAエキソソームを構成する分子の遺伝子変異は、網膜変性を含む神経変性疾患の原因となることが報告されているが、その病態機構については未だ不明な点が多い。本研究はRNAエキソソームに関連した疾患動物モデルを作製し、その解析を通して病態機構を解明することを目的とする。RNAエキソソームは生体の維持に不可欠であり、遺伝子改変マウスモデルでは胎生致死のため、解析が困難になることが懸念される。そこで、本研究では、疾患動物モデルとして、体外発生で胚が透明であり、発生早期から網膜を含めた神経発生が観察しやすく、電気生理、視覚機能等に関しての研究に多くの利点を備えたゼブラフィッシュモデルを使用する。ヒトで遺伝子変異が報告されているRNAエキソソーム構成分子のEXOSC2、EXOSC3、EXOSC8についての遺伝子改変ゼブラフィッシュをゲノム編集技術にて作製し、形態学的、生化学的、生理学的解析を行う。これらの解析を通して、網膜変性発生の原因の一端を明らかにし、また関連する神経変性疾患も含め、新たな診断法、治療法の解明につながる研究を進める</p> <p>※関連リンク： https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/33333712/#:~:text=Exosc2%20deficiency%20leads%20to%20developmental%20disorders%20by%20causing,17%3B533%20%284%29%3A1470-1476.%20doi%3A%2010.1016%2Fj.bbrc.2020.10.044.%20Epub%202020%20Oct%2024. </p>

所属・職位	医学部医学科産科婦人科学講座・助教	
氏名	矢野 光剛 (Yano Mitsutake)	
取得学位	博士 (医学)、埼玉医科大学、2019年3月	
SDGs目標	  	

研究分野	婦人科病理学
研究キーワード	卵巣がん、子宮体がん、ヒストン脱アセチル化酵素、バイオマーカー
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>婦人科がんの病理学的解析を介して、治療標的分子やバイオマーカーの同定を試みています。特に埼玉医科大学国際医療センター病理診断科での職務経験を活かして、同施設との共同研究を活発に行っております。卵巣がんにおいてはヒストン脱アセチル化酵素の治療標的としての意義 (論文1, 2)、子宮体がんにおいてはTP53やホルモン受容体の発現が患者予後に与える影響を発表しました (論文3, 4)。また多施設共同研究によって悪性黒色腫など婦人科稀少がんの病態解明にも取り組んでいます (論文5)。いずれのテーマも形態学的な差異/組織型に着目して研究しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Yano M et al. Sci Rep. 2019;9(1):2397. 2. Yano M et al. Anticancer Res. 2021;41(3):1647-1654. 3. Yano M et al. Mod Pathol. 2019;32(7):1023-1031. 4. Yano M et al. Diagn Pathol. 2019;14(1):54. 5. Yano M et al. Melanoma Res. (in press)

所属・職位	医学部医学科神経内科学講座・助教	
氏名	藪内 健一 (Yabuuchi Kenichi)	
取得学位	修士 (薬学)、九州大学、2001年3月	
SDGs目標		

研究分野	神経内科学, 認知症
研究キーワード	アルツハイマー型認知症, Aβオリゴマー, 抗体療法
研究内容・研究業績・アピールポイント	<p>●アルツハイマー型認知症に対する抗体療法の開発についての研究</p> <p>アルツハイマー型認知症は、認知症の原因の半分以上を占めますが、いまだに根治する治療がないため、21世紀の医療や介護、人的資源や経済に対して大きな負担になっています。この病気の発症には、どうやらAβオリゴマーという分子が関わっていることがわかってきておりますが、我々の研究グループはそのオリゴマーに対する特異的抗体を作り出すことに成功しており、現在その医療への応用に向けて研究を進めています。</p> <p>※ 関連リンクhttps://jglobal.jst.go.jp/detail?JGLOBAL_ID=201801013277423440</p>
	

所属・職位	医学部附属地域医療学センター・助教	
氏名	吉村 亮彦 (Yoshimura Katsuhiko)	
取得学位	学士 (医学)、大分大学、2011年3月	
SDGs目標		

研究分野	内科学一般
研究キーワード	内科学一般、地域医療
研究内容・研究業績・アピールポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・不定愁訴患者におけるコルチゾール値、炎症性サイトカイン値の解析 ・過疎地における医療満足度を高める要素の探求 ・無菌性髄膜炎に尿閉を合併したMenigitis retention syndromeの一例 ・発熱、意識障害を主訴に来院し、中枢性副腎不全の診断に至った一例 ・黄色爪症候群の1例